新撰字鏡 卷第二

神野部 米子二

武家名目抄稿十一 目次

遠族 一一三九
公達 一一四一
嫡子 繼男、正繼 一一四二
嫡孫 一一四五
庶子 一一四五
子息 一一四六
世嗣 一一四七
一家 一一四七

第四十二冊稱呼部七中

一族 一一五一
一族名字 一一五五
一門 一一五六
一黨 一一五九
一類 一一六〇
一味 一一六一
洞 一一六二
氏族 一一六二

家族 一一六三
家門 一一六三
門客 一一六四

第四十三冊稱呼部七下

門葉 一一六四
子孫 一一六四
後胤 一一六五
末葉 一一六五
末孫 一一六五
門下 一一六六
同名 同苗 一一六六
同姓 一一六七
親類 親族 一一六八
遠類 一一七〇
緣家 一一七一
外戚 一一七一
緣者 一一七一
通家 一一七四
客位衆 一一七四
枝葉衆 一一七四

第四十四冊稱呼部八上

大名 一一七五
外様大名 一一八五
國大名 一一八六
法師大名 一一八六

第四十五冊稱呼部八中

中名 一一八七
小名 一一八七
新家老 一一八八
補佐 一一八八
探題 一一八九
北陸道藩鎮 一一八九
高家 一一八九
陸方 一一九〇
黨 一一九四
餘黨 一一九五
與黨人 一一九六
坂東八平氏 一一九六
關東八家 一一九七
武藏七黨 一一九七

第四十六冊稱呼部八下

伴黨 一一九七
與黨 一一九七
殘黨 一一九八
伴類 一一九八
餘類 一一九九
從類 一一九九
一揆 一一九九
野伏 一二〇四

第四十七冊稱呼部九上

國持衆 一二〇七
一ケ國衆 今无 一二〇七
郡持衆 一二〇七
城持衆 一二〇七
御判預 一二〇七
關東衆 一二〇七
諸侯 一二〇八
國司 一二〇八
名國司 一二一一
太守 一二一一

地頭 一二一二
國主 一二一二

第四十八冊稱呼部九下

城主 城守 一二一四
領主 一二一八
郡主 一二二一
鄉主 一二二一
物主 一二二一

第四十九冊稱呼部十上

諸士之棟梁 一二二三
侍之棟梁 一二二三
侍 一二二三
布衣侍 一二二八
平侍 一二二八
遠侍 一二二九
悴侍 今无
若侍 一二二九
葉侍 一二二九
小侍 一二三〇
渡侍 一二三〇
步侍 一二三〇
國侍 一二三〇
地侍 一二三一
地下侍 一二三二
田舍侍 一二三三
鄉士 一二三三
侍名字者 一二三三

第五十冊稱呼部十中

雜色 一二三四
若黨 一二三七
用次 一二四二
僮僕 一二四二
僕從 一二四二
中間 一二四三

第五十一冊稱呼部十下

舍人 一二四六
小舍人 一二四六
小者 小人 一二四六
草苅 一二四八
足輕 一二四八
騎馬足輕 今无
步立射手 一二五三
步足輕 今无
鐵炮足輕 一二五四

武家名目抄稿第四十一冊

稱呼部七上

塙檢　校保己一編

○連枝

吾妻鏡云文治三年五月十四日辛卯左衛門尉祐經梶原三郎景茂于鎌倉秋鞠八田太郎朝重藤判官代邦通等面々相具下若等一向二靜旅宿一抗レ酒催レ宴郢曲盡レ妙靜母礒禪師又施レ盞云々景茂傾二數盃一極二一醉一此間通二艶言於靜一々頗落涙云豫州者鎌倉殿御連枝吾者彼妾也爲二御家人身一爭存二普通女一哉豫州不二牢籠一者對二面于和主一猶不レ可レ有事也況於二今儀一哉云々

梅松論云上野國より新田左衛門佐義貞君の味方として當國世良田に討出て陣をはる是も清和天皇の御后胤陸奥守義重陸奥新判官義康の連枝也潛に勅を承るに依て義貞一流の氏族皆打立けり

太平記云畠山道誓上洛條畠山大夫入道々誓左馬頭殿ニ向テ申サレケルハ故左大臣殿ノ御薨逝ノ後天下ノ人皆連枝ノ御中ニ始終如何樣御不快ノ御事候ヌト恠ミ思テ候

又云左馬頭基氏逝去條今年ノ春ノ頃ヨリ鎌倉左馬頭基氏聊不例ノ事有ト聞エシカハ貞治六年四月廿六日壬年二十八歳ニシテ忽逝去シ給ケリ連枝ノ鍾愛ハ多ケレトモ此別ニ至テハ爭カ可レ不レ悲云々

又云將軍御兄弟和睦條志合則胡越モ地ヲ不レ隔況ヤ同クハ父母ノ出ニ懷胞一浮沈ヲ共ニシ一日モ不レ離二咫尺一連枝兄弟ノ御中也一旦師直師泰等カ不義ヲ爲スルマテニテコソアレ何事ニカ骨肉ヲ離ルヽ心可レ有トテ將軍ト高倉殿ト御合體有ケレハ云々

又難太平記云基氏の御いもうとあまたおはしまして御公家重縁になりしかはその子共を今川の石川共云名兒耶とも云なり是は基氏の御養子成しかは故殿の御爲には連枝也仍建武の頃御所に申入給ひて御一流と成き

甲亂記云木曾義昌逆心條木曾ヨリ茅村三郎左衛門山村七郎右衛門ヲ以被二陳申一ハ(中略)又ハ信玄以來骨肉同胞ノ好ト申殊ニ當時連枝之御因不レ淺ハ爭小田原ニモ不レ被二思召直一事アルヘキヤ云々

松下集云ある時三寶院殿と申は若君樣の御連枝にて御座ありし亂のうちにて室町殿にましますときまいり御目にかゝりかたしけなくも御盃を下され一首つかうまつるへ

きよし有て御短冊を給はるに書付さし上申君かへむ齢は
左るや鶴と龜ならふ砌の松の下かけ
寶篋院殿將軍宣下記云延文三戊戌年十二月十八日之午刻
爲二勅使一以二日野時光一征夷大將軍宣旨也有二御頂戴一同廿
二日御參內の品々(中略)其次に御車其次に輿(將軍御連枝鎌倉殿ナリ參議三位兼左馬頭基氏)其次ニ輿(武衛也斯波中務大輔左兵衛督兼武藏守原義繩又足利とも名乘也)
明德記云小次郎申サレケルハ御意ト存候ハス宮殿北殿ハ
御同道有上ハ御心安キ御事也君御難儀モ出來テ御腹ヲ召
サル、御事有ラハ大將ノ御身ニ付申タル連枝ノ中一人ニ
テモ候ハス御計ニテ落サレタルトハ申スヘカラス只皆臆
病ニテ逃タリケルト世ノ人ノ口遊ニ罷成ヘシ其上小次郎
カ事ハ親ニテ候者ノ討死仕テ後ハ母計ニ養育セラレテ僧
ニモ時衆ニモ罷成ヘキ身ニテ侍リシヲ召出サレテ御恩連
枝ノ號ヲ汚ス一家ニ肩ヲ比スル身トマカリ成事併テ御厚
恩ノ至リ也
今川記云(關東亂條)鎌倉殿成氏打負テ鎌倉ヲ追落サレテ古河ノ
城ヘ移リシカハ上杉等頻に御訴訟申ニ因テ東山殿御連枝
彼天龍寺ノ香殿院殿ヲ還俗サセ奉リ關東ノ御所ト號シ左
馬頭に補任シ政知ト名付申鎌倉ヘ御下向有シカ共鎌倉ノ
諸大將猶成氏ヲ引申政知ヲ背キケル間鎌倉ヘハ入不レ申
上杉カ計トシテ伊豆ノ北條ニ御所ヲ立堀越殿ト申奉ル云
云
又云正長元年正月十八日御年四十三歳にてむなしくなら
せ給ふ御存生の中御遺跡の御さためもなかりし故御歿後
に至りて御家督の定め評定有或は御連枝の中御門跡衆あ
またあり是を俗に成し奉り御跡御相續有へしと云儀も有
或はかねて御望有し事なれは鎌倉殿をのほせ奉り御相續
有へしと云議も有し然共京都の管領武衛義淳細川持之朝
臣相談有て御連枝の御中にて御相續有へきに相きはまり
御門跡方の御名を書て八幡正八まんの御寶前にてくしを
取りけるに青連院三位公義圓と申に御鬮おりさせ給ふ此
御門跡は故勝定院殿樣と御一腹にて御心も不敵にて可
レ然公方にて御座よし沙汰有云々
康富記云寶德元年十一月廿二日今日室町殿御連枝若君
令レ入二室梶井御門跡一給今日初度也卽有二還御一云々
長祿寛正記云其頃ノ公法樣四十ニ及ハセ給トモ若君御坐
ナキコトヲ歎キ思召御連枝淨土寺殿義御門主ヲ還俗マシ
マシ御代ヲ渡申サルヘキニ定リ云々
在盛卿記云長祿二年四月七日御連枝小松谷殿(配所隱岐國云々)御左
遷の日次也御俗名(義則)自殺科云々今日侍所(京極)於二路次一奉レ

向レ之京極宿所爲二御所一
文正記云一揆大名同心密談而竊企二隱謀一公方御連枝今出
川殿將二上意一可レ有二御生害一之趣有二其聞一
應仁記云義政將軍御齡未四十ニアマラセ玉フニアラス心
地出來サセ給テ御連枝淨土寺殿御門跡ヲ還俗サセ申サレ
テ將軍ヲ相續シ今ヨリ御隱居有姿ニ老樂ノ榮花ヲ可レ開
ト思食立ケル
畠山記云上杉ハ武州五十子ニ旗ヲ立頻リニ京都ヘ申シテ
關東ノ主トシテ東山殿御連枝天龍寺ノ香殿院ヲ還俗アー
リ
快元僧都記云(天文六年)小弓上樣(義明)古河公方高基樣御連枝也先
父政氏樣御勘當奥州御下向有レ之云々
籾井日記云(八上氷上御先祖條)秀治公御成人ナサレ慈悲ノ御心フカキ
大將ニテ諸人ヨク思付申旨御連枝方ニ御男子二人御女子
二人アリ
太閤西國發向記云今度秀長延二諸國之大軍一定二制法一少
無二越度一任二存分一之條無二比類一之大將也殿下爲二御連枝一
條重職尤也云々
太閤記云兩人此狀を秀吉御前へ持出此旨かくと申上しか
は其心さしを感し給ふて可レ應二其求一之條可レ然の樣に相
斗可レ及二返簡一と卽蜂須賀杉原返簡之狀曰(中略)明日檢
使出る樣にと御使者被レ申候得二其意一存候四人の外縱雖
レ爲二長男連枝一切腹有レ之間敷旨被レ申候恐惶謹言五月三
日淸水長左衞門尉殿蜂須賀彥右衞門尉杉原七郎左衞門
尉
淸正記云今度信孝對二秀吉一及二鋒楯一雖レ爲二信長公御連
枝一可二誅果一事在二手裏一殊柴田修理亮瀧川左近將監と被二
仰合一義必定也
天正記云(信長公御葬禮條)秀吉もなさけ深き侍也御葬禮なくんは在
るへからす思ひなから歷々の年寄衆ことに御連枝おほし
一たん其はゝかりをあふき十月に至るまて法事をおこな
はす
○公達
吾妻鏡云弘長元年正月四日丙寅七日供奉事以二御點人數一
召進奉而最明寺殿公達御事者可レ被レ載二于如一散狀之次
第一所謂相模太郎同四郎同三郎同七郎如レ此是禪室內々
所二思食一也當時書樣頗違二御意一云々
太平記云(山崎攻條)足利殿ハ代々相州ノ恩ヲ戴キ德ヲ荷テ一家
ノ繁昌恐クハ天下ノ人肩ヲ可レ並モ無リケリ其上赤橋前
相模守ノ緣ニ成テ公達數多出來給ヌレハ此人ヨモ貳ハオ

ハセシト相模入道混ニ被レ憑ケルモ理ナリ

又云（足利殿御上洛條）足利殿ハ叛逆ノ企已ニ心中ニ被二思定一テケレハ中々異儀ニ不レ及不日ニ上洛可レ仕トソ被二返答一ケル則夜ヲ日ニ繼テ被二打立一ケルニ御一族郎從ハ不レ及レ申女性幼稚ノ君達迄モ不レ殘皆可レ有二上洛一ト聞エケレハ云々

播州佐用軍記云（羽柴秀吉播磨へ下給條）小寺一身之才覺ニヤ有ケン高孝父子其外之家老ヲ聚メ相談ヲ以テ當時信長公ノ武威ヲ聞キ傳ヘ歸服仕ラント決定シテ（中略）國中皆一族ニテ候程ニ彼等モ遠儀ニハ及マシ御公達ノ御中一人大將トシテ播州ヘ下シ給ヘ云々

氏鄕記云左兵衛大夫哀明智カ寄ヨカシ此御城ヲ枕トシテ御供申サント一途ニ思ヒ切レケルヲ賢秀ノ侍外池新介進出テ申ケルハ若此御城ニテ御自害候ハヽ信長公御臺君達ナト下蔕ノ囚人ト成セ給ハン事無二勿體一候ハン先御臺君達ヲ退サセ給ハンコソ故將軍ヘノ御忠節ニテ候ヘケント申シカハ賢秀ケテモトヤ思ハレケン左アラハ御臺所公達其外女房達ヲ日野ノ谷ヘ退申テ我居城ニコソ籠城ヲハセメ

○嫡子（嫡男正嫡）

京師本平治物語云（牛若奥州下向條）兵衛佐宣ケルハ陸奥ニ大切ニ思候ヘキ者一人アリソレヲ尋テ下リ給ヘ上野國大窪太郎カ女十三ノ年熊野ヘ參シ時故頭殿ニ見參ニ入テ此後イクラノ男出來候トモ是嫡子ニシタテ候ヘシ御覽シ知セ給ヘト申タリシカハ父ニ後レテ後同シ人ノ妻トナラハ平侍ノ妻ニハナラシ同クハ秀衡カ妻トナラントテ女夜逃ニシテ奥ヘ下ル程ニ秀衡カ郎等信夫小太郎ト云者道ニテ横取シテ二人ノ子ヲ儲ケタリ信夫ニ後レテ二人ノ子ヲハ別ニ置屋敷ナト得テ今モ後家分ヲ得テ乏シカラテアナルソソレヲ尋テ行給ヘトテ文ヲ書テ進ラセラル

吾妻鏡云治承四年八月十日庚寅秀義以二嫡男佐々木太郎定綱一昨日景親所レ談之趣申二送武衛一云々

又云建久四年九月十一日甲戌江間殿嫡男童形此間在二江間一昨日參着去十七日卯剋於二伊豆國一射二獲小鹿一頭一則令レ相二具之一

又云正治二年十二月廿日丁未亥尅景時父子到二駿河國清見關一而其近隣甲乙人等爲レ射レ的群集及二退散之期一景時相二逢途中一彼輩怪レ之射二懸箭一仍蘆原小次郎工藤八郎三澤小次郎飯田五郎追レ之景時返二合于狐崎一相戰之處飯田四郎等二人被二討取一畢（中略）又景時並嫡子源太左衛門景季（年卅九）同弟平次左衛門尉景高年卅六引二後山一相戰而景時景高景則等雖レ貽二死骸一不レ携二其首一云々

又云建仁三年九月二日丁卯及二申尅一景廉知景景長等并郎從數輩被レ疵頗引退重忠入二替壯力之郎從一責二攻之一親景等不レ敵二彼武威一放二火于館一各於二若君御前一自殺若君同不レ免二此殃一給上廷尉嫡男餘一兵衛尉假二姿於女人一雖レ遁二出戰場一於二路次一爲二景廉一被二梟首一其後遠州遣二大岳判官時親一被レ實二檢死骸等一云々

又云承元二年八月廿日丁亥故大夫判官義成嫡男左兵衛尉時成參上讓二得亡父遺跡一也於二朝恩一無二異儀一云々

伯耆之卷云元弘二年三月廿八日傍なる男か申けるは嫡子の殿こそ京へは上られて候へ大殿は是に御座候ものを云云

應永記云去程ニ山名陸奥守ノ嫡子宮内モ得二其時一タリト是モ大内ニ同心シテ丹波國宮田ニ打入リ自レ其都ヘ責入テ京中ヲ燒拂八幡ノ御陣ニ懸リテ亡父ノ本意ヲ可レ遂トテ三百餘騎ニテヲイツケニ打越ル小番衆二頭兩陣ヲ張テ待懸タリ云々

結城戰場物語云或時尊氏御孫かまくらのもちうちの給ひけるは嫡子けんおう丸今年すてに十三なり元服させんと思ふに烏帽子親にとるべきものなしいかゝせんとの御去うけ給て申けるは天下あんおん實やうなり上杉あはの守憲國土ふにう成は當家しせいによつてなり玄かれとも京都と御不和の御事玄かるひやうも候はすいにしへのいしゆをひるかへし京都と御和睦ましまして若君の御元服都にて候はゝ國土いよ〳〵無事にして當家御はんしやううたかひなしと申上たりけれはかまくらとの氣色もつての外に見えさせ給へは上杉は面目をうしなふて御前を罷立ち云々

建内記云嘉吉元年六月廿六日辛卯今曉若君（八歳）自二伊勢守貞經宿所（年來爲二御所一）渡二御室町殿（上御所事也）御繼家事昨日諸大名定申故也云々御舍弟六人同渡二御同所一也但於二御舍弟之若君一者內々自レ畫渡御歟於二御嫡子一者先去夜渡二御畠山播磨許一爲二御方違一云々自レ彼今曉渡御其時諸大名供奉云云昨日御衣日之間今曉有二此儀一歟

江濃記云稻葉助七ト名乘リ赤尾ニ掛ル野村肥後是ヲ見テアノ武者我ニタヒ玉ヘト兩方ノ中ヘ飛入稻葉ト鑓ヲ合セシカ稻葉上鑓ニナリ野村カ妻手ノ肩ヲ突ケレトモ事トモセス十文字ニテカケタホシ頸ヲトル左塚二郎四郎ト名乘野村ヲ打ントヲ引返ス赤尾美作カ嫡子新兵衛ト名乘互ニ鑓ヲ合セ赤尾カ郎等中ニ隔テ二郎四郎ニ切テカヽル

荒木略記云荒木大藏大輔丹波の波多野一門にて御座候攝津國へ牢人仕候て武庫郡小部莊と申處に小身の體にて居申候由申候荒木弓兵衛大藏少輔嫡子久兵衛子も久兵衛と申候此孫松平相模守殿に居申候

羽尾記云上州吾妻郡羽尾ト云山里ニ羽尾入道何某ト云侍アリアマタ男女ノ子ヲモテリ嫡子羽尾入道幸全二男海野長門守幸光三男海野能登守四男海野郷左衛門第五ハ女是ハ大戸心樂齋室ナリ海野能登守嫡子ウンノ中務第二女ハ赤見七郎左衛門室ナリ

河越記云上樞近作はいま河越の館に引籠て十餘年の春秋を送りむかへぬいつよりか例ならすこゝちそこなひていにし夏卯月下旬とかや世をはやくさりぬ嫡男五郎朝定生年十三歳にして代をつき家をまもらしむとかや

奥羽永慶軍記云佐竹武蔵盛季付宇都宮條故義昭ニ男數多アリ嫡子義重二男那須與一資家後常州臨號ニ佐竹左衛門義尚故ニ那須七黨モ多ハ佐竹ニソ屬シケル三男小場六郎義宗也

豆相記云早雲長子氏綱左京大夫氏綱嫡嗣氏康十六歳率ニ豆相二國之甲士ニ發ニ武州一自ニ享祿三一迄ニ天文五一七年之間於ニ武州品川神名川府中高井戸所澤瀬田谷等邑一與ニ上杉一挑レ戰北條每レ戰必勝候

甲亂記云小山田出羽守心菅井勝賴最後條爰ニ又勝賴ノ嫡男太郎信勝生年十六歳ニ成給フカ勝賴ニ立雙切テ剋玉フ風情ハ只雜ノ花ニ戲ル、胡蝶ノ如シ

天正記云武田一族滅亡條信忠先勢川尻與兵衛尉瀧川左近大夫入道やまなかへおつゝめ數ヶ度合戰に及武田勝賴同嫡子太郎同左馬助勝定逍遙軒幷一そくと〳〵く首をうちきたる

又云柴田權六佐久間玄蕃生捕條勝家嫡男柴田權六佐久間玄蕃のすけは越前の府中山林をかりしやうのうらに來り後しやうとし隣國はう〳〵の城引渡し權六江州さね山においてこれをちうす

又云秀吉公尾州進發天下定めの條秋田城介平の朝臣信忠ちやく男天下のえゆくんと定織田三介信雄尾州のやかたと定む同三七のふたかを濃州のやかたと定む

太閤記云天正十一年城主定ノ條宇喜田和泉守直家備前美作兩國を領(中略)秀吉卿へ丹忠を拔出奉公の實を盡しけれは彌昵く成しか天正八年の春身まかりけれとも嫡子八郎後任ニ中納言に父の跡をつかせ家臣の面々も悅ひあへりき

新田由良家傳記云抑上野國新田由良の御家は人王五十六代清和天皇の皇子貞純親王より六代八幡太郎義家の御子足利式部大輔義國の御嫡子新田太郎義重公後大炊助號ニ新田入道殿一是新田の元祖也

又云義重公御正嫡新田太郎皇嘉門院藏人義象公より三代新田太郎政義公後に號ニ由良太郎一云々

又云貞國公の御嫡男横瀨新六郎國繁公後信濃守御法名宗悅新撰菟玖波集の作者なり

當代記云元龜三壬申年十二月廿二日於ニ濱松野一德川家康合戰信甲衆乘レ勝又先年信玄ノ嫡男武田太郎義信ヲモ生害シ給キ其故ハ義信討レ父可レ取ニ家督一ノ由隱謀ノ處信玄聞レ之遮而義信ヲ行ニ籠者一終以ニ鴆毒一被ニ相果一

○嫡孫

太平記云大塔宮熊野落條大塔宮京都ヲ落サセ給ヒテ熊野ノ方へ赴セ給候ケンナル三山ノ別當定遍僧都ハ無二武家方ニテ候へハ熊野アタリニ御忍アラン事ハ難レ成覺候哀此里へ御入候へカシ所コソ分内ハ狹ク候へ共四方皆嶮岨ニテ十里二十里カ中へハ鳥モ翔リ難キ處ニテ候其上人ノ心及レ僞弓矢ヲ取事世ニ超タリサレハ平家ノ嫡孫惟盛ト申ケル人モ我等カ先祖ヲ憑テ此處ニ隱レ遂ニ源氏ノ世ニ無レ恙候ケルトコソ承候ヘト語ケレハ宮ハ誠ニ嬉シケニ思食タル御氣色顯レテ若大塔宮ナントノ此所へ御憑アテ入セ給ヒタラハ被レ憑サセ給ハンスルカト問セ給ヘハ戸野兵衛申ニヤ及ヒ候身不肖ニ候へ共某一人タニ斯ル事ソト申サハ鹿瀨蕪坂湯淺阿瀨川小原芋瀨中津河吉野十八郷ノ者迄モ手刺者候マシキニテ候トソ申ケル

又云長崎次郎高重最後合戰條高重今ハトテモ敵ニ被ニ見知一ヌル上ハト思ケレハ馬ヲ懸居大音揚テ名乘ケルハ桓武第五ノ皇子葛原親王ニ三代ノ孫平將軍貞盛ヨリ十三代前相模守高時ノ管領ニ長崎入道圓喜カ嫡孫次郎高重武恩ヲ報センタメ討死スルソ高名セント思ハン者ハヨレヤ組セント云儘ニ鎧ノ袖引チキリ草摺アマタ切落シ太刀ヲモ鞘ニ納ツゝ左右ノ大手ヲ播テハ此ニ馳合彼ニ馳替大童ニ成テ驅散シケル

○庶子

應仁略記云山名の入道衞門の佐出頭の事を申沙汰す是を始として庶子惣領の諍ひ所領相違の鬱憤我も々々と折を伺ふ類ひ手を立たるか如し

勢州四家記云木造家は國司の甥也父子國司にそむき信長公につく是は木造家の菩提所源淨院と同長拓植三郎左衞門か進むるによりてなり是以て南方衆木造陣有ニ源淨院一は木造家の庶子羽柴下總守と云は是なり

今川了俊書札禮云庶子一族より惣領の方へ被レ遣候狀も如レ此進上恐惶謙言にて當時は人々御中又其人の居候所

の名なと可ㇾ書にて候恩顧の人一族にても候へ恐惶進上と可ㇾ書候也

○子息

吾妻鏡云治承四年五月廿六日丁丑卯尅宮令ㇾ赴二南都一御三井寺無勢之間依下令ㇾ恃二奈良一御上也三位入道一族并寺衆徒等候二御供一仍左衛門督知盛朝臣權亮少將維盛朝臣已下入道相國子孫率二二萬騎官兵一追二競於宇治邊一合戰三位入道同子息仲綱兼綱仲宗及足利判官代義房等梟首云々

又云治承四年八月九日己丑有二近江國住人佐々木源三秀義者一平治逆亂時候二左典厩御方一於二戰場一竭二兵略一而武衛坐ㇾ事之後不ㇾ奉ㇾ忘二舊好一分不ㇾ諛二平家權勢一之故得二替相傳地佐々木庄之間相二率子息等一恃二秀衡秀義姨聟也夫也一赴二奥州一云々

又云元歷元年二月二日辛酉樋口次郎兼光梟首澁谷莊司重國奉ㇾ之仰二郎從平太男一而斬損之間子息澁谷次郎高重斬ㇾ之但去月廿日合戰之時依ㇾ被ㇾ疵爲二片手打一云々

又云文治二年二月一日己酉左典厩能保并室家男女御子息被ㇾ參二鶴岡八幡宮一被ㇾ奏二神樂一別當供僧及職掌各有二賜物一是近日依ㇾ可ㇾ有二歸洛一今有二此儀一云々

又云正嘉元年十一月廿三日甲戌酉尅越後守實時朝臣息男於二相州禪室御亭一元服號二越後四郎時方一理髮丹後守頼景加冠相模太郎七歲

太平記云龜壽殿令落信濃條愛ニ相模入道殿ノ舍弟四郎左近大夫入道ノ方ニ候ケル諏方左馬助入道カ子息諏方三郎盛高ハ數度ノ戰ニ郎等皆討レヌ

又云長崎父子武勇條長崎父子左右ヘ別テ馳向ハントシケルカ子息勘解由左衛門是ヲ限ト思ケレハ名殘惜ケニ立止テ遙ニ父ノ方ヲ見遣テ兩眼ヨリ泪ヲ浮ヘテ行モ過サリケル

又云足利殿御上洛條長崎入道圓喜怪ミ思テ急キ相模入道ノ方ニ參テ申ケルハ誠ニテ候哉覽足利殿コソ御臺君達マテ皆引具シ進セテ御上洛候ナレ事ノ體怪ク存候(中略)如何樣足利殿ノ御子息ト御臺トヲハ鎌倉ニ被二留申一テ一紙ノ起請文ヲ書セ可ㇾ被ㇾ進トコソ存候ヘト申ケレハ相模入道ケンモトヤ被ㇾ思ケン頓テ使者ヲ以テ被二申遣一ケルハ東國ハ末世閑ニテ御心安カルヘキニテ候幼稚ノ御子息ヲハ皆鎌倉ニ留置進セラレ候ヘシ云々

圓太曆云貞和元年八月六日依二相模入道子息天亡事一自二昨日一七箇日被ㇾ止二奏事一云々七日無二御敎書并奏事一自二來十二日一可ㇾ有二沙汰一云々

政所賦名引付云文明十一年四月四日澤井與次郎通久時岡民部丞ニ預置金四十兩料足八十貫事且令二返辨一彼子息新右衛門無沙汰云々

甲陽軍鑑末書云相木市兵衛子息山縣三郎兵衛尉ニ成也

又云扨家康ノ使右ノ奥意ヲ矢部善七ニ粗申ユヘ信長出ラルヽト也其年信長ハ四十二歲子息城之助二十歲其弟十八歲家康三十四歲子息十七歲五大將ニテ其ノ國郡ヲ考レハ九萬二千餘ハ有ヘケレ共ウチヲ取テモ堅七萬餘ハ有ヘシ此大軍ヲ以テ陣ヲ張云々

○世嗣

奥羽永慶軍記云津輕左京亮攻落波岡城條抑九戸政實何故ニカヽル切ナル時先陣ヲ辭シケルト其淵底ヲ尋ルニ先年信直南部ノ家督ヲ繼シ時諸人九戸政實カ舍弟實親ヲ世嗣ニ立ントヽ望シ者モ多カリケリサレハ實親南部ヲ嗣ナラハ領内ハ心ノマヽ成ヘキト思シニ北左衛門カ計トシテ信直世嗣トナルノミナラス舍弟實親ハ信直ノタメニ討レタリ云々

○一家

保元物語云大將ハ赤地ノ錦ノ直垂ニ黑絲威ノ鎧ニ鍬形打タル兜ヲ著黑馬ニ黑鞍置テ乘タリケリ鐙蹈張ツタチカヽリ大音揚テ淸和天皇九代後胤下野守源義朝大將軍ノ敕命ヲ蒙テ罷向フ若一家ノ氏族タラハ速ニ陣ヲ開テ退散スヘシトソ宣ケル

吾妻鏡云承久三年五月十九日壬寅自二京都一可ㇾ發二坂東一之由有二其聞一之際相模權守武藏守相二具御勢一所二打立一也以二武部丞一向二北國一此趣早相二觸一家人々一可ㇾ向者也

承久軍物語云其中するかのかみの手のもの佐原の次郎天野の左衛門尉はせむかつてこれを見ててきこそおほけれあの殿原といくさして何かせんとてす、ますされとも佐原の又太郎廿騎はかりにて進出てたゝかふ平九郎判官これを見てわきみはおなし一家といひなからたねよしには法師あるへきとこそおほえしに進みよるこそにくけれあれこそものともといひけれははんくはんかゑそく太郎兵衛次郎兵衛高井兵衛太郎おつかけてゆく

梅松論云今西國より責上り候はゝ洛中の大將軍の方にむかふへき間旁御本意を達せらるへし先四國へは細川の一家下向あるへし

太平記云千劍破城軍條城ノ大手ニ三木唐笠ノ紋書タル旗ト同き文ノ幕トヲ引テ是コソ皆名越殿ヨリ給テ候ツル御旗ニテ候ヘハ御文付テ候間他人ノ爲ニハ無用ニ候御中ノ人々是ヘ御入候テ被ㇾ召候ヘカシト云テ同音ニトツト笑ケレハ天下ノ武士トモ是ヲ見テアハレ名越殿ノ不覺ヤト口々ニ

云ヌ者コソナカリケレ名越一家ノ人々此事ヲ聞テ安カラヌ事ニ被レ思ケレハ當手ノ軍勢トモ一人モ不レ殘城ノ木戸ヲ枕ニシテ討死ヲセヨトソ被二下知一ケル

又云赤橋相模守自害條赤橋相模守侍大將ニテ同陣ニ候ケル南條左衛門高直ニ向テ宣ヒケルハ盛時ニ於テハ一門ノ安否ヲ見果ル迄モナク此陣頭ニテ腹ヲ切ント思フ也其故ハ盛時足利殿ニ女性方ノ緣ニ成ヌル間相模殿ヲ奉レ始一家ノ人々サコソ心ヲモ置給ラメ

又云節度使下向條左馬頭直義仁木細川高上杉ノ人々將軍ノ御前ヘ參シテ已ニ御一家ヲ傾申サレン爲ニ義貞ヲ大將ニテ東海東山ノ兩道ヨリ攻下候ナル云々

又云山崎攻城足利殿ハ代々相州ノ恩ヲ戴キ德ヲ荷テ一家ノ繁昌恐クハ天下ノ人肩ヲ可レ並モ無リケリ

難太平記云此一家の事も可二奉行一と故入道殿の御置文も有けるなれとも上の明にわたらせ給はぬ故にかやうの不道不義の親類等も時にあひたるにや云々

明德記云山名ノ小次郎トテ生年十七歲ニ成ケルカ先年和泉國土丸ノ城ニテ討死シ給シ山名ノ右馬頭ノ子息也（中略）親ニテ候者ノ討死仕テ後ハ母計ニ養育セラレテ僧ニモ時衆ニモ罷成ヘキ身ニテ侍リシヲ召出サレテ御恩連枝ノ號ヲ汚ス一家ニ肩ヲ比スル身トマカリ成併ラ御厚恩ノ至リ也

嘉吉記云山名金吾カ早速大功ヲ賞シ播磨國ヲ被レ下同修理大夫美作國ヲ拜領シ相模守備前國ヲ拜領シケレハ山名一家ノ人ニ肩ヲ雙フル人ナクソ見エシ

齋藤親基記云文正二年正月廿日忿劇落居大名御禮（中略）右京兆同一家并京極等無二出仕一

應仁略記云まことに逆黨家より出て國をおかすは巴季百王一百四代このかたはしめ也といつゝへきかおよそそのかみ一仁のおそれたちまちにちよくたうをおほひ國に武將のあるしいます上裁すこふるなきに似たりこれすなはちいんし文安寶德年中このかたか諸大名おの〳〵一家の中よりあらそひ出來して分國々々大亂かさなり來れり

季瓊日錄云長享三年四月九日丁酉不參天快晴五更起行事如レ恒課二大般若一來明赴二北等持一細川右京兆政元公自二正脈院一來入二佛殿一立二本尊前一淨衣風折竹杖草鞋（中略）一家衆右馬頭道勝入道殿以下數輩有レ之云々

蜷川親俊記云天文八年閏六月廿二日戊子從二貴殿一對二伊勢守一御書御副狀之旨申聞候了尤以令二畏存一候由何も御報申入候誠其後御無音條無二御心元一存候處恩問祝着至候由貴所へ得二其意一可二申達一候旨申就中御一家鋒楯未休の由候御苦勞の段奉レ察候急度被二相調一之上意へ御禮御申可二目出一候云々

宗五大雙紙云主人え御手水まいらせ候事ははんさうに水を入てたらひの中に置其上に御手のこひをたゝんておくへし其御手拭を取て肩に打かけて御手水をかけ申へしかけはて、肩をよせ候へは其御手拭を取て御手を御のこひ候公方樣御手水は女中上臈の御役なり御成抔の所にては御供衆の內御一家の人かけ申され候也樣體同前

御產所日記云上樣御成（中略）御乳母參上若君樣同御袋御方樣御打紙進二上之一管領參勤之間細川一家人々同御供人人役人等各御太刀金南御所へ進上云々

家中竹馬記云抑當家土岐殿者滿仲の長子賴光の苗孫として清和源氏の家嫡なり等持院殿尊氏將軍の御一家の次諸家の頭たるへき由土岐伯耆入道殿頼貞法名存孝號二定林寺殿一に被二仰定一ける以來今に至るまて其證跡勿論也

又云公方樣の御劍は御供衆にても御一家の持る、也何方へも御成の時は馬上に左帶にして我右に帶なと云御輿の跡に被レ參なり公方樣の御先打は御一家のせらる、也畠山將監殿なと沙汰有しとなり

高忠聞書云小笠原懸の日記はやう人の名字のかたなを書也大名または御一家なとは御かたなを書なり其より下に丸をしてはつれを黑むるなり

愚耳舊聽記云大光寺城貴條御承引においては望に任かせ御人數を引あけさせ給は、瀧本一家の者共難レ有可レ奉レ存と誠によきなく申ける

沙彌洞然長狀云御受領の事は從二京都一口宣御敎書御內書等頂戴候數通相添御文書候既一家之ものまて御敎書等被レ成候云々

江北記云當方御家わかうの事六角殿大原殿其外一圓殿道譽御兄弟也有二子細一御家子に被レ成候也然とも公方役には當方御名代めされ候由御家子にて候間御屋形樣御おくりには御出なきなり御座敷にて御あいしらいは大略御一家衆同前也

勢州四家記云當昔伊勢國は四家に分て守護せり南五郡は國司領なり北八郡は工藤の一家關の一黨其外北方の諸侍守護の故に國司家と工藤家と戰ひ工藤家と關家と戰ひ關家と北方諸侍と戰ひ朝暮兵亂止事なし

武陰叢話云越後上田の城主長尾政景は謙信妹聟にて大剛の大將なり謙信はとかく政景を六ヶ敷おもひ給ひ永祿七

年五月五日に宇佐美駿河守を呼敢景を討へきとの密談有宇佐美申候は御一家と云御妹壻といひさして見えたる事もなきに誅伐有ん事世間の誂り末代の惡名也思ひ止り給ふへし云々

又云大崎玄蕃頭長行は關ヶ原陣の時は福島正則舅津田備中守繁元に差添尾州清須城の留主を致す正則は會津へ向ひ其跡にて石田治部逆心し尾張口へ出大垣の城に居木村宗左衛門を差越正則御事秀頼公御一家なれは御内意は大坂御一味也早々其城へも此方人數入然るへしとはかる云云

三好家成立之記云大形殿實休後室長治母儀篠原肥前入道自遁ト密通ノ事無二其隱一依レ之篠原彈正法名紫雲ハ一家ト云智音ト云自遁ヲ近付不義ノ仕合也トテ誅ケル依レ之大形殿彈正ヲ增給其時ノ落書ニ大形ノ心ヲ空ニ篠原ヤ猥ニ立シ名社惜ケレ彈正ハ大形殿ニ憎レケレハ櫻城ニ引籠リ居タリケリ

伊達日記云オシナヘテ伊達御奉公ノ樣ニテ月齋方梅雪方ト申樣ニテ候然處ニ大越紀伊守ト申モノ田村一家ニテ義胤ハイトコニ候田村二番ノ大名ニ候

又云會津一家金上遠江ハ我等家中齋藤太郎右衛門討申候其外佐瀨平八郎ヲ始千五百八十餘リニ候其夜ハ猪苗代へ被二引上一候而翌日金川へ御ハタラキ被レ成候

甲陽軍鑑末書云信玄云御一家衆譜代ノ侍大將衆其外人數ヲ持給人々盡ク召寄ラレ被レ仰ハ五年以來此煩ヲ大事ト思判ヲスヘ置紙八百枚ニ餘有ヘシトテ各ヘ渡シ給

今川大雙紙云初獻の盞をは誰にても客人の位によりて主人の一家一族家子持て出へし

荒木略記云荒木一家中川瀨兵衛相談にて勝政を追出し直政を取立候處直政猶以惡人に候付此上は大將に可レ仕者なく候間云々

蘆名家記云天正十三年夏ノ比蘆名龜王殿早世也玉フサルニ依テ四天ノ宿老十六人ノ蘆名御一家ノ衆執權金上遠江守皆々ヲ名山ノ城ニ集テ御智名跡之義評定有ケリ

武家名目抄稿第四十二冊

塙檢校保己一編

稱呼部七中

○一族

奥州後三年記云爰にみちのくに奥六郡を領せし鎮守府將軍清原武則か孫荒河太郎武貞か子直衡か富有の奢過分の行跡より起りて一族なから郎從となれりし秀武ふかきうらみをふくみて合戰をいたす其餘殃廣に及てつひて武衡家衡をせめられしに大軍ちからをつくし勇士名をあくる戰ひそのかすをしらす

吾妻鏡云治承四年五月廿六日丁丑卯尅宮令レ赴二南都一御三井寺無勢之間信令レ特二奈良一御也三位入道一族幷寺衆徒等候二御供一云々

又云治承四年八月六日丙戌召二邦道昌長等於御前一有二下筮一又以二來十七日寅卯刻一點下可レ被レ誅二兼隆一之日時上訖其後工藤介茂光土肥次郎實平岡崎四郎義實宇佐美三郎助茂天野藤内遠景佐々木三郎盛綱加藤次景廉以下當時經廻士之内以下殊重二御旨一輕二身命一之勇士等上各一人次第召二拔閑所一令レ議二合戰間事一給雖レ未二口外一偏依レ恃レ汝被二仰合一之由每レ人被レ竭二懇懃御詞一之間皆喜二一身拔群之御芳志一面々欲レ勵二勇敢一是於レ人雖レ被レ禁二獨步之思一至二家門草創之期一令レ求二諸人之一族一給御計也然而於二眞實密事一者北條殿之外無二知レ之人一云々

又云文治五年九月七日甲子宇佐美平次實政生二虜泰衡郎從由利八郎一相具參二上陣岡一(中略)被レ上二御幕一覽レ之仰曰已主人泰衡者(中略)凡管二領兩國一乍レ爲二十七萬騎之貫首一百日不二相支一廿箇日內一族皆滅亡不レ足レ言事也云々」

承久軍物語云こゝに遠江住人うちたの四郎か申やう十九きつれたるむしやのはやたかし山に入ぬと申ければさかみのかみいかなるものなれは先陣をこえてさきさまへはとほりけるそもしてきのたはかりて大せいにまきれてのほることもあるらん各おつかけてかたきかみかたかたつねきけとのたまひしをうけたまわると申してうちたの四郎同六郎にいの、むまのさうこれをはしめとして六十餘騎おつかけたり(中略)さかみのかみとの、御つかひにとほたうみの國の住人うち田のものともか參てけるといはせけれは十九きのせいこれはゑもふさのかみの一そくにみうらつく井の四郎太郎と申ものにて候此ころかわんと

うに所用ありて下り候ひしか都にさわかしき事のてきたる由うけたまはり候へはまかりのほるところにこゝにて大せいに參りあふ事こそうんのきはめちからおよはす一人もきたなけには去すましそあひちかにはれとそ申されける

梅松論云將軍家の御後見として政務を申行ひ天下を治め武藏相模兩國の守をもて職として一族の中の器用を撰ひ著して御下文下知等を將軍の仰らるゝにより申し沙汰しける云々

伯耆之卷云成田入道を召て被仰下けるはおほしめし立るゝ事ありこの番衆の中に誰をか可有御賴と勅定有けれは土屋又四郎と申者を召て參て以六條少將殿汝を賴被思召由被仰下けれは小分限者にて難叶候但伯耆國奈和庄地頭に村上又太郎長高と申す者こそ弓矢を取ては樊噲張良にも劣らしと思仁にて候其上家富み一族も多く手柄の者共にて候是を可有御賴候近國には自是外には候はすと申て御前を罷立ぬ

太平記云陶山小見山花討條備中之國ノ住人陶山藤三義高小見山次郎某六波羅ノ催促ニ隨テ笠置ノ城寄手ニ加テ河向ニ陣ヲ取テ居タリケルカ東國ノ大勢既ニ近江ニ着キヌト聞エケレハ一族若黨共ヲ集メテ申ケルハイサヤ殿原今夜ノ雨風ノ紛レニ城中ヘ忍入テ一夜討シテ天下ノ人ニ目ヲ覺サセント云ケレハ五十餘人ノ一族若黨最モ可然トソ同シケル」

又云櫻山自害條笠置城モ落サセタマイ楠モ自害シタリト聞エケレハ一旦ノ付勢ハ皆落失ヌ今ハ身ヲ不離一族年來之若黨二十餘人ソ殘ケル人手ニ懸リテ屍ヲ曝サンヨリハトテ當國ノ一ノ宮ヘ參リ八歳ニ成ケル最愛ノ子ト二十七ニ成ケル年來ノ女房トヲ刺殺テ社壇ニ火ヲカケ己カ身モ腹搔切テ一族若黨二十三人皆灰燼ト成テ失ニケリ

又云越後守仲時已下自害之條糟谷三郎越後守ニ向テ申ケルハ弓矢取ノ死ヘキ處ニテ死セサレハ恥ヲ見ルト申シ習ハシタルハ理ニテ候ケリ(中略)敵此一處計ニテ候ハヽ身命ヲ捨テ打拂テモ可通候カ推量仕ルニ先ツ土岐カ一族最初ヨリ謀叛ノ張本ニテ候ヒシカハ折ヲ見テ美濃國ヲハ通サシトソ仕候ハンスラン吉良ノ一族モ度々ノ召ニ不應シテ遠江國ニ城郭ヲ構テ候ト風聞候シカハ出合ヌ事ハ候ハシ云々

又云新田義貞謀叛之條新田太郎義貞去ル三月十一日先朝ヨリ綸旨ヲ給タリシカハ千劔破ヨリ虛病シテ本國ヘ歸リ便宜ノ一族達ヲ潛カニ集テ謀判ノ計略ヲソ被回ケル

難太平記云まして天下をとらせ給ひて後は日本國之人誰かは此御君の下ならぬ人あるへき一族達なとは殊更今は謙下て可然事也

大塔軍記云今日出立見物頓阿ヲ以テ爲規模其續ヲ中川三郎飯田左馬之助入道(中略)其外一族外樣人々都合二百餘騎云々

園太曆云文和元年三月四日經基卿升文覺舉法印狀送之書寫該之先日乍物忿參拜恐悅候抑去月十八日關東凶徒等沒落武州狩野川之城官軍乘勝攻懸大王以上州信州之堺臼居城下まて已出御歟諸方大軍如雲霞可決雌雄之條不可廻踵之間新田者共注進昨日到來申入八幡了先度自大王被仰下之趣悉以符合不參差之條返々目出畏入候外無他候新田一族以下諸將十五日立上州對治國中與黨殘黨打越武州及關東發向之間尊氏以下不堪防禁逃落候云々

後愚昧記云貞治二年九月九日乙亥傳聞此間自關東飛脚到來兵衛督基氏朝臣與宇津宮一族等合戰西方各十萬餘人討死了宇津宮引退籠城了云々

又云永和三年九月一日傳聞去月十二日鎭西合戰南方宮自然菊地被打取了仍鎭西當方悉一統之由一昨日飛脚到來云々是大內介子息所成功也云々後聞大內代官平井說鎭西宮者非大將宮植田宮故宮僧正之子并菊池一族以下魁帥百人計打取云々

花營三代記云應安四年十一月五日曉河州宇利和利城寄手南方勢引退云々湯淺一族爲宗凶徒百餘人被討云々

又云康曆三年五月十六日小山下野守義政與宇都宮下野前司基綱合戰宇津宮討死之由有其聞之義政方一族大內入道父子親類三十餘人幸島惣領志筑嫡子參內次郎以下二百餘人云々

明德記云明德二年辛未歳山名陸奥守氏清同播磨守滿幸以下一類悉ク同心シテ隱謀ノ企アルニ依テ不慮ニ兵亂出來テ都鄙暫ク不穩其濫觴ヲ尋ニ一族山名宮內少輔時熙同右馬頭故トソ聞エシ云々

嘉吉記云赤松大膳大夫滿祐一族ノ耻辱コレニスキスト諸大名ヲ語ラヒ訴訟被申ケル

建內記云嘉吉元年六月廿三日戊子傳聞吉良東條御一族也號下ノ吉良逐電云々先度自關東以廻文相催其由歟云々

康富記云文安元年七月十日丁亥後聞美濃守護代戸島去月十九日於土岐屋形被誅之其一族從類等率近江勢今日打入美濃燒拂垂水討取守護方勢三十六人云々

應仁記云公方勢打立ト聞ハ武衛ノ屋形ヘ馳入ヘシト有シ

カハ山名ノ一族幷土岐一色六角方モヒシメキ騒キ天下忿劇限ナシ

應仁別記云我朝御寶入洛ニヲイテハ赦免子細アルマシト綸命也此事石見悅テ赤松一族ニ間島ト被官中村太郎四郎ヲ加ヘテ申含メケレハ同志ノ者トモ十餘人申談南帝奉ヲソ望申ケル

石川氏文書云先日被ㇾ成ニ御内書一候間甚子細令ㇾ啓候處具に示し給候大慶候仍今度御忠節之由承候公私目出候隨而御一樣御同心被ㇾ致ニ忠節一候は、殊可ㇾ然候此段促ニ桃井方一可ㇾ被ㇾ申候恐々謹言七月十一日謹上石川中務大輔氏朝

今川大雙紙云盃持て參る事主人と同輩のかたならは兩方の眞中に置て弓手へ歸るへし客人賞翫の方にてあらは客人のそはに置て歸る也初獻の盃をは誰にても家人の位によりて主人の一家一族家子持て出へし

又云隨兵時上手下手の馬打事(中略)武家には高家と號して手つから上膚たてする人は有也其御代に寄て賞翫せらるゝなり凡殿上人諸太夫侍の位は定めたるなり武家天下を執給て後御一族は四位殿上人之位と同しなるへしと云々官位は今も不同なり先代の世には城入道は同侍の位にてありしかとも大忠によて御一族よりは下諸侍よりは上と定められき當御代には土岐伯耆入道は侍よりは上一族よりは下と定られしにや佐々木佐渡判官入道も如ㇾ斯蒙ㇾ仰しなり是は皆其人の一代に取ての事と云々

今川了俊書札禮云諸家の事役は將軍家御一族又は殿上人の流又は諸大夫の人々若は侍家人々如ㇾ此所に其家に定て候諸大夫の家と申は公家には日野勸修寺四條なと申人にて候又久我なと、申て宮方には兵衞佐か家なとも可ㇾ申武家には御家攝津の人々長井の人々一流にて候是は諸大夫として諸侍達同位たるへく候へ共官位なと諸侍よりは少被ニ進出一ほとに候評定の座席又役なと被ㇾ勤候する時は小山宇都宮千葉武田小笠原以下の侍達よりは上役をせられ候云々

又云將軍家の御一流のかたはしにて候はんする輩の方へ諸大名より可ㇾ被ㇾ遣書札禮はさたまりて候先代の時は相模守か號一禮とて諸大名之禮も定候けると申候御一族の無官無位に候といふ共四位の殿上人の位に准て可ㇾ被ㇾ用由公家より被ㇾ定て候けると申候然間諸大名達の官位は多分一きうと申候て從下の五位より從上の五位に擧候諸大名より一族方へつかはし候狀も同五位より四位の人に遣し候書札は同皆々當所恐惶謹言にて候云々

愚耳舊聽記云南部大膳御誅罰條大佛か崎落城し城主南部大膳高信切腹し一族皆々亡ひけり

大友記云龍造寺山城守謀判條肥前國龍造寺山城守隆信屋形ヲソムキ大身ナレハ他家ヲタヨラス一旗ヲモッテ大勢ヲ催シ筑後表へ出ルト聞エケレハ戸次伯耆守吉岡三河守入道宗觀彼是四人被ㇾ遣龍造寺へ押寄セ神崎姉サカイ原久和繩岳ニ陣ヲ取(中略)矢軍ニテ日ヲ送リ吉岡宗觀隆信家人古飯播磨八重犬塚カレラ三人隆信ヲウラムル事アル由アリト聞古飯播磨カ持口へ吉岡宗觀手ヨリ矢文ヲツカハス云々矢文ハ古飯カ役所へ射ケルハイツハリニテハアル間シキ折節夜廻リ衆見付候へハコソ知シ候へナト、云族多隆信モサナカラ心元ナクヤ思ヒ給ヒケン降參ヲコヒテ質人ニ龍造寺豐前守ヲ出ス宗觀シチ人召レ永祿十二年三月廿日ニ豐州へ歸陣也

籾井日記云上氷上御先祖之條本國ニハ宗徒ノ御一族衆老臣衆ヲ御殘シ元就公ノ旗本分トシテ預ケラル

豐鑑云別所かたのむ所の一族郎等二百六十餘人命を失ぬれは城中弱なりはて、今は軍すへきやうにもあらて籠にこめられし鳥の雲をこふ思ひなるへし云々

勢州四家記云南伊勢におひて北畠の一族三大將といふは多氣郡田丸御所飯高郡大河内御所同郡坂内御所也

天正記云武田一族滅亡之條たけた勝頼同嫡子太郎同左馬助勝定しやうようけん幷一そくこと〳〵く首をうちきらる

阿州將裔記云義種義助の男天正二年九月二日本島にて生れ母は周防國大内介一族柳澤主膳正女也

太閤記云良助右衞門を末森の城主と定られしなりまことに先祖の面をおこし武運にかなひたる奥村かなと人皆申あへりきかくて吉日をえらひ助右衞門同嫡子助十郎二男又十郎一族繁榮之粧を刷ひ天正十一年五月七日入部し規式いと勇々敷そ見えたりける

柴田退治記云勝家不ㇾ及ㇾ力入ニ天守一呼ニ双年來所ㇾ賴股肱臣八十餘人一勝家運命明日相究今夜及ㇾ曙成ニ酒宴遊興一可ㇾ惜ニ餘波一勝家取ㇾ盃一族一家次第〳〵酌流云々

松原自休手錄云當家元祖德川次郎義季之後胤世良田三郎滿氏輔ニ佐義貞一數度雖ㇾ有ニ忠功一新田ノ一族於ニ所々一戰死義貞義宗僅僅ニ東勢一武藏野ニ雖ㇾ戰ニ登氏一破潛住ニ德川郷ニ云々

○一族名字

籾井日記云粟田口合戰條族姓ノタシカナラス土民ナトノ數度ノ

武邊ニ花實ヲ結ヒ申者アレハ僉義アリテ被官衆ト申ニナリ小身衆ノ一族名字ヲ讓ラレ候例ニ定マリ候ヘトモ一人侍分ニナルニハ數度ノ武邊ノ目錄ニテ組合ノ旗頭衆マテ達シ吟味コトヽヽシク致シ定メラル

○一門

平治物語云頼政みつやすみつもとすゑさね等をよひよせてたのむへきよしのたまへは一門の中の大將とたのみて候義朝ゑたかひたてまつり候うへはそむき申すに及はすとて歸りけれは云々

又云はゝの命をたすけん爲に參りたる本よりさこそあるへけれくしてまいれとのたまへはときはをくして參りたり母のにからもつれてまゐるきこゆるときはこそめしいたされてまゐりたれたれかあつかりてうき目をみんすらんいさやときはかすかた見んとて平家の一門さふらひともにいたるまてみな六はらへそまゐりける

吾妻鏡云治承四年十一月八日丙辰被レ收二公秀義領所常陸國奥七郡幷太田糟田酒出等所々一被レ充二行軍士之勳功賞一云々(中略)重尋二其旨一給申云閑二平家追討之計一被レ亡二御一族一之條太不可也於二國敵一者天下勇士可レ奉レ合二一揆之力一而被レ誅二無レ誤一門一者御身之上讎敵仰二誰人一可レ被二對治一哉將又御子孫守護可レ爲二何人一哉此事能可レ被レ廻二御案一如二當時一者諸人只成二怖畏一不レ可レ有二眞實歸往之志一定亦可レ被レ貽二誹於後代一者歟云々

太平記云足利殿御上洛之條足利殿ハ叛逆ノ企已ニ心中ニ被二思定一テケレハ中々異儀ニ不レ及不日ニ上洛仕ルヘクトソ被二返答一ケル(中略)長崎入道圓喜怪ミ思テ急キ相模入道ノ方ニ參テ申ケルハ誠ニテ候哉覽足利殿コソ御臺君達マテ皆引具シ進セテ御上洛候ナレ事ノ體怪ク存候加樣ノ時ハ御一門ノ疎カナラヌ人々タニ御心被レ置候ヘシ云々

又云長崎意見之條持明院殿ヨリ内々關東ヘ御使ヲ下サレ當今御謀判ノ企近日事已ニ急ナリ武家速カニ糺明ノ沙汰ナクハ天下ノ亂近ニアルヘシト仰セラレタリケレハ相模入道ケニモト驚テ宗徒ノ一門幷ニ頭人評定衆ヲ集メテ此事如何有ヘキト各所存ヲ問ル

承久軍物語云是はたけ田小五郎殿のてのもの之なのゝくにの住人千野六郎同川上左近この川のせふみするなとゝなのりけれはかねすみ千野六郎はわれらか一もんなれはすは大明神にゆるし給はる川上殿におゐては申うけ給らんとてよつ引て丁とゐる左近かひき合をのふかにいさせてさかさまにおちてなかれける

又云平はんくわんの二男二郎兵衛かねよしとたか井兵衛太郎とたゝ二人てきにおしへたてられひんかし山のかたへおち行けるか地さうたうのおく竹のはやしの中へ引こもり物のくぬきすていひけるはいかにたか井殿御へんはおなし一もんの中にてもことさらきやうたいのむつひをなし申せしにたかはすたゝいまも一所にて之なんことこそ本くわいなれかまへて心つよくさし給へとてかねよしは十六たか井は十七さしちかへてそ之にゝける

後愚昧記云貞治二年七月十五日壬午今夜天下騷動大名等許各馳集云々殊判官入道幷左衛門佐入道將軍一門若州守護等稱二身上事一用心云々

明德記云奥州紀伊國ヘ越テ舍兄修理大夫義理ニ此合戰ヲ思立由申サレタリケレハ匠作以外ニ諫メ宣ヒケルハ先上ト對シ申シテ弓ヲ引ヘキ條返々モ不レ可レ然(中略)重紀伊國ヘ越種々ノ事共ヲ申サレ同心有ヘキ由勸メラレシカハ此上ハ制シ申ニ力ナシ只一命ヲ面々ニ任セ申スニコソ侍ト宣ヒケレハ奥州眉ヲ開テ打歸リ一門悉ク同心シテ近日責上ラムトノミ沙汰シケル云々

大塔軍記云抑信濃國小笠原信濃守長秀遠祖長清祖父政長以來代々被レ補二守護職一處因レ茲長秀募二由緒一經二訴訟一處上裁就レ無二相違一則給二安堵御下文一應永七年七月三日給二御暇一京都ヲ立同廿一日令レ下二着信州佐久郡一大井治部少輔光維依レ爲二一門一先馳二越光維館一披二御教書一令レ談二合一國成敗趣一

應永記云管領ノ中二千餘騎ニテ北ノ方一二ノ木戸ヲ責破ル(中略)山名左衛門佐入道同民部少輔ヲ始トシテ一門五百餘騎管領ノ手ニ入換ヘテ散々ニ戰フ

嘉吉記云尊氏帝都ニ上ラセ玉フコレヨリ數十年之間度々ノ合戰赤松一家ノ者殊ニ功アリケレハ範資ニ攝津國ヲ賜リ光範マテ相續ス則祐又才智一門ニ勝テケレハ備前因幡兩國ヲ賜フ貞範ハ一門ノ奉公總領ナレハ播磨美作ヲ賜ル御教書懇々アリ云々

應仁略記云身を守り壽を保ては一門繁茂の門を並へ累葉枝を連ねんとこそ願なるに家を損し身を失ふ其源に返て當家他家の大事只此事に在りと云々

書寫山舊記云政則御他界之後京都ヘ注進之狀左京大夫遺跡事息女松御料人陽松院殿與二同名刑部大輔息男道祖松丸祥光院殿與申合可レ爲二家督一之由讓與之狀分明候此趣則可レ致二言上一候之處每々忘脚候之條于レ今遲々更非二疎略一候數日如レ此相定置候條一門衆年寄等各同心仕候茲本今少取靜以

人體可二申上一候先可レ然樣御披露可二畏入一候恐惶謹言明
應五年五月十三日伊勢守殿下野守則貞別所加賀守則治浦
上美作守則宗小寺加賀守則職藥師寺越前守貴能
江濃記云（野羅田合戰條）敵の先陣蒲生か勢を一あて當ければあむ
のごとく荒手にかけ合唯一まくりにまくりつけられ悉く
引退き蒲生か一門伊勢の千葉爰にて打死し其外皆敗軍し
ける
沙彌洞然長狀云伊東殿御下向候是又眼前對二御一門一も御
兄弟之流無二餘儀一之辻候哉爲二日向國之替一肥前國守護職
之事被二宛行一との御證文明白候つる
荒木略記云荒木大藏大輔丹波の波多野一門にて御座候攝
津之國宰人仕候て武庫郡小部庄と申處に小身の體にて居
申候由申候云々
阿州將齋記云義植世を義高か義晴へ請讓可レ有との御内
存なり是皆新御臺に近き一門なる故なり
里見義安分限帳云高八千石御一門元頭正木大膳殿高三千
三百五拾五石三斗四升七合御一門正木源七郎
大友記云義鎮公御クシオロサセタマヒ宗麟公ト御名ヲカ
ヘラレ候御一門老中オモヒオモヒホツタイトナリ御煩ノ
樣ナレトモ種々ノ御養生ニテ御本復アリ府内ヘカヘリ給
フ
甲陽軍鑑云永祿九年丙寅春信玄公大僧正の御時惠林寺長
禪寺を始各御成寺々御申を致す其日は時宗一遍寺にて御
歌の會有レ之御相伴は小笠原慶安板坂法師長遠寺一花堂
岡田見桃寺島甫庵長坂長閑以上檢校共二十二人御次の座
には逍遙軒典厩勝頼公穴山殿兵庫殿一條殿此外六人以上
十二人是皆御一門也
甲陽軍鑑末書云天正十年三月中旬信長甲府へ御着春中ヨ
リ計策ノ廻文越給フ武田家ノ侍大將衆皆御禮ヲ申セトア
リテ觸ラルニ二月末三月初ニ信長父子越シ給フ書狀ニハ
カラレテ武田一門衆ヲ初各引籠居給カ此觸ヲ聞御禮ニ出
ル
甲亂記云（武田相模守最後之條）重而勝頼宣ケルハ芳情ノ所ハ雖レ令二感
悅一一門一所ニ可二落行一事ハ計略ノ少ナキニ似タリ枉ケ
テ勝頼下知ニ被レ任候ヘト再三被レ仰ケル間信豐此上ハ不
レ及レ力兎モ角モ可レ應二下知一之由有二領掌一上信ノ人衆被二
召連一佐久郡ヘ越給ケリ
奥羽永慶軍記云（高倉合戰田村勢敗軍條）清顯四本松ヲ退治セント軍慮ヲ
運シ給ヘトモ還テ數度爲二四本松一被レ破レ陣無念タクヒモ
ナシサレハトテ其儘打過ン事モ云甲斐ナシ是程ニ武運ノ

盡ル事有ヘカラスト一門老臣ニ向テ内談セラル其中ニ一
門ノ棟領タリシ田村月齋入道前ミ出テ申樣軍ノ習縱十度
二十度利ヲ失フ事候トモ一戰ニ得二大利一事漢楚八ケ年ノ
戰ヒハ遠キ事ニテ候近代東國ニヲイテ其例多候
又云（田村取出滑津千石森被破大内定綱之條）清顯度々ノ戰ニ失レ利兎角三春ノ者
共四本松ニ氣ヲ呑レシ故臆スルト覺エタリ今度ニヲイテ
ハ我自身馬ヲ出シ新城ヲ築キテ四本松ノ押ニセント云儘
ニ宗徒ノ一門老臣相催シテ三千餘人千石森ト云所ニ出テ
繩張シテ先柵ヲ植サセ堀リ掘セヨト下知シテ陣取シ所ニ
大内備前守人數五千餘人其間二里ヲ隔陣ヲ張テ足輕ヲ出
シ鐵炮ヲ打セタリ
安土日記云天正八年五月五日御山ニテ御相撲有レ之御一
門之御衆御見物ナリ
豐鑑云平治に平相國清盛信賴義朝を亡せしより一門あま
た司を得我身太政大臣に昇り云々
又云明智日向守光秀は美濃國土岐郡明智といふ里に生れ
昔は土岐の一門とかやいひし貧しくなりはて下部の一人
をも持す云々
松原自休手錄云岡崎落レ力此上一門賴候清康ヲ婿ニシテ
岡崎可レ返云々一門老中僉議シテ彈正左衛門味方ニ成候
ヘハ大幸也トテ云々
又云清康揮レ威三州一圓屬レ之甲州信虎濃州三人モ通二使
者一向後可レ爲二一味一云々尾州森山モ内通ス一萬餘騎ニテ
岡崎ヲ打立一門家老爲二魁兵一陣二岩崎一云々
○一黨
太平記云四月三日ノ卯尅ニ又京ヘ押寄セタリ其一方ニハ
殿ノ法印良忠中院定平ヲ兩大將トシテ伊東松田頓宮富田
判官カ一黨幷眞木萬葉ノ溢レ者共ヲ加ヘテ其勢都合三千
餘騎又一方ニハ赤松入道圓心ヲ始トシテ宇野柏原佐用眞
島得平衣笠菅家ノ一黨都合其勢三千五百餘騎云々
嘉吉物語云さる程に此よしを書寫坂本におはします大膳
大夫殿にちうしん申されけれは入道殿申されけるやうは
いさや一黨達京勢我らをたいちのために下たれともさし
たる事はよもあらし云々
伊達日記云大崎伊達ハ境論ニテ御中無然候條政宗公ヘ申
寄御加勢申請氏家一黨總八郎打果シ義隆ニモ腹ヲ切セ可
レ申所存ニ候間云々
松原自休手錄云宵迄仕公翌朝與レ敵朝變暮化ノ謂乎家康
怒レ之當下從二岡崎一一里南上上和田要害ノ地也俄ニ構二取
出一大久保一黨三十六騎被二入置一云々

○一類

吾妻鏡云 治承四年十二月廿二日庚子石橋合戰後平家頻廻二計議一於二源氏一類一者悉以可二誅亡一之由內々有二用意一云々 建保元年四月二日相州被レ拜二領胤長一(和田平太)荏柄前屋地一則分二給于行親忠家一之間追二出前給人和田左衛門尉義盛代官久野谷彌次郎一各所二ト居一也義盛雖レ含二鬱憤一論二勝劣一已如二虎鼠一仍再不レ能レ申二子細一云々 先日相二率一類一參二訴胤長事一之時敢無二恩許一沙汰一剩面二縛其身一度二一族之眼前一被レ下二判官一(三浦行村)稱レ失二列參之眉目一自二彼日一悉止二出仕一畢其後義盛給二件屋地一聊欲レ慰二怨念一之處不二事問一被レ替逆心彌不レ止而起云々

太平記云 佐介貞俊條 承久ヨリ以來平氏ニ世ヲ執テ九代暦數已ニ百六十餘年ニ及ヌレハ一類天下ニハヒコリテ威ヲ振ヒ勢ヒヲ專ラニセル所々ノ探題國々ノ守護其名ヲ擧テ天下ニ有者已ニ八百人ニ餘リヌ

又云 足利殿御上洛條 足利殿御兄弟吉良上杉仁木細川今河荒河以下ノ御一族三十二人高家ノ一類四十三人都合其勢三千餘騎元弘三年三月廿七日ニ鎌倉ヲ立

又云 將軍白筑紫御上洛條 去四月七日備後備中出雲石見伯耆ノ勢六千餘騎ニテ馳參ル其外國々ノ軍勢不レ招ニ集リ不レ責ニ順ヒ著事只吹風ノ草木ヲ靡スニ異ナラス 新田左中將ノ勢已ニ備中備前播磨美作ニ充滿シテ國々ノ城ヲ責ル由聞エケレハ鞆ノ浦ヨリ左馬頭直義ヲ大將ニテ二十萬騎ヲ差分テ徒路ヲ上セラレ將軍ハ一族四十餘人高家一黨五十餘人上杉ノ一類三十餘人外樣ノ大名百六十兵船七千五百餘艘ヲ漕雙テ海上ヲソ上ラレケル云々

播州征伐記云 山城變ニ先約一間諸率一統門押入見レ欲レ討レ之取二籠倉中一引出懸レ火處打レ首長治聞レ之元來覺悟之前我等一類之末期此時也先置二膝上三歲之緣子一撫二後髮一一刀指二胸下一引寄女房一同枕差殺絹引被レ置友之女房如同生害長治友之兄弟手取レ手廣緣爲敷疊一疊左右直各呼出云々

明德記云 去建武年中ニ大御所尊氏將軍御代ヲ被レ召テ既ニ六十年ニ及テ一天下悉武德ニ歸シ萬民皆其化ニ誇ル兵亂久絶テ四海ノ激浪治リ國民無事ニシテ九島狼煙立去ル處ニ明德二年辛未歲山名陸奥守氏清同播磨守滿幸以下一類同心シテ隱謀ノ企アルニ仍テ不慮ニ兵亂出來テ都鄙暫不レ穩

江濃記云 屋形次郎頼充ハ其年廿四歲ニテタケクイサム大將ナレハ勢ヲアツメ一合戰ト志サシ爰カシコニヒカヘ(中略)御運ノ末ニヤ美濃衆悉道三ニ隨ヒ譜代舊功ノ侍一人モナク落行ケレハ力ナク神戸ノ渡リ迄落給ヒ舟ニノリ給ヘハ道三方追カケ奉リケレトモ舟ナクシテ川端ニテ各々音ヲアケアノ船頭ヨ其人ヲコキカヘサヌニヲイテハ一類子共皆々罪科ニヲコナフヘシイカニ船頭コキカヘセ〳〵ト呼リケレハ云々

愚耳舊聽記云 北島左近忠弟之道盛條 左近申けるは御思召之程忝は存候へ共降參仕候事先々可レ致二延引一(中略)我々は一類共も候へは南部の方へ參候へし御送り給はんとそ申しける

伊達日記云 其後伊場惣八郎ト申者近召出サレ候ニ付刑部少輔恐怖ヲ持候親類多者ニテ其一類恐怖仕候然間惣八郎存候ハ我等一人モノニテ候間頼所無レ之由存候而岩出山城主氏家彈正ト申モノヲ力ニ仕度由存彈正所へ存分之通申理ニ付彈正合點引立ヘキ由誓約仕候云々

阿州將裔記云 長治義賢嫡男也號二三好彥次郎一勝瑞に居城す義賢討死已後阿波田の太守と成しか心行不レ正して一類不快になりて天正の始より度々合戰に及云々

天正記云 明知彌平治坂本にて自害條 明知彌平治はこのよしを聞と、けこれたう一類その身けんそくこと〳〵くさしころしてんしゆに火を懸しかいおなし敵みかた共にあひかんする所なり

又云 柴田白害條 天正十一年四月廿四日彼しろにたてこもる柴田一類こと〳〵く相果をはんぬ是を見聞て心ある諸侍はいふに及はす野人山賊に至るまてみなかんるいにむせふのみ

柴田退治記云 其外股肱臣八十餘人或差違或ハ自害天正十一年四月二十四日申剋楯ニ籠彼城一(北庄)柴田一類悉相果者也云々

又云 小谷御方勝家雖レ爲二妻女一將軍御一類而所緣多殊更秀吉者至二相公後孫一憐愍無下不二相親一者上明朝敵陣按內落給有二何妨一乎云々

○一味

江濃記云 中頃應仁亂の時六角方は山名一味京極方は細川一味にて兩家不レ闘に敵味方となり互に彼を亡し近江一國を合て知行せんとす

江北記云 文明十八年十月二日從二三雲一御出張候て被レ達二申御本意一者也 此時秀隆は宇治より罷越御供仕對二本意一て下坂の諸職知行仕候也幷に草野本所方爲二御料所一御代官職被二仰付一長享三年にいたり知行仕者也其時三田村は多賀大成一味にて窄人也

愚耳舊聽記云（大光寺實起之條）新屋尾崎の兩人は淺瀨石大浦へ一味せし上は（中略）大光寺へ一味の者日々夜々に減し堀越の御勢は次第に增倍ゑたりける

伊達日記云會津北方ニ柴野彈正ト申モノ御一味仕候其外二三人モ同心衆候間御出馬被ㇾ成候は、手切可ㇾ仕由申ニ付テ五月二日ニ左馬助ヲ猿倉越ト申難所ヲ越被ㇾ遣候

天正記云（信たか逆意の條）織田の三七のふたか柴田は瀧川と相談していかに秀吉にわか君を相渡すにおいては彼一人天下を相はからひほしいまゝにけんいをふるへき事かんせむなり（中略）各一味同心して是をかいほうす

牛尾茂左衛門藏毛利元就書云爲ニ此方御一味一被ニ執退一候誠本望候就ㇾ夫牛尾之事進置候長久御知行肝要候 仍一行如ㇾ件永祿八年六月十一日牛尾宗次郎殿元就花押

○洞

伊達日記云ハチノ森相模ト申者月舟伯父ニテ候カ申候ハ上野殿ヲ始トシテ打果弓矢ノ實否ヲ相付可ㇾ然候大崎ハ洞一品ニ候政宗公大身ニテ候間果シテ月舟ノ身上相立ヘキニモ無ㇾ之候

又云晴宗公輝宗公二代御父子御弓矢ニ付テ御洞別々ニ成御弓矢被ㇾ成ニク、候

又云備前被ニ申上一候ハ忝御意ニ候我等親代ヨリ御奉公仕候ヘトモ御洞御弓矢ニ付テ田村ヲ賴入候處ニ少ノ儀ヲ以清顯背ニ御意一候其後會津佐竹ヲ賴入御介抱ヲ以身上ヲ相續候云々

○氏族

吾妻鏡云治承四年八月四日甲申散位平兼隆者伊豆國流人也依ニ父和泉守信兼之訴一配ニ子當國山本郷一漸歷ニ年序一之後假ニ平相國禪閤之權一輝ニ威於郡郷一是本自依ㇾ爲ニ平家一流氏族一也

梅松論云あるとき兩御所御會合在ㇾ之師直井故評定衆を餘多めして御沙汰規式少々定められけるとき將軍仰せられけるはむかしを聞に賴朝卿廿ケ年の間伊豆の國において辛勞して義兵の遠慮をめくらせしときに平家惡行無道にして萬民の歎いふ斗なかりしをさけん爲に治承四年に義兵を發し元曆元年に朝敵を平けたり其間の合戰五ケ年なり彼政道を傳聞に御賞罰分明にして先賢の好する所なりゑかりといへとも尙以罰のからき方多かりき是に依而氏族の輩以下疑心を殘しける程にさしたる錯亂なしといへとも誅罰ゑけかりし事いと不便なり

又云上野國より新田左衛門佐義貞君の味方として當國世

良田に討出て陣をはる是も淸和天皇之御後胤陸奥守義重陸奥新判官義康の連枝也潛に勅を承る依て義貞一統の氏族皆打立けり先山名里見堀口大館若松桃井みな一人當千にあらすといふ事なし

太平記云（新田義貞謀叛之條）同五月八日ノ卯刻ニ生品明神ノ御前ニテ旗ヲ舉綸旨ヲ披テ三度之ヲ拜シ笠懸野ヘ打出ラル相隨フ人々氏族ニハ大舘次郎宗氏子息次郎幸氏二男彌次郎氏明云々

明德記云去程御所樣內野口ノ合戰ニ討勝セ給テ人馬ノ息ヲ休メラレケル處ニ大內ノ權大夫赤松ノ上總介兩人ノ方ヨリ櫛ノハヲ引テ申ケルハ山名陸奥守宗トノ氏族一手ニ成テ二條大宮ヘ寄來問數剋支テ責戰

又云抑此播磨守滿幸ト申ハ山名ノ左京大夫時氏ニハ孫右衛門佐師義ノ末子也舍兄讚岐守義幸病氣ノ後ハ彼代官トシテ在京シ一方ノ家督ニテ有ケルカ今度宮內少輔時昭以下退治ノ後ハ四ケ國ノ守護職ヲ持テ權勢氏族ニ越エタリ

○家族

由良家傳記云御家中御法度書之事家族幷家老出頭者と非理におゐては其以下等は打果と云とも片方斗其品により成敗可ㇾ有ㇾ之事

○家門

富樫記云恩ヲ得テ恩ヲ不ㇾ顧ハ野鹿ノ草ヲ踏巢ノ鳥ノ枝ヲ枯スニ不ㇾ異萬事ノ先非ヲ拋捨上和キ給ハヽ下睦シカラント申事掌ヲ返スヨリ可ㇾ速如ㇾ此遂ニ蓋シ相應セハ積善ノ餘慶滿ニ家門一榮花永ク子孫ニ傳フ基タルヘシ云々

異制庭訓往來記云 抑炎天之折節遙遠ノ發向御勞歟 令ㇾ存候朝敵 御退治之大將御賜之由 承候先取ニ其身一御面目及ニ御家門繁昌一無ㇾ極候云々

關八州古戰錄云（上杉憲政武州河越城責之條）左衛門大夫綱成七歲ノ童兒トシテ孤タリシヲ家人等介抱シテ小田原ヘ立越辛キ月日ヲ過シケルカ漸々成長シテ氏綱是ヲ近臣トセラレ寵愛亦類ナク竟ニ一方ノ部將ト成テ駿豆相武ノ國境每度ノ合戰ニ手並ヲ顯シ寡ヲ以テ衆ヲ擊危キニ臨テ克ク忍フ忠義莫大ナリシ程ニ氏綱家門ノ席ニ列シ氏康ノ妹ヲ以テ是ニ娶ラセラル

增補家忠日記云元龜元年八月廿八日大神君遠州濱松ノ城ニ於テ觀世宗雪入道同左近大夫ヲ召テ終日猿樂有御家門ノ歷々近習外樣ノ諸士城ニ登テ見物ス

家忠日記云天正六年正月十六日御家門樣御成候トテ家康樣御越被ㇾ成候

○門客

吾妻鏡云 治承四年九月九日戊午盛長自二千葉一歸參申云（中略）其後有二盃酒一次當時御居所非二指要害地一又非二御曩跡一速可下令レ出二相模國鎌倉一給上常胤相二率門客等一爲二御迎一可二參向一之由申也

久米田軍記云 江州勳亂條 佐々木ノ家老ヲハ目賀田次郎左衛門楢崎太郎左衛門尉三上孫三郎三雲新左衛門蒲生下野守等也其外兩門客トテ兩家アリ佐々木刑部大夫ト田中四郎兵衛 後號二治部少輔一 此兩家一族ニテ種類繁多ナリ其外ニ京極朽木鞍智大原トテ一門アリ此等ハ皆京都ヘ直參ナレハ各別ノ事也

武家名目抄稿第四十三冊

塙檢校保己一編

稱呼部七下

○門葉

吾妻鏡云 治承四年十月四日癸未畠山次郎重忠參二會長井渡一河越太郎重頼江戸太郎重長又參上此輩討二三浦介義明一者也而義澄以下子息門葉多以候二御供一勵二武功一云々

太平記云 金剛山寄手等被誅條 佐介左京亮貞俊ハ平氏ノ門葉タル上武略才能共ニ兼タリシカハ定テ一方ノ大將ヲモト身ヲ高ク思ケル處ニ相模入道サマテノ賞翫モ無カリケレハ恨ヲ含ミ憤ヲ抱キナカラ金剛山ノ寄手ノ中ニソ有ケル

又云 俵藤太條 龍神ハ是ヲ悦テ秀郷ヲ樣々ニモテナシケルニ太刀一振卷絹一鎧一領頸結タル俵一赤銅ノ撞鐘一ツヲ與テ御邊ノ門葉ニ必將軍ニナル人多カルヘシトソ示シケル

○子孫

吾妻鏡云文治五年九月廿日丁丑奥州羽州等事吉書始之後糺二勇士等勳功一各被レ行レ賞（中略）次紀權守波賀次郎大夫等勳功事 殊蒙二御感之仰一但不レ及レ賜二所領一被レ下二旗二流一被レ仰下可レ備二子孫眉目一之由上云々

又云建久五年閏八月廿八日乙酉平六左衛門尉時定遺跡事可レ令二子孫領掌一者尚本所領少々有二知行一事於二其地一者早可二返付一之由云々

○後胤

吾妻鏡云建久元年四月七日庚寅被レ遣二御書於下河邊莊司行平一有二其召一是依レ可レ爲二若君御弓師一也（中略）諸家雖レ有二其數一行平適爲二數代將軍後胤一也云々

○末葉

富樫記云富樫ノ元祖鎮守府將軍兼武藏守藤原利仁ハ武勇ノ人ニテ世皆北斗星ノ化身ト云傳フ其子齋宮頭叙二用其子一加賀守吉信其子加賀守忠頼ト相續其末葉齋藤林富樫介トテ三家ニ分レ加賀越前ヲ領ス云々

江濃記云尊氏の御時山名しはらく當國の守護に補しけれとも守護代は上郷三河守其子鹽冶四郎とていつれも佐々木の末葉也

別所長治記云別所小三郎長治ハ村上源氏具平親王廿六代ノ孫赤松入道圓心カ末葉也領二播州東八郡一在二三木ノ城一得二武將譽一其門葉繁昌ニシテ風俗異二于他一同姓ノ侍大將山城守舍弟孫右衛門兩人執權政道明レ之愚耳舊聽記云 波岡貴之條 天正六年春の頃より波岡を御責可レ被レ成御手段をそ被レ成ける其ころ波岡の城主はそのかみ建武の頃奥州に威を振ひ給ひし北畠中納言家秋卿の末葉にて時之人波岡の御所樣とそ申ける

又云 北畠左近忠弟之道盛條 左近申けるは御思召之程忝は存候へとも降參仕候事先々可レ致二延引一（中略）我々は一類共も候へは南部の方へ參候へし御送り給はれとそ申ける其儀にてあるならはともかふも心にまかせ給へとて天正六年寅の八月三日に外の濱より船に乘田石部へこそは參ける其末葉繁昌して于レ今有とそ聞えける

○末孫

太平記云 足利殿御上洛條 其中ニ足利治部大輔高氏ハ所勞ノ事有テ起居未快ナルヲ又上洛ノ其數ニ入テ催促度々ニ及ヘリ足利殿此事ニ依テ心中ニ被二憤思一ケルハ（中略）時移リ事變シテ貴賤雖レ易レ位彼ハ北條四郎時政カ末孫也人臣ニ下テ年久シ我ハ源家累葉ノ族也王氏ヲ出テ不レ遠云々

又云 六波羅攻條 爰ニ六波羅ノ勢ノ中ヨリ年ノ程五十計ナル老武者ノ黑糸ノ鎧ニ五枚甲ノ緒ヲ縮テ白栗毛ノ馬ニ青總懸テ乘タルカ馬ヲシッ〳〵ト歩マセテ高聲ニ名乘ケルハ（中略）今某十七代ノ末孫ニ齋藤伊豫房玄基ト云者也今日

ノ合戰敵御方ノ安否ナレハ命ヲ何ノ爲ニ可レ惜死殘ル人アラハ我忠戰ヲ語テ子孫ニ留ムヘシト云捨テ互ニ馬ヲ懸合鎧ノ袖ト袖トヲ引違ヘテムツト組テトウト落

武蔭叢話云平塚勘兵衛は平塚因幡守吉就か甥也内の美庄右衛門は小早川隆景の家老浦兵部か孫なりいつれも逸物の末孫ゆへと沙汰なり

○門下

吾妻鏡云 治承四年八月九日己丑 有二近江國住人佐々木源三秀義者一平治逆亂時候二左典厩御方一於二戰場一竭二兵略一而武衛坐レ事之後不レ奉レ忘二舊好一兮不レ諛二平家權勢一之故得二替相傳地佐々木庄一之間相二率子息等一侍二秀衡一（秀義嫡母夫也）赴二奥州一至二相模國一刻澁谷庄司重國感二秀義勇敢一之餘令二之留置一之間住二當國一既送二二十年一畢此間於二子息定綱盛綱等一者所レ候二于武衛之門下一也云々

太平記云（畠山道誓條）宰相中將殿ハ幾内ノ蜂起ヲ聞テ近國ハ縱起ル共坂東靜ナレハ東國八箇國ノ勢召上セテ退治センニ何程ノ事カ可レ有トテ强チニ騷ク氣色モ無リケル處ニ康安元年十一月十三日關東ヨリ飛脚到來シテ畠山入道道誓舍弟尾張守敵ニ成テ伊豆國ニ楯籠リ候間東國ノ路塞ツテ官軍催シニ不レ應トソ申ケル（中略）應テ畠山カ許ヘ使ヲ立テ去々年上洛ノ時南方退治ノ事ハ次ニ成テ專ラ仁木左京大夫ヲ討ント被レ謀候シ事隱謀ノ其一ニテ非ヤ其後關東ニ下向シテ差タル無二罪科一諸人所帶ヲ沒收セラレ候ケル事只世ヲ亂シテ基氏ヲ天下ノ人ニ背カセントノ企ニテソ候覽叛逆旁々露顯ノ上ハ一日モ門下ニ跡ヲ不レ可レ被留退出及二遲々一ハ、速ニ討手ヲサシ遣スヘシトソ被二云送一ケル

義秋公方記云長野若狹守其頃病死シテ子息ナク女子一人有ケル長野一家ニ雲林院細野家所ト三人有リ又門下ニ分部川北トテ兩人有リ此人ニ寄合評定シテ今度信長五畿内マテ手ニ付公方樣ヲ居エ奉リ威勢天下ニ比ナカリケレハ此信長ノ弟上野介ヲ養子トシテ長野一跡相續アルヘシト相談シ此由申シ入ラル

天正記云（柴田自害條）勝家思ひ切とつて引寄一々にさしころし勝家か腹の切樣を見よとて弓手の脇にさしたてめてのせほねへ引廻し返す刀にて心もとよりほその下まてたち切て五臟六腑をかきいたしもんかをよひ首をこふ（中略）其外近習のもの八十餘人或はさしちかへあるひはゑかいす

○同名

高國記云享祿二年丑正月一日未明ニ柳本衆三好方ノ伊丹彌三郎ヲ責メシカハ伊丹打負同名六人打死ス

光源院殿御元服記云天文十五丙午歳十二月廿二日彈正少弼定賴旅館御成有レ之（中略）御一獻之時定賴同苗面々御太刀持參對二兩御所一令二御禮一畢

蒲生氏鄕記云其後筑前守秀吉公感シ高名神妙也トテ同名ニナシ號二羽柴飛驒守一然シテ秀ノ字憚有トテ秀鄕ノ鄕ヲ取テ號二氏鄕一任二參議一云々

諸大名御成被申入記云 一亭主の同名幷被官衆亭主の後の方に一間間中斗も引退て同可レ畏被官衆は同名衆の側後に並ひて居へきなり此の如の被官人は隨分の年寄の輩共可レ成其内一人は亭主の太刀を持て少進みて有へし御出の砌各顏持上て奉レ見樣に不レ可レ仕いかにも謹て可爲二蹲居一也同名中にも今の家々により亭主如、同門外に伺候も可レ有レ之先年文明十年二月廿八日細川聰明殿代始の御成被レ申し時細川讃州（成之同息彌九郎政之）雖二伺候一門外へは不レ及レ被レ參讃州は御一名因レ爲二御伴衆の家一如レ此歟其頃は政之はいまた御相伴にも不レ被二召加一御供衆にも不レ被二參勤一也又門外四五町の間は被官衆數た辻固に可レ有レ之各其衆は小太刀をもち敷皮にて可レ有レ之也御成の時は敷皮退て各畏いかにも蹲居たるへきなり云々一猿樂に遣候要脚つまれ候事能はて候白洲に太夫伺候うたひ申時要脚を亭主の同名衆はこひて御前の庭上につみ候也いまた御能はて候はて漸今一二番はかりにてはて候へきなとの折節舞臺につみ候と申事は無レ之もし〳〵いにしへ左樣の事不慮にも有レ之候哉不二存知一候必々能はて候て白洲に太夫伺候申時の事なり一亭主同名衆なく候へは御供衆もつまれ候諸家儀畠山殿細川殿以下は同名衆歴々有レ之間一度にても不レ及二他人役一然は武衛にかきり同名衆漸々一両人御座候樣に候仍武衛にては御供衆もつまれ候云々

松原自休手錄云敵從二矢尾一至二若江一十餘町繰出處へ横合に越レ畔涉レ暇任レ馬上二玉越ノ塘一敵推二進目前一藤堂カ左ノ魁首同名仁右衛門桑名彌次兵衛カ懸リ口當二長曾我部カ旗本ノ堤一敵直下ニ見透シ發二軍兵一兩人立處ヲ不レ去戰死云々

天正記云（信たか逆意條）此時柴田ゑゆりのかみ勝家同名伊賀守かつとよこれらはかりくわいけいのあつかひとして前田又左衛門としいへ屋口口口彥三金森五郎八京都に上り云云

○同姓

別所長治記云別所小三郎長治ハ村上源氏具平親王廿六代ノ孫末松入道圓心カ末葉也領二播州東八郡一在二三木ノ城一得二武將譽一其門葉繁昌ニシテ風俗異二于他一同姓ノ侍大將山城守舍弟孫右衛門兩人執權政道明レ之

○親類親族

吾妻鏡云元暦二年四月廿一日甲戌梶原平三景時飛脚自二鎮西一參著進二親類獻上書狀一始申二合戰次第一云々

又云文治四年七月十七日辛亥右武衛飛脚參著去年夏頃御家人藤原宗長與二石清水神人等一鬪諍神人聊依レ被レ疵去十一日所レ被レ下二院宣一也(中略)抑神社訴訟雖レ無二其理一依二敬神異一他一旦有二裁許一追被二厚免一者常法也然者彼宗長先贖二其罪科一追可レ有二左右一事也隨又雖レ非二指親族一只爲二郎從一歟且爲二公私一宜レ顯二忠强不一可下令二拘申一給上歟

梅松論云伯耆國奈和庄野津郷と云所に着たまふ御ふね仕ける男申て云此所に奈和又太郎と申福裕の仁候一所において討死仕可き親類の一二百も候らん御頼候て御覽候へかしと申上ければはやかて汝しるへ仕れとて彼者を先に立勅使忠顯朝臣を遣されて一向頼み思召るゝおもむき也云云

太平記云頼員阿忠ノ嫁　叛人ノ與黨土岐左近藏人頼員ハ六波羅ノ奉行齋藤太郎左衛門尉利行カ女ト嫁テ最愛シタリケルカ世中已ニ亂テ合戰出來リナハ千ニ一モ討死セスト云事有マシト思ケル間兼テ餘波ヤ惜カリケン或夜ノ寢覺ノ物語ニ一樹ノ陰ニ宿リ同流ヲ汲モ皆是多生ノ緣不レ淺況ヤ相馴奉テ已ニ三年ニ餘レリ等閑ナラヌ志ノ程ヲハ氣色ニ付ケ折ニ觸テモ思知リ給ラン去テモ定ナキハ人間ノ習相逢中ノ契ナレハ今若我身ハカナク成ヌト聞給フ事有ハ無ラン跡マテモ貞女ノ心ヲ失ハテ我後世ヲ問給ヘ人間ニ歸ラハ再ヒ夫婦ノ契ヲ結ヒ淨土ニ生レハ同蓮ノ臺ニ半座ヲ分テ待ヘシト其事ト無カキクトキ泪ヲ流テソ申ケル女ツクツク聞テ怪ヤ何事ノ侍ルソヤ(中略)男ハ心淺クシテサレハヨ我不慮ノ勅命ヲ蒙テ君ニ憑レ奉ル間辭スルニ道無シテ御謀叛ニ與シヌル間千ニ一モ命ノ生ンスル事難シ無レ端存ル程ニ近ツク別ノ悲サニ兼テ加樣ニ申也此事穴賢人ニ知サセ給ナト能々口ヲソ堅メケル彼女姓心ノ賢キ者也ケレハ夙ニヲキテツクツク此事ヲ思フニ君ノ御謀叛事ナラスハ憑タル男忽ニ誅セラルヘシ若又武家亡ナハ我親類誰カハ一人モ殘ルヘキサラハ是ヲ父利行ニ語テ左近藏人ヲ回忠ノ者ニ成シ是ヲモ助ケ親類ヲモ扶ケハヤト思テ急キ父カ許ニ行忍ヤカニ此事ヲ有ノ儘ニソ語リケル

難太平記云鎌倉の瑞泉寺殿基氏の御名乘斗我等か祖父の名乘也如レ此其一家親類等の中に無德の人の名乘を取てなのる事幸の有とかや申たり云々

世鋭抄云懸參ノ仁外樣之侍自然時粉骨ヲ致シテ主ノ感ヲ見ヨ三年內ニ不レ感レハ別人ヲ憑メ但親類ニ至テハ依二于時儀一可レ計レ之

阿蘇大宮司惟澄申狀云玖珠日田以下豐後國人等數百騎合二發向一之間馳向一陣大友一族野津宮內卿幷多武木又五郎枯杉以下數百人討取リ畢與國元年十二月廿日小鳥合戰差二遣親類若黨等一之處白石治部法橋討死畢

明德記云土屋等ノ一族共廿九日ノ宵ニ寄合テ物語共シケル中ニ平次右衛門尉カ申ケルハ(中略)四ケ國ノ御恩ヲ忘テ今此合戰ニ及程ノ御恨ソモ何事ソヤ乍レ去此厚恩ヲ捨テ御合戰有ヘクハ例式ニカウソフリテ人ヲカシキ振舞有ヘカラス只一筋ニ思召定ラレテ士卒相共ニ死ヲ一所ニシテ世ノ口遊ニナラヌ樣ニ御計有ヘシ其ニ付テモ入道カ親類タラム者ハ一番ニ懸入テ討死スヘキ由申候也云々

又云去程ニ上卿入道ハシホ〳〵ト廿七騎ニテ降參ニ成テ出ケリ入道ノ共ニ出ケル木村ノ源七ト申若黨ニ隱岐國カ方ヘネンコロニ事付ヲソシタリケル(中略)入道參ル上ハ此城モ早速ニ落居ノ道ヲ求ムヘシ當家ノ者共恐レナカラ御親族ノ號ヲケカス上ハ一旦無爲ニ屬スル樣ニ御意ニ懸ラルヘシトソ申送ケル

新撰長祿寛正記云本折遊佐七郎相副同中務丞孫四郎等着向之處於二同所一數刻致二合戰一本折親類被官人令二討死一候

宗五大雙紙云正月五ケ日公方樣御臺樣へ御こは供御參八の時分にて候それを取次申候やう先大草調進申候大口ひたゝれにて候次の御するのさいのきはまて彼親類持參候それを中の御するのさいのうちから大草取次申候を同名衆請取候

今川大雙紙云むことりよめとりの時の折紙は引合也さてうけさする時は二枚有紙を一枚執て出す也さて主人與前に御局の行也此とき御臺の御こし主にても又は親類にても手をかける也

新田由良家傳記云足利の長尾但馬守息女はかり有レ之家を續申候男子無レ之に依て成繁公へ申入次男横瀨三九郎殿を養子に仕新田へいよ〳〵後詰仕萬端可二申通一旨被レ申候處に成繁公つく〳〵御思案被レ成長尾は元來下野の佐野小山に親類緣者の事に候へは諸事申合由に候殊更小

山は從第にて是を養子に可ㇾ付なと、長尾の家中侍共申由然を長尾景長是非共三九郎を養子に仕度由樣々申に付て左候は、新田家中次男三男多く有ㇾ之間三九郎に附候て可ㇾ進候條其方の知行宛行可ㇾ被ㇾ申と堅く契約被ㇾ成被ㇾ遣候

又云長尾但馬守横瀨新六へ送狀云連々御戰功之上猶以此度之御働は無二比類一候因ㇾ茲成田下總守一跡幷親類同心跡事御知行不ㇾ可ㇾ有二相違一之由被ㇾ進二一札一候

羽尾記云海野能登守ハ强弓ヲヒキアラ馬ヲヨク乘新當流ノ兵法ヲヨク志シ力百人ニタイシ勇モウノ侍ナリ然レハ己カ勇ノ人ニ勝レタルヲ以兄弟親族ヲカヘリミス古郷ヲ去テ兵法執行ニ出ル云々

甲陽軍鑑云甲州法度之次第條自分之訴訟直不ㇾ可ㇾ致二披露一就二寄子一訴訟可ㇾ致奏者事勿論也雖ㇾ然依二時宜一可ㇾ有二遠慮一歟沙汰之日之事者如ㇾ載二先條一寄子親類緣家等申趣一切可二禁遏一

簑輪軍記云信玄甚感歎し信貞か心さし情有義有もの成と小幡か娘佐馬之助信元の妻となし親類の因みをなしけるとかや

又云君の御恩によりて本領に歸る事譬ふるに物なしと然るに信貞親類共敵對す則望ては一命を奉らん事鵝毛より輕況や其外の事は信貞承り候共軍にて當時まて廿七年相添し子共數多成長候也云々

伊達日記云伊場惣八郎ト申者近召出サレ候ニ付刑部少輔恐怖ヲ持候親類多者ニテ其一類恐怖仕候然間惣八郎存候ハ我等一人モノニテ候間賴所無ㇾ之由云々

松原自休手錄云正則カ曰ク內府更不ㇾ被二思寄一吾ハ先主ノ爲二親族一內府ト於二昵近一秀賴公ノ御爲ニ依二可ㇾ宜思一也云々

增補家忠日記云天正十年十二月下今度大神君ノ幕下ニ屬スル甲信兩國ノ諸士等自今以後忠信ヲ盡スヘキノ旨遠州秋葉寺ニ於テ各連署ノ起請文ヲ書シメ給フ成瀨吉右衞門尉日下部兵右衞門尉是ヲ奉ル連書ノ誓盟ヲナス輩今福新右衞門曾根下野守駒井右京進青沼助兵衞尉小菅又八三枝監物跡部九郎右衞門河窪新十郎下曾禰源六郎跡部民部大輔油川刑部少輔大井監物岩手助九郎油川彌平次栗原日向守三枝松平右衞門以上是ヲ武田親族衆ト云フ

○遠類

太平記云江州軍條佐々木佐渡判官入道々譽京ヨリ潛ニ若狹路ヲ廻テ東坂本ヘ降參シテ申ケルハ江州ハ代々當家守護ノ國ニテ候ヲ小笠原上洛ノ路ニ滯テ不慮ニ兩度ノ合戰ヲ致シ其功ヲ以テ嶋テ管領仕候事道譽面目ヲ失フ所ニテ候若當國ノ守護職ヲ被二恩補一候ハヽ則彼國ヘ罷向ヒ小笠原ヲ追落シ國中ヲ打平ケテ官軍ニ力ヲ著シ事時日ヲ移スマシキニテ候トソ申ケル主上モ義貞モ出拔テ申トハ不二知給一事誠ニ可ㇾ然トテ道譽カ申請ル旨ニ任セテ當國ノ守護職並ニ便宜ノ闕所數十箇所道譽カ恩賞ニ被ㇾ行テ江州ヘソ被ㇾ遣ケル元來詐テ申ツル事ナレハ道譽江州ヘ推渡テ後當國ヲハ將軍ヨリ給リタル由ヲ號ス間小笠原嶋テ國ヲ捨上洛シヌ道譽忽ニ國ヲ管領シテ彌坂本ヲ遠攻ニ攻ケレハ山徒ノ遠類親類宮方ノ被官所緣ノ者マテモ近江國中ニハ跡ヲ可ㇾ止樣ソ無リケルサテハ道譽出拔ケル時尅ヲ不ㇾ移退治セヨトテ脇屋右衞門佐ヲ大將ニテ二千餘騎ヲ江州ヘ被二差向一云々

淸正記云藤吉殿內に塚原小才次といふ兵法者ありト傳遠類の武士也

○緣家

甲陽軍鑑云甲州法度之次第條自分之訴訟直不ㇾ可ㇾ致二披露一就二寄子一訴訟可ㇾ致奏者事勿論也雖ㇾ然依二時宜一可ㇾ有二遠慮一歟沙汰之日之事者如ㇾ載二先條一寄子親類緣家等申趣一切可二禁遏一

○外戚

鎌倉大雙紙云禪秀申けるは持氏公御政道あしくして諸人背申事おほし某いさめ申といへとも忠言逆ㇾ耳御氣色あしくなり結句御外戚の人々依二申掠一御不審を蒙るといへとも誤のなけれは鰐の口を遁候へき世をたゝ爲ㇾ恩に仕へ命は依ㇾ義輕しと申候へは云々

江濃記云永井ト申ハ初ハ永江トモ名乘リケル美濃居益ノ城主也是モ初ハ公方ニ奉ㇾ仕京都ニ參勤ス嘉吉頃備中守高景ト申人土岐殿外戚ニテ同國ノ豐島ヲ知行ス齋藤ト中惡成テ度々合戰有リテ備中守高景同子息四郎左衞門景秀討死也

阿州將裔記云持隆の外戚腹に六郎とて幼少なる男子有云々

○緣者

吾妻鏡云治承四年八月九日己丑有二近江國住人佐々木源三秀義者一平治逆亂時候二左典厩御方一於二戰場一竭二兵略一而武衞坐ㇾ事之後不ㇾ奉ㇾ忘二舊好一兮不ㇾ諛二平家權勢一之故得二替相傳地佐々木庄一之間相二率子息等一恃二秀衡一秀義嫡母夫也赴二奥州一至二相摸國一刻澁谷庄司重國感二義秀勇敢一之餘

令之留置之間住當國既送二十年畢此間於子息定綱盛綱等者所候于武衛之門下也而今日大庭三郎景親招秀義談云景親在京之時對面上總介忠清（平家侍）之間忠清披一封書狀令讀聽子景親是長田入道狀也其詞云北條四郎比企掃部允等爲前武衛於大將軍欲顯反逆之志者讀終忠清云斯事絶常編高倉宮御事之後諸國源氏安否可糺行之由沙汰最中此狀到著定有子細歟早可覽相國禪閤之狀也云々景親答云北條者已爲彼緣者之間不知其意掃部允者早世者也者景親聞之以降意潛周章與貴客有年來芳約之故也仍今又漏脫之賢息佐々木太郎等被候于武衛御方歟尤可有用意事也云々

太平記云（大森彦七條）有明ノ月中門ニ差入タルニ簾ヲ高ク捲上テ庭ヲ見出シタレハ空ヨリ毬ノ如ナル物光テ叢ノ中ヘソ落タリケル何ヤラント走出テ見レハ先ニ盛長カ推碎カレタリツル首ノ半ハ殘タルニ件ノ刀自拔テ柄口マテ突貫テソ落タリケル不思議ナリト云モ疎カ也嚮テ此頭ヲ取テ入ニ抛入タレハ跳出ケルヲ金鉸ニテ燒碎テソ棄タリケル事靜テ後盛長今ハ化物ヨモ不來ト覺ル其故ハ楠カ相伴フ者ト云シカ我ニ來事已ニ七度也是迄ニテソアラメト申ケレハ諸人誠ニサモ覺ユト同スルヲ聞テ虛空ニシハ聲カレニテヨモ七人ニハ限候ハント哈テ謂ケレハコハ何ニト驚テ諸人空ヲ見上タレハ庭ナル鞠ノ懸ニ眉太ニ作金黑ナル女ノ首面四五尺モ有ラント覺タルカ亂レ髮ヲ振擧テ目モアヤニ打笑テハツカシヤトテ後ロ向キケル是ヲ見人アツト呵（サヒヘ）テ同時ニソ皆倒レ臥ケル加樣ノ化物ハ蓋目ノ聲ニ恐ルナリトテ每夜番衆ヲ居テ宿直蓋目ヲ射サセケレハ虛空ニトツト笑聲每度ニ天ヲ響シケリサラハ陰陽師ニ門ヲ封セサセヨトテ符ヲ書セテ門々ニ押セハ目ニモ見ヘヌ者來テ符ヲ取テ棄ケル間角テハ如何スヘキト思煩ケル處ニ彦七カ緣者ニ禪僧ノ有ケルカ來テ申ケルハ抑今現スル所ノ惡靈共ハ皆修羅ノ眷屬タリ是ヲ靜メン謀ヲ案スルニ大般若經ヲ讀ニ不可如其故ハ帝釋ト修羅ト須彌ノ中央ニテ合戰ヲ致ス時帝釋軍ニ勝テハ修羅小身ヲ現シテ藕絲ノ孔ノ裏ニ隱レ修羅又勝時ハ須彌ノ頂ニ座テ手ニ日月ヲ握リ足ニ大海ヲ踏加之三十三天ノ上ニ責上テ帝釋ノ居所ヲ追落シ欲界ノ衆生ヲ悉ク我有ニ成サントスル時諸天善神善法堂ニ集テ般若ヲ講シ給フ此時虛空ヨリ輪寶下テ劔戟ヲ雨シ修羅ノ聲ヲ寸々ニ割切ルト見ヘタリサレハ須彌ノ三十三天ヲ領シ給フ帝釋タニモ我叶ヌ所ニハ法威ヲ以テ魔王ヲ降伏シ給フソカシ況乎薄地ノ凡夫ヲヤ不借法力難得退治ト申ケレハ此義誠ニ可然トテ俄ニ僧衆ヲ請シテ直讀ノ大般若ヲ日夜六部迄ソ讀タリケル誠ニ依般若講讀力修羅威ヲソ失ヒケル

難太平記云大敵難儀は了俊骨を折靜謐の時になりて無功緣者に申與なと利口有と云々

園太曆云文和元年五月十八日今日等持寺住持祖曇和尙歸洛是上皇等御出京事爲秘計依武命先日下向東條邊故玄忠法印眞弟禪侶爲楠木緣者秘計彼邊而此間右大將帥大納言四條中納言等沒落口尙所之間彌失方便或云東條御所事以外嚴密就中祗候之輩等猶淸撰兩三人之外口口御所役なと猶不可祗候之由有沙汰云々

今川了俊書札禮云大內なとは今も我々には恐々謹言と書候て詞も以之外無禮に書候へ共是又沙汰の外に候侍職に取ても此人々事は諸人被存候なれ共とかむるに不及候仲秋か方への狀には恐惶と被書候て候緣者心地にて敬候哉然は仲秋か親方にて候上は被敬れても不覺あるまし候へ共父道階之時無禮に候しを主人も家人も請次候て振舞けに候うたてしく存計候

愚耳舊聽記云（油河之城闕落之條）右之者とも申けるは我々か力にて何としてか善九郎殿を追散し可申哉若御馬出候はゝそれかし共か親類緣者のともからをまねきあつめ油川衆と出合身命を捨て花々敷切合御目にかけんとそ申ける

赤松記云かくて五代目を則景と申此人宇野といふ所を知行し宇野名字の元祖なり此時關東に下り給ひて北條との緣者となつて建久四年七月四日佐用庄地頭職を賴朝の御下文御拜領なり是よりして宇野播磨權守則景と申云々

里見九代記云正木は一ッの事なれは替心はなけれとも萬惑はゐん者の一へんにて義堯公の御前も死去被成間たかひに心をうたかいてよしみうとくなりにけり

末森記云內藏助大國ヲ持謀叛ヲ心ニ懸人數押ヲ拵殊ニ緣者ノ結ヒヲ企タルハカリ心ヲトケサセ其上多勢ヲ以テ働候處ニ度々ノ合戰ニ切勝越中利波郡マテ切取候事無比類手柄ノ段日本ニオキテ武門ノ統領タルヘシ云々

安土日記云引檀之城是又明退候則瀧川彥右衞門山田左衞門尉兩人被差遣併矢藏引崩シ破却サセ木目峠打越國中可爲御亂入之所江北淺井備前守手ノ反覆之由其注進候然トモ淺井者歷前之爲御緣者之上剩江北一圓ニ被仰付之間不足不可在之條可爲虛說ト思食候云々

甲陽軍鑑末書云勝賴公信勝公ノ御シルシヲ取都ヘ上スル

信長ハ道ニテ此御頸ヲ實見アリテ則勝頼公御シルシニ向テ久下ノ城ヘ參ラレ先陣ヲ仰付ラレ下サレヨトテ訴訟ノ候當家ニ居ラレ候佐伯赤松衆ヲハ筋目ノ候トテ兩人ヘ付ラレ赤松殿佐伯殿ノ陣ヲ千餘キニシテ本備ノ先陣ト密カニ定ラレテ候ヘハ兩人ハ涙ヲ流シテ忝シト申上ラレテ候是ハ御客位ノ衆ニテ候モトハ御一族ニテ候云々

又云（八上氷上御先祖條）其外大家亡國ノ子孫ヲハ賞翫シテ客位衆トテ馳走ナサレ候

○枝葉衆

安土日記云天正九年二月廿八日五畿内隣國之大名御家人ヲ被召寄駿馬ヲ集於天下被成御馬揃聖王ヱ被備御叡覽訖（中略）御馬場入之次第御内府之御裝束御肩ニテ金シヤウ以テ御ホウコウ被召候今度京都堺ニテ珍シキ唐織物御尋ネ被成トモ御枝葉ノ御衆御裝束ト被仰出所近江隣國ヨリ我不劣ト上品之唐綾唐錦唐縫物等盡其員備上覽奉ル者也

塙檢校保己一編

稱呼部八上

○大名

平家物語云（ふし河の條）大しやうくん小松こんのすけ少將これもりの卿又はんとうのあんないしやとてなかゐのさいとうへつとうさねもりをめしてやよさねもりなんちほとのつよゆみせいひやう八かこくにいかほとあるそととひたまへはさいとうへつとうあさわらひてさ候へは君はさねもりを大矢とをほしめされ候ひけるかわつか十三そくをこそつかまつり候へはんとうに大矢と申ちやうのものゝ十五そくにをとつてひくは候らはすゆみのつよさもしたかもの五六人してはり候かやうのせいひやうともかい候へはよろいの二三りやうはたやすくかけていとをしを候大みようと申ちやうのもの、五百きにをとるは候らはす

長門本平家物語云（木曾合戰條）その、ちは世のきこゑをそれて當國の大名根井小太滋野幸親といふものによしなかをさそひ幸親これを請取てなしかしかきけるに判官物語云（義經秀衡か館に入たまふ條）やすひらをよひて申けるは兩國の大名三百六十人をすくりて日々にわうはんをまいらせて君をしゆこしまいらせよ

吾妻鏡云元暦元年三月一日御下文云下土佐國大名國信國元助光入道等所可早源家有志輩同心合力追討平家事右當國大名并御方有志之武士且企參且同心合力可追討平家之旨被宣下之上依鎌倉殿仰所令下知也就中當時上洛御家人信恒可令下向如舊令申安堵不可有狼藉大名武士同心合力不可見放之狀如件宜承知敢勿違失以下壽永三年三月一日

又云文治四年三月十七日癸丑東大寺材木周防國出杣之處十本引失訖仍被宛諸國者還可爲懈緩之間被宛諸大名者存結緣可沙汰進歟之由雖有院宣御家人趣善緣之類少者歟有難澁思者大功難成歟之由今日被進二品請文

又云建久四年六月五日庚子八田左衞門尉知家與多氣太郎義兼者常陸國大名也强雖不挿宿意於國中相互聊爭權勢者也云々十二日丁未八田左衞門尉知家訴申義兼有野心之由廿二日丁巳爲善信俊兼等奉行被召決

知家(中略)知家承伏無所遁仍被收公常陸國筑波郡南郡北郡等領所被召預其身於岡邊權守泰綱云々於所領等者則今日賜馬場小次郎資蒔云々七月三日丁卯彼造營行事々被仰付馬場小次郎資蒔云々令拜領多氣義蒔所領已爲當國内大名云々

又云正治二年二月六日壬戌重忠云綽起楚忽不可有驚樋引橋之計難治歟云々安藤右馬大夫右宗聞之云畠山殿者只大名許也引橋構城郭事不被存知歟壞懸近隣小屋於橋上放火燒落不可有子細云々

又云弘長元年五月十三日甲戌今日畫番之間於廣御所佐木壹岐前司泰綱與澁谷太郎左衛門尉武重及口論是泰綱以武重有稱爲大名之由事武重咎之已亘嘲弄之詞也於當時全非大名先祖重國(號澁谷庄司)者誠相模國大名内也然間貴邊先祖佐々木判官定綱(于時號太郎)牢籠之當初者到重國之門寄得其扶持子孫今爲大名歟云々泰綱云東國大少名幷澁谷庄司重國等皆官平氏莫不蒙彼恩顧當家獨不諛其權勢棄譜代相傳佐々木庄偏運志於源家遷住相模國尋知音之好得重國以下之助成繼身命奉逢于右大將軍草創御代抽度々之勳功兄弟五人之間令補十七箇國守護職剩面々所令受領檢非違使也昔牢籠更非恥辱還可謂面目之云云

承久軍物語云さるほとに御一もんをはしめとしてその名きこゆるさふらひたちを二位との、御まへにめしてこんと御大しのいけんをとはる覺阿善信ら申ていはくいかさまにもふしともをさしのほらせられ官軍をせめほろほさんにはしかしと申せは二位殿もしかるへしとりやうしやうしたまひいかに侍ともたしかにきけにつほんこくのさふらひはむかしは三とせの大はんとてていとをしゆこすることなりこの大事とをもひいへのこらうとうまてはれらかに出たちてのほるといへとも三とせのさいきやうにちからつきくに〳〵にくたる時はかちはたしにてかへりしを故大しやうとのこれをあわれませたまひ三とせを六月につゝめふんにしたかひ人のたつせるやうにしはいしたまへはよろこふことかきりなしかゝる御なさけふかき御心さしをもわすれまいらせこんと京かたの御かた仕らんかまたくはんとうに御ほうこうつかまつらんかた〳〵いまたしかに申きれとのたまひしかはこれをうけたまわる大名小名みな〳〵なみたをなかして申けるは心なきてうるいちくるいまても人のをんをかんせすといふこ

となしましていはんやにんけんの身としてたい〳〵こうをんをいたゝきあに木石にをなしからんや一命をはまいらせおく上はちからのをよはんほとはせめたゝかいかたきのちんをまくらとしてうちしにせんよりほかの事候はすとをの〳〵一同に申けれは御心よけにそおはしけるあくれは五月廿日のさうたんにてかまくら中の大みやう小みやううきやうの大夫のもとにあつまりていくさのせんきありけり

又云さて又くはんとうのしやうくんにはくわうみやうふしのせつしやうみちいへこうの三なんことし二さいにならせたまふをそさため申されける(中略)承久元年六月廿五日都をたゝせたまひて七月十九日のむまのこくにはかまくらちかきかたせといふところにつかせたまいけるたちまちにせつくわんの家をいて、武士の大しやうに備りたまふことめつらしかりける次第なりみちすからのよそをひ花をかさりしありさまたくひなきけん物なりかまくらにありける人々しまつさゝもんいとうさゝもんをかさはらの六郎をはしめとしてあまたの大名みな〳〵かたせまてわか君の御むかゝに出たり時のきら後のをほへゆゝしかりけるありさまなり

百練抄云暦仁元年二月十七日癸巳關東將軍上洛兩大閤攝政相國於棧敷被見物天下貴賤羣集人不得顧車不得廻修理大夫時房朝臣已下可然之大名一人不漏參洛云々

梅松論云將軍の舊跡に御所を造られしかは師直以下の諸大名屋形軒をならへけるほとに鎌倉の體を誠に目出度そおほへし云々

太平記云(五大院右衛門宗繁・櫻相模太郎條)義貞已ニ鎌倉ヲ定メテ其威遠近ニ振ヒシカハ東八箇國ノ大名高家手ヲ束ネ膝ヲ不屈ト云者ナシ云々

又云(依山門嗷訴公卿會議條)同八月ニ上皇臨幸成テ供養ヲ被遂ヘシトテ國々ノ大名トモヲ召サレ代々ノ任例其役ヲ被仰合云々

又云(龍馬進奏條)諸國ノ御家人ノ稱號ハ頼朝卿ノ時ヨリ有テ已ニ年久シキ武名ナルヲ此時代ニ始メテ其號ヲ被止ヌレハ大名高家イツシカ凡民ノ類ニ同シ

又云(天正本摩氏尚京條)山名參河守ヲハシメトシテ宗徒ノ大名五頭ヲ指向テ攻メラレシニ一日一夜戰テ成願坊討死シケレハ城ハ則チ落ニケリ

又云(主上御沒落笠置條)同八日兩檢斷高橋刑部左衛門糟谷三郎宗

秋六波羅ニ參テ今度被ニ生虜一タマヒシ人々ヲ一人ツヽ、大名ニ被レ預(中略)萬里小路中納言藤房六條少將忠顯二人ヲハ主上ニ近侍シ奉ツルヘシトテ放召人ノ如クニテ六波羅ニソ留メヲカレケル

又云相模入道井田樂條其頃洛中ニ田樂ヲモテアソフ事昌ニシテ貴賤擧テ是レニ著セリ相模入道此事ヲ聞キ及ヒ新座本座ノ田樂ヲ呼下シテ日夜朝暮ニモテアソフコト無ニ他事一入興ノ餘ニ宗トノ大名達ニ田樂法師ヲ一人ツヽ預テ裝束ヲ飾ラセケルアイタ是ハ誰カシ殿ノ田樂彼レハ何カシ殿ノ田樂ナントヽ云テ金銀珠玉ヲ遥フシ綾羅錦繡ヲ敝レリ宴ニ臨ンテ一曲ヲ奏スレハ相模入道ヲ初メトシテ一族大名我劣ラシトシタヽレ大口ヲ解テ拋出ス之レヲ集メテ積ニ宛山ノ如シ

難太平記云たとひ少々御政道たかふことありても關東大名等一同せは日本國の守護たるへし云々

庭訓往來云仰ニ關東下向之大名高家人々一以ニ路次之便一可ニ打寄一之由內々其聞候

勢州軍記云南伊勢國司北畠多藝御所者村上天皇後胤公家中院之一家幕紋割菱梧桐也先祖北畠大納言入道一品源親房公率ニ後醍醐天皇一而足利家尊氏卿謀叛之頃立ニ文武之道一有ニ忠節一(中略)其領知者先於ニ南伊勢一志飯高野多氣渡會五郡一其外大和國宇陀郡也凡侍九千人內馬上千五百騎小人六千人合壹萬五千之大將也皇家衰微之後者公家之大名此國司一人也云々

南禪寺舊記所載竺仙和尚南禪金剛顯應誌云曆應五年歲在ニ壬午一正月十六日夜本寺大雲庵災烟燼既燼衆の惶惑(中略)明日左武衛將軍處奉ニ所レ乘鞍馬一以獻ニ大名一赤松氏以ニ絲帛穀紙一常住集ニ衆諷經一越三日衆擧復ニ此元位一自レ是近遠日至ニ瞻禮一者如ニ流水一云々

園太曆云觀應元年十一月廿二日武衛禪門可ニ亂入一旨有ニ浮說一而居ニ住和州田口一之條者勿論更無ニ別所存一可レ有ニ不慮事一之旨觸レ耳之間只隱レ身許也更無ニ別所存一之間問答之旨吉野執行申レ之又西國大友口田以下大名七八人將軍分不レ可レ有ニ殊事一之旨申レ之云々

後愚昧記云應安二年四月廿日甲申日吉神輿入洛(中略)赤松勢在ニ三條河原邊一也數多勢云々其外勢不レ出執事以下大名等在ニ將軍亭一云々

又云應安六年十二月七日今日故藤大樹前大納言義詮卿七ケ年正日佛事也於ニ仁和寺等持院大樹墓所禪侶行ニ佛事一將軍行ニ向其場一諸大名等扈從云々

又云永和三年八月八日今夜又可レ有ニ騷亂一之由風聞云々人々推量外者依ニ越中合戰一武藏守與ニ越中守護一故大夫入道子向背之儀也依レ之兩方大名等可ニ見繼一之間可レ及ニ天下珍事一云々其間雖レ有ニ種々巷說一不レ遑レ記レ之

又云永和五年二月廿日今夜世上騷動然而無レ爲ニ明了分明一不レ知ニ何事一巷說云執事頼之朝臣也諸大名等可レ退ニ治彼朝臣一之結構等有レ之依レ之如レ此云々或云如レ此諸大名等厭却之間頼之朝臣欲レ沒ニ落四國一而大樹抑ニ留之一云々」

又云永和五年後四月十四日武士等多上邊江馳上之由路人稱レ之(中略)大樹兄弟時在ニ彼所一云々武士等圍ニ繞之一聊不レ入レ人云々在京大名無ニ殘者一云々

又云永和五年後四月廿一日去夜京中物忿云々又其外資康資敎等可レ令ニ罪科一之由大名土岐等等一同云々

鹿苑院殿御元服記云永和元年三月廿七日石清水八幡宮御社參(中略)諸大名一騎打之次第小侍所山名彈正少弼管領武州侍所細川右馬助

松田貞秀記云永和元年三月廿七日石清水八幡宮御社參(中略)諸大名一騎打之次第塩津播部頭小侍所山名彈正少弼但依ニ所勢一取直之後參レ之管領武州侍所細川右馬助管領後騎役人一騎打態後騎也

又云永和三年八月廿日石清水八幡宮御社參(中略)諸大名一騎打之次第小侍所山名彈正少弼管領武州侍所細川右馬助

松田貞秀記云永和元年三月廿七日石清水八幡宮御社參(中略)諸大名一騎打之次第塩津播部頭小侍所山名彈正少弼但依ニ所勢一取直之後參レ之管領武州侍所細川右馬助管領後騎役人

明德記云抑十月十五日午ノ刻ハ叩地振オヒタヽシクシテ路次往反ノ輩モ步事ヲエス家內安座ノ人々モ肝魂モ消ユル斗也(中略)御所樣ヲ始進セテ諸大名近習ノ人々モ何事ニテカアランスラム落居ハ御吉事ナリトモ難儀ノ合戰出ヱ來リナハ誰身ノ大事ト成何ナル不思議カ有ランスラント罪ヲ愼ミ身ヲ顧ミテ怪ミ思ハヌ人ハナカリケリ

花營三代記云應永廿九年壬寅閏十月一日管領已下諸大名有ニ出仕一也

又云應永廿八年正月一日乙丑諸大名御所樣御方樣御墓へ有ニ出仕一云々

松田長秀記云正長二年三月九日御元服(中略)御祝儀以後於ニ御會所一東向法體衆其外者大名少々御對面云々

又云永享十二年七月二十五日大將拜賀供奉行列次第(中略)近習者大名達

又云長祿二年七月廿五日任ニ內大臣一給(中略)御出時於ニ庭上一跪居事公家人達ハ月花門與ニ四足門一間一列南面一騎打大名ハ同庭上北面官人ハ四足門外左脇西面云々

普廣院殿御元服記云正長二年三月九日乙卯亥刻御元服(中略)御祝規式以後於ニ御會所東向一法體衆其外諸大名少少御對面自餘明日可レ參之由被ニ仰出一候

建内記云正長二年七月十四日細川右京大夫自去七日風痾今日逝去云々今日諸大名面々參申云々人々群參也但外様人々不及參入歟

結城戦場物語云鎌倉殿は御らんして弓矢の冥加までとて御腹めされけるあひたちやくしけん王殿をはしめとしむねとの大名三十餘人一度に腹をかききりてひとつ枕にふしたまふ

嘉吉記云赤松大膳大夫滿祐一族ノ恥辱コレニ過キスト諸大名ヲ語ラヒ訴訟被申ケル罪科ノカレカタケレハ御下知ヲ成サレ持貞腹ヲ切ケリ

康富記云應永八年八月廿四日今朝卯終冠室町殿奈良御參詣云々御臺同御參云々管領已下諸大名等被參云々

又云嘉吉四年正月十日是日室町殿有渡御於管領畠山左衛門督入道宿所（春日萬里小路亭）當御代渡御之初度也自烏丸殿（北小路萬里小路御所也）至管領宿所（春日萬里小路東南）有路次辻固諸大名被致警固者也云々

又云應永廿四年八月廿四日今朝卯終刻室町殿奈良御參詣云々御臺同御參云々管領以下諸大名等被參云々

又云嘉吉二年九月朔日參外史文亭之時令語給云室町殿御元服事廿八日管領出仕之時以伊勢守入道自御所被仰下（中略）退出之後廻使於諸大名被尋之處或可爲鹿苑院殿御例之由被申云々

又云同年十一月十三日庚午是日室町殿御弓始也小笠原民部少輔爲御師範役參入云々今日諸大名近習東向衆等被進御太刀云々

又云嘉吉三年五月六日肥前入道語云近日高麗人可來朝也先々要脚被懸仰諸大名被出之處今時分諸大名諸國役出錢不可叶之間高麗人不可被入立京都可被追歸也其間事管領被存之間諸大名一揆して可被返高麗人也可爲如何樣哉意見密々談合云々

又云嘉吉三年六月十九日是日高麗人參室町殿懸御目者也（中略）凡今度高麗人來朝事未付兵庫津之以前於管領有評定其謂室町殿御幼稚時分也諸大名國役已下要脚無沙汰之時節也旁爲無益歟之間不可被入日本之由被仰遣之處高麗人申云非如先々商賈之料爲普廣院殿御吊參洛之由候間就其可被入歟之由諸大名等有評議遂以被入云々

又云文安元年七月十二日己丑今度彗星御祈禱內外典御供料事如先々自武家被沙汰進是諸大名面付不課國別可被致沙汰之由自管領被申沙汰云々

又云文安六年四月十九日乙巳室町殿御元服之參賀也先諸大名近習五番外樣進上御太刀懸御目云々

又云寶德元年八月十二日康申晩幷入夜地震小番二番衆山下將監入道語云諸大名今朝爲瑞春院殿御訪被參申室町殿云々

又云享德三年十一月廿日丁卯昨日管領卽被出仕申御馬御太刀被進上了仍今日世上無爲之御禮諸大名公家門跡等被參賀申云々

季瓊日錄云永享八年五月一日舊年鹿苑院殿幷勝定院殿御佛事錢諸大名未進分可督之旨有命

又云長祿二年卯月十四日棱殿會御聽聞以先例大名樣可被參之由被仰出于伊勢守卽往而傳此命也

蜷川親元記云寛正六年七月廿二日丁卯若君樣御誕生御禮參賀公家門跡大名奉公以下面々進物如先規云々

文安年中御番帳云諸大名衆御相伴衆勘解由小路右兵衛督畠山左衛門督云々

齋藤親基記云天文元年閏二月廿一日蕊幷應事先度御禁制之處近日在之重而被仰出之以治河國道諸大名被仰云々

應仁記云大名ノ身ニヲイテ不義不忠ノ子細アラハ管領ニ仰出サレ諸大名ト評定アッテ隨其過失被停止出仕者歟

應仁別記云文正二年十二月廿五日義就上洛有山名金吾カ樣ニアリシカトモ細川右京大夫勝元ハ尾張守ヲ最負ナリ山名細川聟モ舅モ入サリケリ以外ノ霍執也尾張守屋形ニハ高櫓ヲアケ外堀ホリマハサレタリ角テアラ玉ノ年立チカヘリ春ニソナリケル山名金吾オモハレケル樣何マテ角テアルヘキソトテ一味ノ大名ヲアツメラル

應仁略記云今は偏に武門の打執時のほまれに歸伏せり昨日に替る今日の振廻大名猶如此いはんや小名非名は順次の訴訟を持つといへとも不肖の故に叶はすとや云々

又云神武天皇よりこのかた政化を公武の兩門にいたゝきなから大名權威をあらそつて各々にはたほこをたて鳳城のうちに東西をわかつて陣頭をならへ矢さけひを合せて雌雄をけつすまことに逆黨家よりいてゝ國を犯すの世季百王一百四代このかたはしめなりといつゝへきか

多聞院日記云文明十六年五月廿七日畠山殿方書狀之事先規事令中絶無覺悟於諸大名は寺門直の狀勿論なり

細川武衛畠山三家の事は舊老覺悟不同なり

足利季世記云畠山高政ト家內遊佐河內守安見美作守ト不

快ノ事ノアリ是ハ高政河内半國ノ領地遊佐ハ代々守護代マテ大名ナレハ威勢主ニ益リケリ安見美作守ハ中村圓賀ト云者ノ子ナリシヲ安見養子トシテ之レモ近年守護代ヲ持ケレハ河州和州ニテ所領アマタ持チケレハ兩人トモニ大身ニテ主ヨリ多勢ナリ○按ニ本書及松隣夜話ニ謂トコロノ大名ハ共ニ陪臣ノ大名ナリ

宗五大雙紙云諸大名ヘ御成の時は萬疋被レ遣候其とき舞臺の兩方に五千疋宛つまれ候五百疋つゝ兩の手に引さくるやうにこしらへて大名の內衆器用もよく隨分の仁十人持て被レ出候又折紙にて被レ遣候ことも候歟此度承候へは島の公方樣義植畠山式部少輔のところへ御成の時御供衆の末々人同名の衆持ていてられ候ふたひの兩方に五千疋つつまれ候よしうけたまはり候不審に存し候同名侍申入道瑞笑たしかに大名內衆ついふんの仁持て被レ出置候を座の者かくやへはこひ候よしをるしおかれ候

又云殿中にて能させられ候とき小袖ぬきの事御服の下へは必大夫いたゝきこすわうの上にうちかけてきてくれは張きりをまひ候てきてぬき候て左のかたにうちかけて御さかもりをはつるまて候又まひ申候ときもかたにかけなからまひ候御腹出候へは公家大名御供衆申次其外御通りにいてたるほとの衆かけにて小袖をぬきふたいへ一人つつ持ていて候ておき候を座のものとり候て樂屋へまかり候

年中定例記云殿中從二正月一十二月迄御對面御祝已下之事公家大名外樣少々御供衆御部屋衆申次番頭番衆少々節朔衆申也

御事始記云細川內にも一人も無レ之其外山名內に垣屋御成雖レ申レ之是も無二證跡一也此分慥に御返事申渡候なり惣別大名の御內仁なと公方樣へ直々物を進上仕候事むかしはこれなきなり大名等へ御成被レ申時其內者御禮申事はつねの儀なり

御產所日記云御生絹御加持三寶院御使は伊勢兵庫助御引出物等亭主勤二仕之一云々御所樣還御以後大名以下各御太刀一腰金進上云々

家中竹馬記云公方樣へ諸家より御太刀御馬進上ある時自然御馬をは代にて御進上あるには大名は千疋なり其外は五百疋もあり又奉公衆なとは大概三百疋也

書禮袖珍寶云大名と云時は武性分限とも又勝たるを云也大名と云時は武性早けれとも其身文武譽ありて立身して分限よきをいふなり

伊勢貞助雜記云御紋御着用之御大名人の子に名字をわけられ候はゝ其人も御紋着用あるへく候かの事名字を分けらるゝ御方の可レ依二御存分一候か又は被二仰出一次第にもよるなり近頃も畠山殿の名字を被レ分御紋着用あつて御供に參勤之例連綿有レ之候

江濃記云尊氏卿義詮卿二代の將軍につかへ武家の政道を輔佐し子孫四職の其內に撰まれ京極殿と稱し近江國十三郡の中八郡を六角方知行し五郡を京極方に支配す明德年中より京極殿又大名に成て出雲隱岐飛驒半國を知行して其勢惣領家にまさりけり

東寺供僧評定引付云一今度和州在陣之諸大名方爲二寺家卷數一可レ被レ遣哉否事披露之處可レ被レ遣條勿論事歟然者於二廿一口方一者飯尾加州方卷數被レ遣幷柳酒一荷同餅數二百籠ニ入添可レ被レ遣之由評儀了其餘大名事民部少輔殿甲斐方衆勝光院方一色方三方十八口方爲二沙汰一可レ被レ遣也云々

相州兵亂記云顯定ノ兵戰疲レテ引退ク斯レマテハ扇谷殿每度勝ニ乘ルトイヘトモ人馬皆疲レヌ若黨其數ヲ不レ知討レニケリサレハ山內方ハ何方ニモ大名高家ニテ軍勢卓散ナレハ縱令ヒ軍ニ負ル事度々ナリトモ分國廣ケレハ重テ大勢ヲ催シ退治センニイトヤスカルヘシトソ云ヒケル」

大內問答云諸大名の衆御出之時樣體如何之事諸大名御出之事は三職へ被二對申一ての御扱よりは淺く御座候はましそれを以て可レ有二分別一候御歸りには椽まて一度庭上にて一度以上二度の御禮たるへきか

勢州四家記云和州宇陀三人衆といふは澤秋山芳野也昔者國司の與力後には被官となれり彼等何れも大名なり

土岐家聞書云當方を屋形と云事惣して大名の宿所を屋形と申事元弘建武の頃天下うちつゝきみたれたるとき濃州へ行幸ありけるに當國に島と云ふところに行宮を立てられけり定林寺殿頼貞物語御申あへり世治り御入洛のときこれを屋形と號して住居あるへきよし勅定にて御たまはりありけると云々

大館常興記云天文七年九月十八日六角被レ申候被官大名御下知事不レ立二入是非一被二成下一候はゝ可二忝存一旨海老備朽民以二兩人一被レ申候可レ致二談合一之由重而被二仰出一候間明日私へ各同道にて可レ有二來臨一之旨日行事承候なり大事の談合と被二思召一候由內々御氣色也云々

義光物語云鮭延越前進出御定誠に潔く候へとも退て愚案を廻らし候に景勝公も數代武勇の家として東國一の大名なり

松隣夜話云上杉古參大名藤田見田荻谷等ノ人數評定平井ノ不レ久ヲ鑑テ氏康ニ手ヲ入旗下ニ屬ス

末森記云利家卿利長卿御父子先手村井又兵衛不破彦三郎其外家老大名小名召寄軍ノ評議アリ云々

伊達日記云政宗公二本松豎ノ松御弓矢强佐竹會津岩城石川白川迄御敵ニ候間此時右ハ大名衆仰合ハサレ伊達入弓矢ヲ取リ長井ヲ御取可レ被レ成由被ニ思召一候處ニ云々

朝日物語云其後藤吉カヽミノ原ヨリ事故ナク歸リ美濃國ニテ七千石知行ヲ下サレケル俄ニ大名ニ成人ナキニ迷惑シテ七郎左衛門ヲ主ノ如クウヤマヒケルカ七千石ノ主ト成テ七郎左衛門ヲ呼ヨセ七百石トラセ末々何程大名ニ成タルトモ十分ノ一トラセント約束シテオトナニ仕タリケル

豐臣家譜云秀吉又下ニ九條法制于諸人一其四曰小名者本妻之外可レ蓄ニ一妾一又不レ可ニ別求ニ屋宅一大名亦其侍妾者一兩人而可也

甲陽軍鑑云臆病なる大將は心愚痴にして女に似たる故人をそねみとめる者を好諂へるをあいし物事無ニ穿鑿一に分別なく無慈悲にして心至らねは人を見しりたまはす機のはしりたることなく氷堅たる樣なれは異相也是れ偏に弱大將の女のことくにありて心愚痴なるをもつて如レ此加樣の人も大將といへはしかも大名にて二萬三萬或は五萬六萬の人數を被ニ下知一也辱く存る者は百人の内外ならてはなし

籾井日記云（毛利家與丹波家別所就手筈遠變從兩家遣使者條）今毛利家天下ニ双ヒナキ御大名ニテ元就公大勇ヲ世上ニ見セラレ代々ノ御家ニ候ユヘ天下ヲ御指南アルヘキ御家ト一天下カ沙汰スル故ニ喩ヘハ西國ノ者モ大方ハ御味方ト唱ヘ候

松原自休手錄云此節諸大名ノ家々心々ニ懸集ル内府ヘハ羽柴三左衛門一族羽柴左衛門大夫黑田如水島甲斐守藤堂左渡守羽柴右近大夫有馬法印父子金森法印以下毎夜候レ之大谷刑部少輔ハ内府ヘ於ニ取懸一可レ爲ニ味方一私宅ニ集ニ軍勢一云々

永祿記云十月二日池田ヘ御手遣大軍を以て外構放火せられ即池田降參人質を進上間御本陣芥川ヘ被ニ打入一安堵之思を被レ成畢然者五畿内其外諸國大名小名公儀爲ニ御禮一參着

天正記云（信高逆意條）のふたかの老母息女をそへ人質としてこれをいたす秀吉これをみていにしへを思ひ猶れんみんの心さしをなし奉り則十二月廿九日に山崎の城に到り則かの地に於て越年あり元日よりはりまのひかしに赴き二三日の間諸國の大名小名殿中につらなり車馬門前市をなす

難波戰記云（大御所就御返事大坂城中評定條）老兵等申上ケルハ舊冬御合戰ノ砌モ古太閤ノ恩顧ノ大名モ關東ノ御猛威ニ恐レ味方歸伏スルモノナシ云々

當代記云天正十六年五月此年於ニ聚樂一關白秀吉公金賦リアリ内裡ヘ金千枚其外銀進上也諸大名ヘ金五百枚三百枚二百枚其上銀相添被レ遣前代未聞ノ儀也夥共無ニ云量一其體城ノ門外於ニ廣地一秀吉公束帶シ給牀机ニ腰ヲ掛ケ令レ居給各モ裝束シ謹テ拜ニ領之一大名小名不レ殘如レ斯也

又云慶長十三年正月舊冬駿府火事ニ付女房衆五人ヘ諸國大名小名不レ殘令ニ音信一皆金銀小袖等也

板坂卜齋慶長記云慶長四年冬島津龍伯と家康公知人に御なりなされ度と被ニ思召一候へとも其節は大名のつき合ひなし法度にはなく候へともおのつから通法なり江戸御扶持人に流竿と申す目くすしあり根本薩摩の者なりめしのほせ流竿に被レ成ニ御尋一候は龍伯とは知人かとの御意いまた一禮不レ申候由申上候伊集院高干とて家老大名あり知人かと御たつね候へは知人の由申上候使に參候へと被ニ仰付一樽二百鳥小袖添被レ遣候へは過分と申御禮に參上せられそれより高干と折々被ニ値遇一候頓而龍伯も御禮に被レ參進物むりやう十卷朝鮮馬一疋（ふち）家康公路地の外へ迎に出御同道數寄屋へ御つれたち半時斗御咄云々

○外樣大名

太平記云（天龍寺供養條）此上ハ武家ノ沙汰トシテ當日ノ供養ヲハ執行ヒ翌日ニ御幸可レ有トテ同八月二十九日將軍幷ニ左兵衛督路次ノ行粧ヲ調テ天龍寺ヘ被ニ參詣一ケリ（中略）十番ニハ外樣ノ大名五百餘騎直垂著ニテ相隨云々

又云（足利殿御上洛條）相模入道大ニ驚テサラハ重ネテ大勢ヲ指上セテ半ハ京都ヲ警固シ宗徒ハ船上ヲ可レ責ト評定有テ名越尾張守ヲ大將トシテ外樣ノ大名二十人ヲ被レ催

又云（將軍自筑紫御上洛條）將軍ハ一族四十餘人高家郎黨五十餘人上杉ノ一類三十餘人外樣ノ大名百六十兵七千五百餘艘ヲ漕雙ヘテ海上ヲソ上ラレケル

又云（節度使下向條）左馬頭直義朝臣不レ斜喜ンテヤカテ鎌倉ヲ打立テ夜ヲ日ニ繼テ被レ急ケリ相隨フ人々ニハ吉良左兵衛尉同三河守子息三河三郎石堂入道其子中務大輔同右馬頭桃井修理亮上杉伊豆守同民部大輔（已下十八人略レ之）外樣ノ大名ニハ小山判官佐々木佐渡判官入道々譽（以下略）坂東ノ八平氏武藏

七黨ヲ始トシテ其勢二十萬七千餘騎云々

應仁記云此外奉行頭人ト奉公外樣ノ大名家々ノ殿ツクリ注セントスルニ際限ナシ云々

慈照院殿年中行事云 正月四日將軍家出二御于御對面所一(中略)三職御相伴衆國持衆准國主外樣衆一人充奉レ賀レ之於レ是殿上人出二于元座一公家ト披露之後日野三條御禮次大外樣衆惣番衆上樣御被官一兩人奉行衆御目見

日吉社室町殿參詣記云御供奉(中略)外樣大名四人細川右京大夫頼元畠山右兵衛佐基國京極治部少輔高詮六角備中守滿高(同佐々木非二供奉一)結城勘解由左衛門尉藤原滿藤(御前二扣非二御供一)

○國大名

太平記云(武藏野合戰條) 四陣ハ御所一揆トテ三萬餘騎二引兩ノ旌ノ下ニ將軍ヲ守護シ奉テ御内ノ長者國大名閑ニ馬ヲ扣ヘタリ

永祿六年諸役人附云外樣衆大名在國衆(號二國衆一入一)攝津守中原晴門朝臣細川六郎

北條五代記云秀吉主君の恩を忘るゝは是れ大鑑にあらすやしかるときは扶持する國大名は秀吉の大敵いかてかおそれさるへけんや

○法師大名

太平記云(山門變儀條) 去程ニ上林房阿闍梨豪譽ハ元來武家ヘ心ヲ寄シカハ大塔宮ノ執事安居院ノ中納言法印澄俊ヲ生捕テ六波羅ヘ是ヲ出ス護正院僧都猷全ハ御門徒ノ中大名ニテ八王子ノ一ノ木戸ヲ堅タリシカハ角テハ叶シトヤ思ケン同宿手ノ者引ツレテ六波羅ヘ降參ス

異本太平記云(江州合戰條) 先江州ノ敵ヲ退治シテ美濃尾張ノ通路ヲ開クヘシトテ九月廿七日脇屋左京大夫義助ヲ大將トシテ山徒ノ大名廿五人ヲ向ラル

賀越闘爭記云(波多野玉泉坊傷害條) 爰ニ波多野玉泉坊ハ三千石知行シ飛鳥井寶光院ハ八千石知行有凡日本國一番ノ法師大名ト沙汰シケルカ是ニモ猶不二飽足一シテ玉泉坊密々信長公ヨリ一山惣勢ノ一行朱印ヲ取テ社領神物ヲ進退シ諸院諸坊ニ黄金ヲ懸テ信長公方ヘ遣ス由ニシテ取レケル云々

武家名目抄稿第四十五冊

塙檢校保己一編

稱呼部八中

○中名

甲陽軍鑑云信玄公勘介に駿河今川家の背語をたつねなさる山本勘介申は殊更能家老衆澤山にて中名小名までに武道專心かけ申こと是非に不レ及候

○小名

平家物語云(征夷大將軍院宣條) 外侍には家の子郎等とも肩を並へ膝を組て列居たり内侍には一門の源氏大名小名居なかれたり源氏の座上に泰定を居らる

長門本平家物語云(兵衛佐殿下總ヘ被越條) むさしの國豐島の上たきの川の板橋といふところにちんをとるその勢すてに十萬騎におよへり八ケ國の大名小名へつとう權守庄司大夫なといふやうなる一黨のものともわれおとらしとあるひは二三十きあるひは四五十き百騎面々白はたをさしてそあつまりける

源平盛衰記云兵衛助頼朝石橋ニシテ被レ討之由雖レ有二披露一其條無實ナリ遁二出相山一渡二安房國一相具シテ北條佐佐木三浦ノ黨類越二于上總下總一召二從弘經胤經已下大名小名一既及三三万八千餘騎一

太平記云(畠山道誓上洛條) 畠山入道ハ元來上ニ公儀ヲ借テ下ニ私ノ權威ヲ貪ラント思ヘル心アリケレハ先大名共ノ許ニ行向ヒ未非レ功忠賞ノ厚カランコトヲ約シ未レ親サルニ交ハリノ久シカランコトヲ語ヒ一日モ已ヲ尅シテ禮ニ復スル時ハ天下ノ人民歸レ仁是レ其習ナレハ東八ケ國ノ大名小名一人モ不レ殘皆催促ニソ順ヒケル

建内記云應永廿四年八月十五日放生會也上卿内大臣(義持)殿御參行(中略)又武家大名小名群居無二列立之便一仍蹲居了依二御參行一雖レ似二至敬一却而失レ儀歟今日之儀此分可レ宜哉之由粗有二子細一

嘉吉物語云三條の西の洞院に栴檀の木をほりたて、獄門の形をつくり一の木には赤松入道の首二の木には安積かくひをかけられけりさて左のかたは京極殿右の方は六角殿のたまはりにて大名小名着到をつけて都合壹萬三千騎番をおきて頸のけいこをしたまふ

應仁記云去程ニ御臺所如何ニモシテ此ノ若公ヲ世ニ立テテマイラセント思召テ今出川殿ヲサミシ被レ申底見エテ

如何ナル不思議モ出來セヨカシト思食サレケル心根コソ果而天下ノ亂ト成ニケル去程ニ御臺所肝ト御思案アルニ諸國ノ大名小名ノ中ニ山名金吾ナラテハ一家モ心カケ有諸大名ニ對アマタアリ威勢無雙ト思食ヒソカニ此入道ヲ頼ミ世ニ立テハヤト思召シテ自御文ヲアソハサレテ云云

應仁略記云細川乃分國より群勢上り集りて既に假宿もなければ野陣を張る斗なり山名氏勝の分國より勢の付こと恒例のことしかくて兩家敵しぬれは年來公方不足の御成敗に宿意をふくみをる大名小名はいつれも終の落居を願つゝ今は偏に武門の打執時の譽れに歸伏せり昨日にかはる今日の振廻大名猶如レ斯いはんや小名非名は順次の訴訟をもつといへとも不肖の故に叶はす

永祿記云十月二日池田へ御手つから大軍を以て外構放火せられ即池田降參人質を進上間御本陣芥川へ被二打入一御安堵の思被レ成畢然は五畿内其外諸國大名小名公儀爲二御禮一參着

新撰信長記云三月五日ニ上着有テ醫師半井驢庵所ニ御座ケルカ都鄙遠國之大名小名群集シテ出仕之粧刷シカハ言語道斷ノ儀式也

柴田退治記云十二月廿九日至二山崎城一既於二彼地一有二越年一自二元日一赴二播州姫路一二日三日間諸國之大名小名連レ袂機レ踵車馬門前爲レ市

末森記云其時大名小名ナミ居タル中ニテ利家卿御戯言ニハ内藏助トハ互ニ若年ヨリ度々ノ合戰ニ出會候然レトモ此利家ヲコスコト一度モナカリシ云々

豐臣家譜云秀吉又下二九條法制于諸人一其四曰小名者本妻之外可レ蓄二一妾一又別不レ可レ求二屋宅一大名亦其侍妾一兩人而可也

○新家老

增補筒井家記云桃谷與次郎河村與六郎松浦左内等ハ元來島松倉森カ舊功ノ威ヲ猶メリ且桃谷ハ定次ノ内室信長公ノ娘秀子ノ女佐ノ臣秀子ハ辯才有テ能貞次ノ心ヲ操リ故ニ桃谷又佞才アリテ新家老ノ第一トナレリ

○補佐

太平記云（金剛山寄手軍被誅條）二階堂出羽入道々蘊ハ朝敵ノ最一武家ノ補佐タリシカ共賢才ノ譽兼テヨリ叡聞ニ達セシカハ召仕ルヘシトテ死罪一等ヲ許サレ懸命ノ地ニ安堵シテ居タリケルカ又隱謀ノ企有トテ同年ノ秋ノ季ニ終ニ死刑ニ被レ行ケリ

東遷基業云神君秀頼公に謁したまひ片桐市正且元補佐すへきよし仰付られけり

○探題

太平記云（中前代峰起條）今天下一統ニ歸シテ寰中雖二無事一朝敵ノ餘黨東國ニ在スヘケレハ鎌倉ニ探題ヲ一人オカテハ惡カリヌヘシトテ當今第八ノ宮ヲ征夷將軍ニナシ奉リテ鎌倉ニソ置進セラレケル

又云（長門探題降參條）長門ノ探題遠江守時直京都ノ合戰難儀ノ由ヲ聞テ六波羅ニ力ヲ戮セント大船百餘艘ニ取乘テ海上ヲ上リケルカ阿波ノ鳴渡ニテ京モ鎌倉モ早皆源氏ノ爲メニ被レ滅テ天下悉ク王化ニ順ヌト聞ヘケレハ鳴渡ヨリ舟ヲ漕ヘモトシテ九州ノ探題ト一所ニ成ラント心ツクシヘソ赴キケル赤間カ關ニ着テ九州ノ樣ヲ伺ヒ聞玉ヘハ筑紫ノ探題英時モ昨日早少貳大伴カ爲メニ被レ亡テ九國二島悉公家ノタスケト成リヌト云ヒケレハ云々

賀越闘爭記云（越前江州守護代々條）播磨守ハ朝倉カ譜代ノモノナリシカ先年江州合戰場ニテ信長卿ヘ馳參ケル其忠節ニヨリ越前ノ守護代ニ成サレケル程ニ昨今マテ我ヨリ上タルモノノ侍トモ郎等ノコトクニソ使ケル（中略）彼類乘タル者ハ奉行探題トナツテ所知ヲ重テ領納シケル間壹ハ銀ノ鞍ヲ不口鞭駟馬鵜鷹ノ逍遙ニ夕日ノ移ルヲ忘云々

○北陸道藩鎮

增補筒井家記云天正三年八月五日柴田勝家信長公ノ命ヲ奉テ北陸道ノ藩鎮トナリ越前國ヲ領セリ順慶素トヨリ好ミ在使ヲ遣シテ是ヲ賀セリ

○高家

源平盛衰記云（源平侍合戰條）信乃國住人村上ノ二郎判官代基國ト名リテ一時戰テ出ツ此等ヲ始メトシテ高家ニハ秩父足利三浦鎌倉武田吉田黨ニハ小澤横山兒玉猪俣野與山口ノ者共我モ我モト白旗サヽセテ十騎二十騎百騎二百騎入レ替ヘ〳〵劣ラシ負シト戰ヒケレ

太平記云（龍馬進奏條）諸國ノ御家人ノ稱號ハ頼朝卿ノ時ヨリ有テ已ニ年久シキ武名ナルヲ此御代ニ始テ其號ヲ被レ止ヌレハ大名高家イツシカ凡民ノ類ニ同シ其憤幾千萬トカ知ラン云々

又云（五太院右衛門宗繁讒相模太郎條）義貞已ニ鎌倉ヲ定メテ其威遠近ニ振ヒシカハ東八ケ國ノ大名高家手ヲ束ネ膝ヲ不レ屈ト云者ナシ

又云（相模入道弄田樂條）相模入道懸レ妖怪ニモ不レ驚增々奇物ヲ愛スルコト止時ナシ或時庭前ニ犬共集テ嚙合ヒケルヲ見テ

此禪門面白キ事ニ思テ之ヲ愛スル事骨髓ニ入レリ則諸國ヘ相觸レテ或ハ正税官物ヲ募リテ犬ヲ尋ネ或ハ權門高家ニ仰テ是ヲ求メケル間諸國々ノ守護國司所々ノ一族大名十四二十四伺立鎌倉ヘ引進ス之ヲ飼ニ魚鳥ヲ以テシ是ヲ繼クニ金銀ヲ鏤ム其弊甚多シ輿ニノセテ路次ヲ過クル日ハ道ヲ急ク行人モ馬ヨリ下テ之ニ跪キ農ヲ勤ル里民モ夫ニ被レ執テ是ヲ舁如レ此賞翫不レ輕ケレハ肉ニ飽キ錦ヲ著タル奇犬鎌倉中ニ充滿シテ四五千匹ニ及ヘリ

相州兵亂記云顯定ノ兵戰疲レテ引退ク斯レマテハ扇谷殿毎度勝ニ乘トイヘトモ人馬皆疲レヌ若黨其數ヲ不レ知討レニケリサレハ山内方ハ何レモ大名高家ニテ軍勢卓散ナレハ縱令軍ニ負ル事度々ナリトモ分國廣ケレハ重テ大勢ヲ催シ退治センニイトヤスカルヘシトソ云ヒケル

了俊大草紙云武家には高家と號して手つから上膳たてする人は有なり其御代に寄て賞翫せらるゝなり凡殿上人諸大夫侍の位は定たるなり武家天下さとり給ひて後御一族は四位殿上人の位ひと同かるへしと云々官位は今も不同なり先代の世には城入道は同侍の位にしてありしかとも大忠によつて御一族よりは下諸侍よりは上と定められき

當御代には土岐伯耆入道は侍よりは上一族よりは下と定られしにや佐々木佐渡判官入道も如レ斯蒙レ仰しなり是は皆其人の一代に取てのこと云々

奥羽永慶軍記云和賀薩摩守滅亡嫡子又二郎二男又四郎條文祿元年太閤秀吉公三韓ヲ攻タマハント諸國ノ軍勢ヲ召レ給フコレニヨツテ奥羽ノ大小名黨モ高家モ殘ナク召ニ應シテ馳上ル

新田由良家傳記云由良の御いへに正月廿日に分取と申すこと御座候(中略)御座敷の次第は成繁公左の上座其次に國繁公右の向も矢内大澤兩林左之座二間程引下つて御一家并高家衆次第々々に御座候云々

籾井日記云丹波家七頭組條此頃ノ屋形口口代々屋形樣ト仰キ奉リ當國旗頭衆高ケ衆モ相傳ノ御主ト代々首ヲ傾ケ國人トモハ一天下ノ内ニ戴クモノハ外ニハナキモノヨト存コミ申候

甲陽軍鑑云山本勘介駿河ヨリ甲府ヘ始メテ召シヨセラレタル時信玄公勘介ニ駿河今川家ノ背語ヲ尋ネナサル山本勘介申ス義元公ノ御家ムカシヨリ高家ニテマシマス子細ハ云々

○味方御方

奥州後三年記云康平のころほひ源頼義貞任宗任をうちしとき武則一萬餘人の勢を具して御方にくはゝれるにより

て貞任宗任をうちたひらけゝる云々

吾妻鏡云治承四年八月九日己丑有ニ近江國住人佐々木源三秀義者一平治逆亂時候ニ左典厩御方一於ニ戰場一竭ニ兵略一而武衛座レ事之後不レ奉レ忘ニ舊好一兮不レ諛ニ平家權勢一之故得ニ替相傳地佐々木庄一之間云々

又云治承四年十一月四日壬子佐竹冠者於ニ金砂一築ニ城壁一固ニ要害一兼以備ニ防戰之儀一敢不レ搖レ心動ニ干戈一發ニ矢石一彼城廓者構ニ高山頂一也御方軍勢者進ニ於麓溪谷一故兩方在所已如ニ天地一云々

又云養和元年九月十八日辛卯桐生六郎以ニ梶原平三一申云依ニ此賞一可レ列ニ御家人一云々(中略)下ニ和田次郎義茂一所不レ可レ罰下雖レ爲ニ後綱之子息郎黨一參ニ向御方一輩上事右云ニ子息兄弟一云ニ郎從眷屬一始ニ桐生之者一於下落ニ參御方一者上不レ可レ及ニ殺害一又件黨類等妻子眷屬并私宅等不レ可レ取ニ損亡一之旨所レ被レ仰ニ下知一如レ件治承五年九月十八日

又云文治五年八月廿一日戊申追ニ泰衡一令レ向ニ岩井郡平泉一給(中略)爰二品經ニ松山道一到ニ津久毛橋一梶原平二景高詠ニ一首和歌一之由申云陸奥ノ勢ハ御方ニ津久毛橋渡シテ懸ン泰衡カ頸祝言之由有ニ御感一云々

又云建久元年二月六日庚寅奥州飛脚參著云々則相ニ副雜色里長於ニ件使者一被ニ下遣一(中略)國中之輩一旦怖ニ兼任之猛威一雖レ令レ與ニ彼逆心一眞實之志者定在ニ御方一歟至下奉ニ歸降一之族上可レ緩レ刑云々

又云建保元年四月十六日丁亥朝盛和田新兵衛尉出家事郎從等走ニ歸本所一告ニ父祖等一此時乍レ驚自ニ閨中一求ニ出一通書狀一披覽之處書載云叛逆之企於レ今者定難レ被ニ默止一歟雖レ然順ニ一族一不レ可レ奉レ射ニ君主一又候ニ御方一不レ可レ敵ニ于父祖一不レ如下入ニ無爲一免中自他苦患上云々

又云建保元年五月三日癸卯曾我中村二宮河村之輩如レ雲騷如レ蜂起各陣ニ于武藏大路及稻村崎邊一(中略)欲レ被レ遣ニ御敎書一之比數百騎之中波多野彌次郎朝定乍レ被レ疵應ニ此召一參ニ石橋一之砌書レ之彼御敎書被レ載ニ將軍御列一者以ニ安藝國住人山太宗高一爲ニ御使一被レ遣レ之軍兵令レ拜ニ見之一悉以參ニ御方一云々

又云建保元年五月五日乙巳去三日由利中八郎維久奉レ射ニ匠作一事造意之企也云々而維久陳申云候ニ御方一防ニ凶徒一事武州令ニ見知一給云々

梅松論云出雲伯耆之兩國の輩一人も殘らす君の御方に參りけれは清高力盡はて出雲國に歸て船に乘り若狹越前心さして海上に浮ひけり

又云さるほとに東寺の南大門に大友か手勢二百餘騎にて打出たり親光か一族益戸下野守家人一兩輩召具して殘る勢をも九條邊にとゝめ置て大友に付て降參のよしを僞て云けれは大友子細に不レ及とて樋口東洞院の小河を隔て打連て行けるに大友申けるは將軍の御陣近く成候はゝ法にて候御具足を預り申さんと云けれは親光我等御方に參らは頓て一方をも仰蒙て忠節を致すへきに戰場にをいて具足を進むること面目なしといへとも御邊を賴奉つるうへは恥辱になさぬようにはからひたまへとておひたる太刀をさしあけて河を西へかけ渡す云々

又云去程に將軍は君に刺れ奉り給ふよし關東へきこへけれは皆色をうしなふ事斜ならさる處に五月中旬に上野國より新田左衞門佐義貞君の味方として當國世良田に討出て陣をはる

太平記云隅田高橋井宇都宮條去程ニ河内國ノ住人和田孫三郎此由ヲ聞テ楠カ前ニ來テ云ケルハ先日ノ合戰ニ負腹ヲ立テ京ヨリ宇都宮ニ向候ナルカ今夜既ニ柱松ニ着テ候カ其勢僅カニ六七百騎ニハ過シト聞ヘ候先ニ隅田高橋カ五千餘騎ニテ向テ候シヲタニ我等僅カノ小勢ニテ追散シテ候シソカシ其上今度ハ御方勝ニ集テ大勢也敵ハ機ヲ失テ小勢也宇都宮假令武勇ノ達人ナリトモ何程ノ事カ候ヘキ今夜逆寄ニシテ打散シテ捨候ハヤト云ケルヲ楠暫思案シテ云ヒケルハ合戰ノ勝負必シモ大勢小勢ニ不レ依只士卒ノ志ヲ一ニスルトセサルトナリ云々

難太平記云建武二年に駿河國手越河原の戰に御方打負しに錦小路殿御討死あるへきよしを細川卿房勸申間淵邊と云御年來の仁申て云先御前に討死仕へしと唯一騎大勢の中に馳入りてうたれき御方つゝくに及す今川名兒耶三郎入道此時討死なり

富樫記云次郎家經ニ賴朝卿ヨリ加賀國ヲ賜ハリ其子家直承久ノ亂ニ大忠アリ其子泰村其子昌家兩代トモニ建武ノ亂ヨリ四拾餘年武家隨一ノ味方ニシテ終ニ一度モ宮方ニ歸服セス云々

康富記云寶德元年八月十二日庚申放生會延引御敎書到來云々神人閑籠未ニ落居一也出雲國八幡領國人澤邊遠亂事許ニ申之一乃被レ成ニ治罰綸旨一又仰ニ守護佐々木大膳大夫一被レ責レ譯之處去月有ニ合戰一御方得レ利攻ニ落城二三云々」

赤松記云長祿二年八月晦日神璽を內裏へ備申候かやうに重々忠節無ニ比類一候へとも御安堵は延引して先御恩賞として加賀國富樫次郎成基跡并備前國新田庄出雲國宇賀庄伊勢國高宮保給り候間各々彼國へ御こし入度々の合戰にて或は討死の人もあり樣々の儀にて終に御手に入候つる其後天下應仁にみたれて諸大名おもひ〳〵に成行山名殿も上意を背きたまへは赤松殿味方に參らせたまへは何の樣もなく三ケ國安堵被レ成御手に入候

江北記云明應八年七月十八日瑞山寺殿自ニ海津一御出張候上坂治部被ニ味方一候條被レ對ニ御本意一候也

江濃記云京極家には佐渡守入道々譽は其頃關東に在て尊氏卿御上洛の時同責上り其後尊氏の味方にて一度も終に不忠の事なく子孫皆足利殿の味方にて打死しけり

勢州四家記云信長公それより北伊勢の諸侍衆を案內者として工藤家をせめんとて阿濃津まて打入り給ふ(中略)此人々いへりしは長野家の名跡をするらるれは長野次郎を追出し皆味方にまいるへきとなり

伊達日記云大內其夜は小濱へ歸被レ申候味方も五日程引上御野陣被レ成候云々

又云下部山內記我等備ノ向ニ少高山之候へ乘上見候へハ白石若狹濱田伊豆高野壹岐三人ノ指物見エ候テ馬上六七十騎足輕百五十許ニテ本宮ノ方ヨリ高倉ノ方へ參リ候其跡へ大人數參候敵トハ不レ存候へトモ敵ト味方トノサカイノ樣ニ見エ云々

別所長治記云信長西國手遣ノ企アルニ依テ先ツ別所ヲ近付魁ヲ賴ミ度由ヲ申送リ播州一國ノ事ハ不レ及レ云其外賞ハ可レ依レ功云々長治辭スルニ不レ能一味同心シテ不レ移ニ時日一近邊ノ城主人質ヲ取リ信長へ以ニ使者一國人トモ味方ニ參リタリ此上ハ大將一人可レ給長治西國へノ魁可レ仕ト被ニ申遣一信長侍大將ノ內西國退治ノ大將ハ心カサ有テ勇ニモ謀ニモ達シタルモノハ可レ爲ニ羽柴筑前守一則被ニ仰付一云々

播州征伐記云攝津國守護荒木攝津守村重奉レ對ニ將軍一謀レ叛而欲レ覆ニ天下一先從ニ京都一止ニ播州之通路一秀吉聞レ之不レ移ニ時日一至ニ攝州一御繕雖レ及ニ再三一村重成レ疑不レ聞レ之然則馳ニ上京都一請ニ上意一引ニ下御人數高槻茨木一以ニ調略一成ニ御味方一攻ニ詰有岡一城一云々

見聞雜錄云三好方岩成主稅介は青龍寺城に軍之元帥として居たりしか此由を聞き多勢後詰に來るは味方の敗軍疑なしと急き三好山城入道笑岩と談合し云々

甲陽軍鑑末書云敵城內へ計策ハ好食ヲ以時ノ和談引出歸伏味方ヲ入ル事大アッカイノ事各口傳云々

又云山本勘介申上ル(中略)越後剛ノ武士我味方ノ手負死

タルヲ蹈越鞭ヲカタムケ懸ル敵ニハ高坂彈正ヲ向ケ給フ云々

天正記云武田一族滅亡條甲州遠州駿州三ケ國本意の旨にそくし上聞に達するによつて將軍御くわん座あり三ケ國御いちみのささみ關東かまくらの諸大名のこりなく御みかたにはせまゐること吹風に草のなひくかことし

簸輪軍記云甲軍是に駭て少し引と見えけるか此時城中より强卒共門を開き鎗を構一度に噇と突出す形勢は寔に秋風のちりを飛すかことくなり甲軍早引退味方の城門を閉して英氣を助け暫く息をつく次第恰如ノ神甲軍是か爲に手負打死五百餘人に及へり只一時半斗なりしに味方には人數一人も打死なし

柴田退治記云秀吉見ニ合近習之若侍ニ二三百騎楚立柴田幕下一文字切懸向兵一千餘騎切合衝合秀吉馬左右而生捕分捕碎ノ手族終日之師相疲切ノ息不ノ論ニ敵味方死人ニ吸ノ血續ノ息者多ノ之云々

○黨

保元物語云常陸國住人中宮二郎同國ノ住人關次郎村山黨ニハ山口六郎仙波七郎轡ヲ双ヘテ掛入レハ三町礫紀平次大夫大矢新三郎以下防キケルカ新三郎ハ仙波七郎ニ弓手ノ肩ヲ切ラレ紀平次大夫ハ山口六郎ニ右ノ腕打落サレテ引返ス

源平盛衰記云東國兵馬沙汰條能キ馬共ヲ支度シテ宇治勢多ヲ渡シテ高名アルヘシトソ被ノ議ケルカアリケレハ大名小名黨モ高家モ面々ニ其用意アリ

吾妻鏡云嘉禎三年八月十三日辛卯六波羅飛脚參申云去五日四天王寺執行一族上座覺順引ニ卒二百餘人ニ欲ノ保ニ天王寺ニ之間渡部黨相戰之間覺順已下九十三人被ニ討取ニ訖云

太平記云笠置軍條相模入道大ニ驚テサラハヤカテ討手ヲ差上セヨトテ一門他家宗徒ノ人々六十三人マテソ被ノ催ケル(中略)入江蒲原ノ一族横山猪俣ノ兩黨此外武藏相模伊豆駿河上野五箇國ノ軍勢都合二十萬七千六百餘騎九月二十日鎌倉ヲ立

又云卷ノ頼義奥州ニ下向シ九箇年カ間戰フニ終ニ軍ニ討勝貞任ヲハ頸ヲ取リ宗任ヲハ虜テ上洛ス(中略)宗任ハ筑柴ニ流サレタリケルカ子孫繁昌シテ有テ今マ松浦黨トハ是也

又云畠山道誓上洛條延文四年十月八日畠山入道々誓武藏ノ入間河ヲ立テ上洛スルニ相順フ人々ニハ(中略)其等ヲ宗徒ノ大名トシテ坂東ノ八平氏武藏ノ七黨紀清兩黨伊豆駿河三河遠江ノ勢馳加ハツテ都合二十萬七千餘騎ト聞エシカハ云云

國大曆云觀應二年二月十日去四日夜討之後卽武州黨類卽押ニ寄石塔軍陣瀧野城ニ散々合戰之處顯氏勢等又自ノ後押寄合戰勇士濟之云々

又云文和元年十月二日今日聞攝州邊物忿吉良石塔等黨類已攻ニ入吹田邊ニ之由風聞天下又騷動歟生民曾不ノ可ノ有ニ蘇息之便ニ歟爲ノ之如何

又云文和四年五月十六日彼是云南方軍旅大略沒落歟越前守謹修理大夫高經歸ニ本國ニ(中略)所詮彼黨類無ノ緣ニ御心ニ之條勿論歟

關岡家始末云伊賀國ハ服部黨大名ニテ北郡ニ威ヲ振ヒ國中遍ク從ヒ信樂ノ多羅尾等モ相從ヒケル云々

○餘黨

吾妻鏡云建久元年四月九日壬辰古莊左近將監能直宮六條仗國平等于ノ今在ニ奥州ニ降人已下事尋沙汰訖(中略)討ニ取雜色澤安ニ之者幷同意餘黨事又帶ニ兵具ニ之士人等事能爲ノ令ノ糺ニ斷之ニ猶可ニ在國ニ云々

又云建久二年十一月十四日己未梶原平三景時於ニ由井邊ニ搦ニ取男一人ニ是叛逆餘黨之由自稱云々

又云建仁元年十一月廿九日乙巳今日景時餘黨勝木七郎則宗被ノ除ニ囚人號ニ被ノ返ニ下鎮西ニ

又云建仁三年九月三日戊辰被ノ搜ニ求能員餘黨等ニ或流刑或死罪多以被ニ糺斷ニ妻妾幷二歲男子等者依ノ有ノ好召ニ預和田左衛門尉義盛ニ配ニ安房國ニ云々

又云元久二年七月八日癸亥以ニ畠山次郎重忠餘黨等所領ニ賜ニ勳功之輩ニ尼御臺所御計也將軍家御幼稚之間如ノ此云云

又云建保元年五月三日癸卯相州大官令承ノ仰被ノ發ニ飛脚ニ遣ニ御書於京都ニ兩人連署之上所ノ被ノ載ニ將軍家御判ニ也是義盛和田雖ノ令ノ伏ノ誅餘黨之分紛散未ノ知ニ其存亡ニ云々

太平記云中前代峰起條今天下一統ニ歸シテ寰中雖ニ無事ニ朝敵ノ餘黨東國ニ在ヌヘケレハ鎌倉ニ探題ヲ一人オカテハ惡カリヌヘシトテ當今第八ノ宮ヲ征夷將軍ニナシ奉テ鎌倉ニソ置進セラレケル云々

別所長治記云都ヨリハ信長卿御嫡子織田城之介信忠三萬餘騎ニテ出ニ播州表ニ在々所々ニ陣ヲ取リ毛利家ノ軍勢近付ハ欲ノ遂ニ一戰ニ又毛利家ノ兩大將評議送ニ數月ニ然處ニ別所餘黨神吉ニ楯籠ルヲ蹴チラシテ中國ノ敵ニ氣ヲ失セ

ント思ヒ軍兵ヲ打寄セ四方八面ニ尺寸ノ地モ不レ殘打圍ミ螺鐘ヲ鳴ラシ攻鼓ヲ打無二透間一鯨波ヲ揚ケ堀際マテ攻寄セ々々既ニ飛入ラントスル處城中ヨリ究竟ノ射手ヲ汰ヘ鐵炮ヲ入遠ヒ打立射立ケル

○與黨人

吾妻鏡云文治二年六月廿九日乙亥伊勢國林崎御厨事爲二平家與黨人家資跡一雖レ加二役官領注文一就二太神宮一訴二申之一不レ可レ有二地頭一之旨被レ下二院宣一之間今日有二沙汰一所レ被レ停二止宇佐美平次實正知行一也

○坂東八平氏

太平記云師冬自害條 父民部大輔是ヲ爲二誅伐一下向ノ由ヲ稱シテ上野ニ下着シテ則左衛門藏人ト同心シテ武藏國ヘ打越坂東ノ八平氏武藏ノ七黨ヲ付順フ播州師冬是レヲ被レ聞候テ八箇國ノ勢ヲ被レ催ニ更ニ一騎モ不二馳寄一云々

又云追奥崎跡道々合戰條 江戸葛西三浦鎌倉坂東ノ八平氏武藏ノ七黨三萬餘騎ニテ馳來ル又清ノ黨旗頭芳賀兵衛入道禪可モ元來將軍方ニ志有リケレハ紀清兩黨カ國司ニ屬シテ上洛シツル時ハ虛病シテ國ニトヽマリタリケルカ清ノ黨千餘騎ヲ率シテ馳加ハル

又云三浦大多和合戰異見條 慧性時ノ聲ニ驚イテ馬ヨ物見ヨト周章騷クトコロヘ義貞義助ノ兵縱橫無盡ニ懸立ル三浦平六是ニ力ヲ得テ江戸豐島葛西河越坂東ノ八平氏武藏ノ七黨ヲ七手ニナシ蜘手輪違十文字ニアマサストソ攻メタリケル

又云島山道誓上洛條 延文四年十月八日畠山入道々誓武藏ノ入間河ヲ立テ上洛スルニ相順フ人々ニハ(中略)是等ヲ宗徒ノ大名トシテ坂東ノ八平氏武藏ノ七黨紀清兩黨伊豆駿河三河遠江ノ勢馳加テ都合二十萬七千餘騎ト聞エシカハ云々

又云節度使下向條 サレハ此時御一家ノ中ニ思召シ立御事アリト聞タランニ誰レカ馳參ラテ候ヘキ是コソ當家ノ御運ノ可レ開初メニテ候ヘ將軍モ一往ノ理ヲ推處ヲ以加樣ニ仰候トモ實ニ御身ノ上ニ禍來ラハヨモサテハ御座候ハシ兎ヤセマシ角ヤ可レ有ト長僉議シテ敵ニ難所ヲ越サレナハ後悔ストモ益アルマシ將軍ヲハ鎌倉ニ殘シ留メ奉テ左馬頭殿御伺候ヘ我等面々ニ御供仕テ伊豆駿河邊ニ相支ヘ合戰仕テ運ノ程ヲ見候ハント被レ申ケレハ左馬頭直義朝臣不レ斜喜ンテヤカテ鎌倉ヲ打立テ夜ヲ日ニ繼テ被レ急ケリ相隨フ人々ハ吉良左兵衛尉同三河守子息三河三郎石堂入道其子中務大輔同右馬頭桃井修理亮下廿人略之 外樣ノ大名ニハ小山判官佐々木佐渡判官入道々譽舍弟五郎左衛門尉下十四人略之 坂東八平氏武藏七黨ヲ始トシテ其勢二十萬七千餘騎十一月廿日鎌倉ヲ打立テ同廿四日三河矢矧ノ東宿ニ着キニケリ

○關東八家

豆相記云小山佐竹宇津宮那須長沼結城小田大掾等號二八家一而崇二於晴氏一矣於レ此氏綱欲レ從二八家一使下女歸二諸晴氏一而令レ居二于古河邑一故氏綱棄二晴氏一爲二勇甥之好一然晴氏泥二常野等州之甲士言一敵二北條一與二上杉一而攻二河越城一矣

○武藏七黨

坂東八平氏ノ條ニ併出ス

武家名目抄稿第四十六冊

塙檢校保己一編

稱呼部八下

○伴黨

吾妻鏡云養和元年閏二月廿七日癸酉武衛顧レ面曰少冠口狀者偏非二心之所一發也(中略)及レ晩朝政使又參上相二具先生伴黨頸一之由言上仍仰二三浦介義澄比企四郎能員等一被レ遣二彼首於腰越一被レ梟レ之云々

又云建保元年五月二日壬寅筑後左衛門尉朝重在二義盛之近隣一而義盛館軍兵競集見二其粧一聞二其音一備二戎服一發二使者一告二事之由於前大膳大夫一于レ時伴朝臣賓客在レ座酒方酣亭主聞レ之獨起レ座奔二參御所一(中略)申刻和田左衛門尉義盛率二伴黨一忽襲二將軍幕下一云々

○與黨

吾妻鏡云建久四年三月十六日癸未平家與黨越中二郎兵衛尉盛繼已下隱二居近國一之由有二風聞一早可レ討之由被レ仰二兵衛尉泰清一云々

又云正治二年二月廿日丙子親長自二京都一歸參具二下四人

播磨國惣追補使芝原太郎長保ニ是景時與黨也

梅松論云關東の兩使上洛して今度君に與力し奉る卿相雲客以下與黨の罪を糺明して所犯の輕重にまかせて罪名を定て翌年元弘二年後醍醐院を以先帝と申奉り承久の後鳥羽院舊規にまかせて隱岐國へ遷幸なし奉るべきよし治定す云々

園太曆云文和元年三月四日基近卿升文覺譽法印狀送之書寫讀レ之先日乍ニ物忿ニ參拜恐悅候（中略）新田一族以下諸將十五日立ニ上州ニ對ニ治國中與黨殘黨ニ打ニ越武州ニ及ニ關東發向ニ之間尊氏以下不レ堪ニ防禁ニ迯落候云々

○殘黨

吾妻鏡云文治二年六月廿八日甲戌左馬頭能保飛脚參著去十六日平六傔仗時定於ニ大和國宇多郡ニ與ニ伊豆右衞門尉源有綱淺經聖合戰然而有綱敗北入ニ深山ニ自殺郎從三人傷死了搦ニ取殘黨五人ニ相ニ具右金吾首ニ同廿日傳ニ京師ニ云々

又云建仁三年九月十九日甲申故比企判官能員殘黨中野五郎義成已下事猶以有ニ其沙汰ニ被レ收ニ公所領等ニ云々

園太曆云文和元年三月四日基近卿升文覺譽法印狀送之書寫讀レ之先日乍ニ物忿ニ參拜恐悅候（中略）新田一族以下諸將十五日立ニ上州ニ對ニ治國中與黨殘黨ニ打ニ越武州ニ及ニ關東發向ニ之間尊氏以下不レ堪ニ防禁ニ迯落候云々

又云文和元年十月五日世上種々說縱橫也勢州元氏下向落居土岐已引ニ歸本國ニ之處元氏退治殘黨多勢也仍元氏已入ニ打手ニ云々

武陰叢話云光秀其儘一萬の人數にて龜山を亥刻に立翌二日に本能寺にて信長公を安々と討奉る本能寺には左馬助殘て殘黨を改め信長公御印を尋る

○伴類

吾妻鏡云建久五年八月廿日戊申遠江守伴類五人名越邊被レ刎レ首所謂前瀧口榎下重兼前右馬允宮道遠式麻生平太胤國柴藤三口口武藤五郎等也

又云正治二年正月廿一日戊申巳尅於ニ山中ニ搜ニ出景時幷子息二人之首ニ凡伴類三十三人懸ニ頸於路頭ニ云々

又云建仁元年三月四日甲寅京都飛脚參著去月廿二日城四郎長茂幷伴類新津四郎以下於ニ吉野奥ニ被レ誅畢長茂先立遂ニ出家ニ同廿五日長茂幷伴黨四人首被レ渡ニ大路ニ云々

又云建仁元年四月三日壬午遠州廣元朝臣善信等參會就ニ越州飛脚資盛謀叛事ニ仰ニ在國士ニ可レ被ニ追討ニ否可レ被レ遣ニ當參之輩ニ否仰レ各被レ擬ニ評定ニ而長用雖レ被レ誅レ之其伴類未レ散之時也尤可レ被レ廻ニ用意ニ之處何雖ニ一人ニ可レ失ニ當參士ニ哉早可レ被レ仰ニ在國之士ニ

○餘類

吾妻鏡云建保二年十一月廿五日乙酉六波羅飛脚到著申云和田左衞門尉義盛大學助義清等餘類住ニ洛陽ニ以ニ故金吾將軍家御息號ニ禪師ニ爲ニ大將軍ニ巧ニ叛逆ニ之由依レ有ニ其聞ニ去十三日前大膳大夫之在京家人等襲ニ件旅亭ニ一條北邊之處禪師忽自殺伴黨又逃亡云々

太平記云中前代蜂起條斯レ處ニ西園寺大納言公宗卿隱謀露顯シテ被レ誅給シ時京都ニテ旗ヲ擧ント企ツル平家ノ餘類共皆東國北國ニ逃下猶其素懷ヲ達セン事ヲ謀ル名越太郎時兼ニハ野尾井口長澤倉滿ノ者共馳著ケル間越中能登加賀ノ勢共多ク與力シテ無レ程六千餘騎ニ成ニケル

又云安鎌國家法條元弘三年春ノ頃筑紫ニハ規矩掃部助高政絲田左近大夫將監貞義ト云平氏ノ一族出來テ前亡ノ餘類ヲ集メ所々ノ逆黨ヲ招國ヲ亂ラントス

○從類

吾妻鏡云元久元年五月八日庚午伊勢國員辨郡司進士行綱依レ有ニ夜討之疑ニ雖レ爲ニ四人ニ彼夜討者爲ニ伊勢平氏若榮五郎等所行ニ之由從類白狀出來之間無ニ行綱過ニ之旨有ニ其沙汰ニ云々

又言元久二年四月十一日戊戌鎌倉中不レ靜近國之輩群參被レ整ニ兵具ニ之由有ニ其聞ニ又稻毛三郎重成入道日來有レ蟄ニ居武藏國ニ近曾依ニ遠州招請ニ引ニ從類ニ參上怪レ之人旁有云々

又云建保元年五月二日癸卯横山馬允時兼引ニ率波多野三郎時兼蟹横山五郎時兼綱以下數十人之親昵從類等ニ馳ニ來腰越浦ニ之處既合戰最中也仍其黨類皆棄ニ蓑笠於彼所ニ積而成レ山云々

太平記云新田注進條其日ノ午刻ニ羽書ヲ頸ニ懸タル早馬三騎門前マテ乘打ニシテ庭上ニ羽書ヲ捧タリ諸卿驚テ急披テ是ヲ見玉ヘハ新田小太郎義貞ノ許ヨリ相模入道以下ノ一族從類等不日ニ追討シテ東國已ニ靜謐ノ由ヲ注進セリ

又云越前牛原地頭自害條淡河右京亮時治ハ京都ノ合戰ノ最中北國ノ蜂起ヲ鎭メン爲ニ越前ノ國ニ下テ大野郡牛原ト云所ニソオハシケル幾程無シテ六波羅沒落ノ由聞エシカハ相順タル國ノ勢共片時ノ程ニ落失テ妻子從類ノ外ハ事問人モ無リケリ

○一揆

吾妻鏡云治承四年九月卅日己卯新田大炊助源義重入道法名上西臨ニ東國ニ未ニ一揆ニ之時以ニ故陸奥守嫡孫ニ挿ニ自立志ニ之

間武衛雖レ遣二御書一不レ能二返報一引二籠上野國寺尾城一聚二軍兵一云々

太平記云（四條縄手合戦條）白旗一揆ノ衆ニハ縣下野守ヲ旗頭トシテ其勢五千餘騎飯盛山ニ打上テ南ノ尾崎ニ扣ヘタリ大旗一揆ノ衆ニハ河津高橋二人ヲ旗頭トシ其勢三千餘騎秋篠ヤ外山ノ峯ニ打上テ東ノ尾崎ニ扣ヘタリ去程ニ正月五日ノ早旦ニ先四條中納言隆資卿大將トシテ紀伊ノ野伏二萬餘人引具シテ色々ノ旗ヲ手ニ差上飯盛山ニソ向ヒ合フ是ハ大旗小旗兩一揆ヲ麓ヘオロサテ楠ヲ四條縄手ヘ寄サセン爲ノ謀也

又云（將平上洛條）中ノ手大宮ニテ旗ヲ下シテ直ニ四條川原ヘ懸出タレハ桃井東山ヲ後ニアテ賀茂川ヲ前ニ境テ赤旗一揆扇一揆鈴付一揆二千餘騎ヲ三所ニ扣テ敵懸ラハトモニ懸リ合テ廣ミニテ勝負ヲ決セント靜リ返テ待懸タリ

又云（武藏野合戦條）一方ノ大將ニハ新田武藏守義宗五萬餘騎白旗中黑頭黑打輪ノ旗ハ兒玉黨坂東八平氏赤印一揆ヲ五手ニ引分テ五所ニ陣ヲソ取タリケル一方ニハ新田左兵衛佐義興ヲ大將ニテ其勢都合二萬餘騎カタハミ鷹ノ羽一文字十五夜月弓一揆是モ五手ニ一揆シテ四方六里ニ扣ヘタリ一方ニハ脇屋左衛門佐義治ヲ大將ニテ二萬餘騎大旗小旗下濃ノ旗鍬形一揆母衣一揆是モ五箇所ニ陣ヲ張リ射手ヲハ左右ニ進セテ懸手後ニ扣ヘタリ敵小手差原ニアリト聞エケレハ將軍十萬餘騎ヲ五手ニ分テ中道ヨリソ寄ラレケル先陣ハ平一揆三萬餘騎小手ノ袋四幅袴笠符ニ至マテ一色ニ皆赤カリケレハ殊更耀テソ見エタリケル二陣ニハ白旗一揆二萬餘騎白葦毛白瓦毛白佐目鴇毛ナル馬ニ乘テ練貫ノ笠符ニ白旗ヲ差タリケルカ敵ニモ白旌有ト聞テ俄ニ短クソ切タリケル三陣ニハ花一揆命鶴丸ヲ大將トシテ六千餘騎萠黃火威紫絲卯ノ花ノ妻取タル鎧ニ薄紅ノ笠符ヲソヘ梅花一枝折テ甲ノ眞甲ニ差タレハ四方ノ嵐吹度ニ鎧ノ袖ヤ匂フラン四陣ハ御所一揆トテ三萬餘騎二引兩ノ旌ノ下ニ將軍ヲ守護シ奉テ御內ノ長者國大名閑ニ馬ヲ扣ヘタリ

又云（和田楯與箕浦次郎左衛門軍條）守護代箕浦次郎左衛門伊丹大和守河原林彈正左衛門芥河右馬允中白一揆三百餘騎ハ神崎ノ橋爪ヘ打臨ム

又云（尾張小河東池田條）仁木京兆ノ憑タル桐一揆ヲ始トシテ宗徒ノ勇士五百餘騎ニ伊賀ノ服部河合ノ一揆馳加テ廻天ノ勢ヲ振フ（中略）目賀田樽崎儀俄平井赤一揆ヲ旗頭ニテ河端ニ傍テ扣ヘタリ青地馬淵伊庭入道黃一揆ヲ大將トシテ左手ノ原ニ陣ヲ取ル（中略）三手ノ小勢ヲ見ルニ中ナル四目結ノ大旗ハ大將佐々木ト見ルソ打取テ勳功ニ預レヤト呼テ長野カ蠅拂一揆一陣ニ進テ懸出タリ

又云（二度紀伊國軍條）畠山式部大輔今河伊豫守細川左近將監土岐宮內少輔小原備中守佐々木山內判官芳賀伊賀守土岐桔梗一揆佐々木黃旗一揆都合其勢七千餘騎重テ紀伊路ヘソ向ケラレケル

又云（師直以下被誅條）處々ニ扣ヘテ侍ケル者共スハヤ執事ヨト見テケレハ將軍ト執事トノアハヒヲ次第ニ隔ント應角一揆七十餘騎會尺色代モナク馬ヲ中ヘ打コミ打コミシケル

又云（芳賀兵衛入道軍條）無二思慮一禪可カ合戰故ニ鎌倉殿ノ威勢彌重ク成リシカハ大名一揆ノ嗷儀共是ヨリ些止ミニケリ

又云（神南合戰條）山名カ前懸ノ兵四人目ノ前ニ討レテ三十人深手ヲ負ヒケレハ跡ニツヽケル三百餘人進兼テソ見エタリケル是ヲ見テ平井新左衛門景範楠橋三郎左衛門尉櫻田左衛門俊秀大野彈正忠氏永聲々ニツヽクソ引クナト御方ノ兵ニ力ヲ附テ喚テソ懸リタリケル（平井以下毛利家天正本不レ出而云赤松下濃一揆佐々木黃一揆彼此三百餘人引クナト味方ニ力ヲ附ケテ喚テ懸ル）

又云（天文本三角入道謀叛條）或時寄手三文字一揆ノ中ニ日來ヨリ手柄ヲ表シタル兵共三四人寄合テ評定シケルハ城ノ體ヲ看ルニ今ノ如ニ責ハ御方ハ兵粮ニ攻リテ怵ヘストモ敵ノ軍ニ負テ落ル事ハ不レ可レ有

又云（毛利家天正本神南合戰條）新屋判官入道ハ油幕ノ內ニシテ若黨トモヲ成敗シテ御方許多討レタリ入替ヨト下知シテケレハ黃一揆ノ者トモ進出々々此ヲ先途ト返合ヒ々々々所々ニテ討レニケリ

又云（薩埵山合戰條）敵御方一萬二千餘騎東ニ開ケ西ニ靡ケテ追ツ返ツ半時許戰ヒタルニ長尾孫六カ下立タル一揆ノ者（天正本云下紺一揆）五百餘人縱橫ニ懸惱マサレテ一人モ殘ラス討レケレハ桃井モ長尾左衛門モ叶ハシトヤ思ヒケン十方ニ分レテ落行ケリ

大塔軍記云于レ爰村上中務少輔滿信云一家依二內緣の義一先以二使者一終二案內一（中略）一揆ノ人々ハ爲二故敵一故一切不レ用レ之可レ申二請別守護人一之旨內々令二評議一後愚昧記云永和五年後四月十四日武士等多上邊江馳上之由路人稱レ之（中略）酉刻許南方有二炎上一武藏守頼之朝臣宅以下放火皆以沒落了云々頼之朝臣勢三百餘騎云々大樹以二使者一可レ退二出京中一之由仰二遣之一云々佐々木大膳大夫高秀幷土岐伊豫入道等以下一揆衆所行也大樹同意之由或構レ之云々

鎌倉大雙紙云上州武州の白旗一揆は大將の下知を不レ得驚の城の外郭をせめ破り打て入らむといへとも城にこもる軍兵爰を專途と防戰ひける間白旗一揆に手負死者數多ありて悉打負大半歸國しける

又云康暦二年庚申五月五日下野住人小山左馬助義政吉野宮方と號し逆心しけれは宇都宮基綱大將にて爲二退治一發向ありて裳原といふ所にて及二合戰一同十六日宇都宮打負忽に討死しける間小山は關東の御下知を背きて剩陳謝の言迄もなし謀叛の衆なりとて鎌倉殿より御退治あるへし但京都の御加勢を賴み不レ申は後難如何あるへき由上杉道合申により梶原美作守道景御使として康暦三年辛酉上洛則白旗一揆御加勢合力申請て歸國云々

應永記云京極和泉ノ陣ヨリ一千餘騎ニテ近江ニ打越テ勢多ノ橋ヲ懸サセテ森山ニ打越ル處ニ五郎左衛門小勢ニテハ不レ叶トテ土岐宮内少輔ト一處ニ成ントテ美濃國ヘ越ル處垂井ノ士一揆起リテ押取籠メテ散々ニ打散シ主從二人命計リ助リテ行方不レ知落失ケリ

東亂記云（公方管領不和條）長尾尾張入道芳行永享十年八月十二日御前ヘ近ウ參リ只憲實ヲナタメサセ玉ヒテ世上無爲ニ可レ被レ成ト再三諫言ヲ以申シケレトモ無二御許容一其後上杉修理大夫持朝（于時彈正少弼）千葉介胤直等一味同心シテ色々管領和融之儀世上無爲ノ由ヲ訴訟申ケレトモ無二御領掌一放生會ヲ限トシテ十六日ニハ武州一揆ヲ始トシテ奉公外樣之軍勢山内ヘ可二押寄一由聞エケレハ云々

花營三代記云應安元年六月廿八日夜關東事去十一日於二武州一平一揆打二負合戰一引二籠川館一之由使者到來云々

東寺供僧評定引付云（寛正三年壬午）一境内土一揆張本人事糺明之處寺内之與三二郎手負間波屋壞出被レ燒了次乘久張本人之宿仕二出入一之間彼家同壞出燒了兩人共逐電之不便之至也十一月八日

應仁記云一色カ被官石川佐渡守入道道悟其子藏人親貞爲二守護一在國シタリ彼ハ先年伊勢志摩國人トモ京兆ヲ背キシ時モ彼入道安クシタカヘタリ尾張國海東郡波津カ崎ニ牢人一揆起タリシヲモ打隨ヘシ兵ナレハ世保ヲモヤカテ追出シケリ云々

大和記云勘兵衛申ハ各支配難レ成候ハ、某ヲ物主ニ被レ仕指圖次第ニ於レ被レ仕ハシツメ候ハント申候ヘハ此上ノ事ニ候間兎モ角モ指圖次第ニ可レ仕ト申候左候ハ、定テ寄手衆モ頓テ可レ被レ參之間籠城ニ究メ可レ然各諸士ノ妻子トモ人質ニ出シ尤ノ由ニテ皆々人質ヲ取堅メ本丸ニ入レ置人數二三百ッヽ用意致シ在々ヘ押寄一揆頭ノ者トモヲ召取リ又ハ首ヲ切郡山ノ五町目口ト申處ニ獄門ニカケ候是ニテ先國中大形シツマリ候

羽尾記云能州其氣ヲ察シ獨難レ立思ヒ眞田安房守方ヘハヤ打ヲモッテ某今度不慮ニコノ城地ヲ得タリ併其方ニユツリ奉ラン尤ハヤク御出馬アリテ一揆等ヲ御成敗可レ被レ成此表御發向奉レ待之由申遣ハス云々

關八州古戰錄云（野州烏山大河井合戰條）二陣大久保民部少輔相續テ浸々ト馬ヲ打入一同ニ押渡テ佐竹衆上庄勢二千餘ニテ扣ヘタル眞中ニ割テ入リ面モ振ラス切テ回ル那須重代ノ恩顧ノ士野伏一揆ニ至ルマテ命ヲ塵芥ニ比シテ活テハ引返サシト稼ケレハ云々

荒山合戰記云大衆是ヲ憤リ本領ヲ安堵セントテ斯一揆ヲ企テ大衆モ多被二討取一寺院悉ク燒亡シ伽藍一宇ノコラサリシ云々

伊達日記云關白樣御下向ノ由被二聞召一御迎ニ御上候砌大崎葛西一揆ノ侍共命ノ儀ハ御赦免被レ成候樣ニ可レ申候間在所ニ居事イカヽニ候澤谷ヘ罷出可レ然由被二仰付一云々

又云伊勢守彌市右衛門佐沼ヘ談合ノタメ出合申サレ候處ニ（中略）一揆ノモノ共佐沼ヲ取卷近陣仕候父子ノ者供仕ラレ候上方衆ハノコラス古川登米ニテ被二打申一候云々

蜂須賀家文書云鉢形仕付憲房申上州一揆悉長尾渡幕下顯定至リ白井被レ納候は武相士卒上州亂入成二亡國一候は越國之諸勢及千里運粮武相之間張レ陣候は、不レ可レ叶上口口口之内蜂起大切候此上にも二三ケ條令レ思二案子細一候具可二面出一候

豐鑑云木村伊勢守か知行所一揆起りて城を取廻しすてにうたむと去けるを飛彈守蒲生氏郷行むかひ伊勢守を具して會津にかへりぬ

甲陽軍鑑末書云侍一揆ニハ先無事ヲナシ引退テ禮ヲ盡スヘシ百姓一揆ニハ推ツメテ食ヲ斷後和ヲ入ヘシ

又云城伊庵ヨク見キリ候故旗本方大人衆ヲ以テ薩陲山ヘ取アカル馬場衆同勢ニシテ追崩スモトヨリ頭ナキ一揆ナレハ何ノ造作モナク逃散沖津河原迄追ヒカケ雜兵三十八人討捨也

又云御分國諸百姓一揆ヲ起サヽル爲ニ新衆ヲ用ヰラルヽナリ

松原自休手錄云國人催二一揆一之由告二岡崎一三月初陣ニ見付ノ府一定二軍法一同七日城兵出合國中ノ一揆ヲ牒シ合堀川ノ構ヲ破ラントス云々

天正記云紀州御發向條泉州きしの和田の城に中村孫平次を入置是を守り彼一きのとたうせつしよをたのみ泉州おもてにとりむかふ

○野伏

梅松論云かゝる處に守山邊より野伏とも山野に走ちりて敗軍を追詰ける程にうちとられ疵をかうむる者數をしらす

太平記云千劔破城軍條大將前ノ難義ヲモ不レ云丈タリソハヘ飛オリントスレハ谷深クソヒエテ肝ヲ冷シ如何セント身ヲ揉テ押アフ程ニ橋桁中ヨリ燃折テ谷底ヘトウト落ケレハ數千ノ兵同時ニ猛火ノ中ヘ落重テ一人モ不レ殘燒死ニケリ其有樣偏ニ八大地獄ノ罪人ノ刀ノ山劔樹ニツラヌカレ猛火鐵湯ニ身ヲ焦ス覽モ角ヤト被二思知一タリ去程ニ吉野戸津川宇多內郡ノ野伏モ大塔ノ宮ノ命ヲ含テ相集ル事七千餘人此ノ峯彼ノ谷ニ立隱テ千劔破ノ寄手共ノ往來ノ路ヲ差塞

又云千葉屋城寄手敗北條去程ニ昨日ノ夜六波羅已ニ被二責落一テ主上上皇皆關東ヘ落サセタマヒヌト翌日ノ午尅ニ千葉屋ヘ聞エタリケレハ城中ニハ悅ヒ勇テ只籠ノ中ノ鳥ノ出テ林ニ遊フ悅ヲナシ寄手ハ性ニ赴ク羊ノ被レ驅テ廟ニ近ツク思ヲナス何樣一日モ遲クヒカハ野伏彌勢重リテ山中ノ路可二難義一トテ十日ノ早旦ニ千葉屋ノ寄手十萬餘騎南都ノ方ヘト引テ行ク前ニハ兼テ野伏充滿タリ跡ヨリハ又敵急ニ追懸ル都テ大勢ヲ引立タル時ノ癖ナレハ弓矢取捨テ親子兄弟ヲハナレテ我先ニト逃フタメキケル

又云千劔破城軍條去程ニ吉野戸津河宇多內郡ノ野伏モ大塔宮ノ命ヲ含テ相集ル事七千餘人此峯彼谷ニ立隱テ千劔破ノ寄手共ノ往來ノ路ヲ差塞ク依レ之諸國ノ兵ノ兵粮忽ニ盡キテ人馬トモニ疲レケレハ轉漕ニ怠兼テ百騎二百騎引テ歸ル處ヲ案內者ノ野伏トモ所々ノツマリツマリニ待受テ討留ケル間日日夜々ニ討ル、者數ヲ知ラス

又云和田楠與箕浦次郎左衞門軍條七月二十四日相模守討レテ四國中國ハ大略細川右馬頭賴之ニ靡順スト聞エケレハ日來ノ支度相違シテ氣ヲ損シ色ヲ失テソ居タリケルサモアレ加樣ニテ徒ニ日ヲ送ラハ敵ハ彌勝ニ乘テ諸國ノ御方降人ニナル者アリヌト覺レハ一軍シテ國々ノ宮方ニ氣ヲ直サセントテ和田楠其勢八百餘騎ヲ率シ野伏六千餘人神崎ノ橋爪ヘ打寄ム此頃攝津國ノ守護ヲハ佐々木佐渡判官入道道譽カ持タリケレハ其身ハ京都ニ有ナカラ箕浦次郎左衞門ニ勢百四五十騎付ケテ國ノ守護代ニソ置キタリケル云々

又云主上上皇御沒落條中吉彌八是ヲ聞テ惡キ奴原カ振舞カナイテホシカル物具トラセント云儘ニ若黨六騎馬ノ鼻ヲ双ヘテ懸リタリケル(中略)彌八餘リニ長追シタリケル程ニ野伏二十餘人返合テ是ヲ中ニ取籠ル爾共彌八少モヒルマス其中ノ棟梁ト見エタル敵ニ馳並テムスト組馬二疋カ間ヘトウト落テ四五丈計高キ片岸ノ上ヨリ上ニ成リ下ニ成リコロヒケルカ共ニ組モ放スシテ深田ノ中ヘコロヒ落ニケル

又云新田義貞隱綸旨條今相模入道ノ行跡ヲ見ルニ滅亡遠ニアラス我本國ヘ歸テ義兵ヲ擧ケ先朝ノ宸襟ヲ休メ奉ラント存スルカ勅命ヲ蒙テハ叶マシ如何シテ大塔宮ノ令旨ヲ給テ此素懷ヲ可レ達ト問給ケレハ船田入道畏テ大塔宮ハ此邊ノ山中ニ忍テ御座候ナレハ義昌方便ヲ廻シテ急テ令旨ヲ申出シ候ヘシト事安ケニ領掌申テ己カ役所ヘソ歸リケル其翌日船田己カ若黨ヲ三十餘人野伏ノ質ニ出立セテ夜中ニ葛城峰ヘ上セ我身ハ落行勢ノ眞似ヲシテ朝マタキノ霧隱ニ追ツ返ツ半時計同士軍ヲソシタリケル宇多內郡ノ野伏トモ是ヲ見テ御方ノ野伏ソト心得力ヲ合セン爲ニ餘所ノ峯ヨリオリ合テ近付タリケル處ヲ船田カ勢ノ中ニ取籠テ十一人マテ生捕テケリ

又云秀詮兄弟討死條佐々木判官是ヲ聞テ敵サテハ差違テ跡ヨリ寄ケリ取テ返シテ戰ヘトテ兩方深田ナル道一ヲ一面ニ打並テ本ノ橋爪ヘト馬ヲ西頭ニ成シテ歩マセ行ク處ニ楠カ足輕ノ野伏三百人兩方ノ深田ヘ立渡テ鏃ヲ支ヘ散々ニ射ル云々

又云久我畷合戰條坊門少將雅忠朝臣ハ寺戸ト西岡ノ野伏共五六百人驅催テ岩藏邊ニ被レ向

又云新將軍南方進發條南方ノ兵ノ軍立始ハ坂東ノ大勢ノ程ヲ聞テ城ニ籠テ戰ハ、取卷レテ遂ニ不レ被二責落一云事有ヘカラス只深山幽谷ニ走散テ敵ニ在所ヲ知レス前ニ有カトセハ後ヘ拔テ馬ニ乘カトセハ野伏ニ成テ在々所々ニテ戰ハンニ敵頻ニ懸ラハ難所ニ引懸テ返合セ引テ歸ラハ跡ニ付テ追懸ケ野軍ニ敵ヲ疲力シテ雌雄ヲ勢兵ノ弊ニ可レ決ト議シタリケル

又云禁嘉仙洞御修法條赤松是ヲ聞テ三千餘騎ヲ三手ニ分ツ一手ニハ足輕ノ射手ヲ勝テ五百餘人小鹽山ヘ廻ス一手ヲハ野伏ニ騎馬ノ兵ヲ少々交テ千餘人狐河ノ邊ニ扣ヘサス

又云備後福山合戰條赤松カ勢案內者ナリケレハ被二懸散一ナカラ前々ヘ馳過テ落人ノ通ルソ打留メ物具ハケト近隣傍莊ニソ觸タリケル依レ之其邊二三里カ間ノ野伏共二三千人出合テ此ノ山ノ隱彼ノ田ノ畷ニ立渡リテ散々ニ射ケル間備後

守カ若黨共主ヲ落サンカ爲ニ進ンテハ懸破リ引下テハ討死シ那波ヨリ阿彌陀カ宿ノ邊迄十八度マテ戰テ落ケル打殘サレタル者今ハ僅ニ主從六騎ニ成ニケリ云々

又云（久我畷合戰條）爰ニ赤松ノ一族ニ佐用左衛門三郎範家トテ强弓ノ矢継早野伏戰ニ心キヽテ卓宣公カ秘セシ所ヲ我物ニ得タル兵アリ態ト物具ヲ解テ步立ノ射手ニ成畷ヲ傳ヒ藪ヲ潛テトアル畔ノ陰ニヌハレ臥大將ニ近付テ一矢ネラハントソ待タリケル

園太曆云 文和元年四月廿一日今日聞山名伊豆時氏發ニ向八幡ニ之處野伏蜂出向時氏勢數十輩被レ討云々

又云文和四年二月廿八日今日東西軍勢左向河原野伏蜂聊有ニ合戰事ニ騎兵等在ニ彼陣ニ不レ及ニ合戰所行之企ニ不審之處義詮朝臣到來著ニ西山（法花山寺邊）靜爲レ取ニ陣所ニ相計云々此之趣後日所レ聞也

賴印僧正繪詞云武衛重テ發向今度ハ上椙中務少輔入道禪助木戸將監入道法季兩大將トシテ先陣ニスヽムツキニ拾三箇國ノ勢ヲ卒シテ敵城ヲカコム（中略）義政野伏ヲ四方ニ放テ御方ノ通路ヲ塞キ火事夜々發テ諸陣安穩ナラス

豐鑑云或時毛利家の軍より野伏をふせて馬草とる下部を討ぬれは秀吉の兵とも物の具もしめあへすをり合て野伏ともを又討けり

又云明智光秀軍破ぬるをみて青龍寺の城へはせいりぬこれまてかこむ事障なかりしかいかゝはしたりけんゑたしきすさ五六人具して城を紛れ出坂本のたちへそおちゆきける常に人通ふ道はおのつからとかむることもやと道を替て伏見の北の方大龜谷に掛り山中にて物具をはぬき捨勸修寺を過き小栗栖を通りしに野伏共のこゑして夜更馬の音するは如何樣にも落人にこそあらめいさ物具とらんといふもありよしなしといふもありけり

新田由良家傳記云天正八年の春甲斐國武田勝賴西上野働候處に安中衆をかたらひ其外在々の野伏とも道の案內者としてさねまたの渡を取越え谷の城へ夕七ッ時分勝賴殿懸候て日暮に落城仕候

房總治亂記云土岐カ家人梶隼人カ嫡子新五郎城ヲ出テ野伏士數十人馳集メ敵落行難所ニ待懸テ道ヲ要ル廳北ノ兩勢落方ヲ失テ若干射ル

籾井日記云（桂川合戰條）他國ノ合戰ヲ承ルニ只野伏爭ヒ野打水論ノ土民ノケナケ立テスル樣ニ似申シ弓矢ノ正道ノ作法ヲハ存セス候

武家名目抄稿第四十七册

塙檢校保己一編

稱呼部九上

○國持衆

慶長年錄云慶長十六年十二月廿四日土井大炊頭自ニ江戸ニ御使到ニ駿府ニ御歸座之御祝一如ニ右大將家ニ以後代々公方之法式可レ奉レ仰之被レ考樣兼テ從ニ江戸ニ被レ出御目錄者彌堅可レ守ニ其旨ニ事一或背ニ御法度ニ或違ニ上意ニ之輩各國々可レ停ニ止隱置ニ事一各相拘之諸侍以下謀叛殺害之輩互可レ停ニ止相拘ニ事右若於ニ違背之輩ニハ被レ遂ニ御糺明ニ可レ被レ處ニ嚴科ニ者也 慶長十六年四月四日 國持大名衆連判一通

國不持衆連判一通在江戸東國衆一通

寛永十一年御上洛記云七月十一日京都御着座日野岡下エ傳奏衆其外公卿殿上人攝家親王御門跡名代其外地下樂人不レ殘爲ニ御迎ニ參向ス并國持其外小大名參公

○一ケ國衆（今无）

○郡持衆

安土日記云 武田勝賴討果 東國一篇被ニ仰付ニ屬ニ御本意ニ（中略）國持郡持之大名衆罷出

板坂卜齋慶長記云 家康公大坂城ヘ御轉大敵被レ仕候人々の女房娘は大坂に被レ居候哉京に被レ居候哉しかと存不レ申時代にて候關原へ御敵被レ申候郡持衆も知行不レ被レ下斗にて居住には一圓御かまひなし家康公將軍にならせられ候時御敵被レ仕候郡持衆堀川へ出見物其身もかくれられす人もとかめ候事もなし

○城持衆

長曾我部元親式目云知行割之事五ッは口平等にして相渡可レ申事但城持又は一兩具足は可レ爲ニ各別ニ事

奥羽永慶軍記云（最上家掟）城持并旗本諸士無ニ披露ニ私不レ可レ結ニ成婚姻ニ云々

柴田退治記云 諸國城持衆大名小名悉在ニ大坂ニ也人々構ニ築地ニ連レ簷雙ニ門戸ニ事奇麗盡ニ莊嚴ニ者也

○御判預

籾井日記云（信長廻丹波家名代使者御對面條）波々伯部四郎次郎申ス某カ家ハ御判預リノ家ニテ波々伯部庄司ノ藏人カ子孫ニテ古ヘハ七頭ノ家ニテ候

○關東衆

長祿二年以來申次記云正月五日吉良殿澁川殿石橋殿ゼ仁

木殿上杉關東衆少々

○諸侯

三好義長亭御成記云右京兆の供衆は於二御座敷一可レ有二見物一之由被レ申レ之又諸侯衆被レ申分は京兆衆と同座無二覺悟一先例も無レ之間不レ可レ及二祗候一達而被レ申レ之既御成前日の夜半まて不二相呆一間大永四年に典厩へ御成任レ例京兆衆をは内々へよひ被レ申湯漬點心なと被レ參候訖然間京兆衆一人も諸侯の座敷へは不レ被二罷出一候也

大館常興記云天文七年九月二日從二日行事一州より各へ折紙有レ之 昨日の御返事言上候趣被二申入一候所 御意得之由仰にて候何に諸侯知行分事は難レ被二捨置一候由 御氣色云云尤忝次第也各可レ被二存知一旨承候尤畏而承候 忝御事候旨申レ之也

伊勢貞助雜記云殿中へ諸侯の女房衆祗候 被レ申時はいかやうに候哉御はゝに御なり候て御參の時は御はゝの御こし臺屋の御つまへよせ申殿中の中簡衆出むかはれ御かいしやくの事にて候自然御相伴にも御參候へは三方にてまいり候云々

○國司

吾妻鏡云文治二年閏七月二日丙子二品令レ擧二草野大夫永平所望一事依レ有二殊功一也御書云平家背二朝威一企二謀叛一鎮西之輩大略雖レ相二從彼逆徒一筑後國住人草野大夫永平仰二朝威一致二無貳忠一訖仍筑後國在 國司押領使兩職爲二本職一之間可二知行一之由雖レ申レ之如レ此事非二賴朝成敗一候 御奉行之由承及候 有二御奏聞一可レ充二給永平一候恐惶謹言 閏七月二日賴朝進上帥中納言殿

梅松論云去元弘三年御一統のとき北畠亞相禪門准後腹の三のみやを懷き奉て出羽陸奥兩國の守として管領ありしほとに五十四郡の軍勢を率して後詰の爲に不破の關を越てむかふよし聞えけり

又云保元平治治承より以來武家の沙汰として政務を恣にせしかとも元弘三年の今は天下一統に成しこそめつらしけれ君の御聖斷は延喜天暦のむかしに立歸て武家安寧に比屋謳歌しいつしか諸國に國司守護を定卿相雲客各其位階に登りし體實に目出度かりし善政也

太平記云奥州國司顯家卿上洛條 奥州ノ國司北畠源中納言顯家卿去元弘三年正月ニ國城寺合戰ノ時上洛セラレテ義貞ニ力ヲ加ヘ尊氏卿ヲ西海ニ漂ハセシ無雙ノ大功也トテ鎮守府ノ將軍ニ成レテ又奥州ヘソ下サレケル

又云義助讃州下向條 角テ順風ニ成ニケレハ熊野人共兵船三百餘艘調ヘ立淡路ノ武島ヘ送奉ル此ニハ安間志知小笠原ノ一族共元來宮方ニテ城ヲ構テ居タリシカハ樣々ノ酒肴引出物ヲ盡シテ三百餘艘ノ船ヲ汰ヘ備前ノ兒島ヘ送奉ル此ニハ佐々木薩摩守信胤梶原三郎自二去年一宮方ニ成テ島ノ内ニハ交ル人モナシサレハ大船數多汰ヘテ四月二十三日伊豫國今張浦ニ送著奉ル四條大納言隆資子息少將有資ハ此國ノ國司ニテ自二去々年一在國セラル

又云龍馬進奏條 政道ノ不正ヲ褊メ皆己カ本國ニ歸ル者也（中略）又國々ニハ守護威ヲ失ヒ國司權ヲ重クス 依レ之悲職丸卑ノ目代等貞應以後ノ新立ノ庄園ヲ沒倒メ在廳官人檢非違使健兒所等過分ノ勢ヒヲ高セリ

又云新田左中將被賣赤松條 義貞是ヲ聞給テ此事ナラハ子細アラシトテ被レ仰テ頓テ京都ヘ飛脚ヲ立守護職補任ノ綸旨ヲソ申成レケル其使節往反ノ間已ニ十餘日ヲ過ケル間ニ圓心城ヲ拵スマシテ當國ノ守護國司ヲハ將軍ヨリ給テ候間手ノ裏ヲ返ス樣ナル綸旨ヲハ何カハ仕候ヘキト嘲哢シテコソ返サレケル○又大友記ニ見ユ

國太曆云小串秀信來申世上事條 文和元年閏二月十六日小串下野守秀信來申二案内一惠鎭上人爲二武家使一今朝參二住吉一御和談事爲二使節一歟云々彼是云去夜伊勢國司勢數百騎入二洛中一其外軍士充滿云々或說今夜若可レ有レ事歟云々或云此一兩日武家遣レ使著二於關東一云々

新式目追加云 山野河海事右領家國司方地頭 分以二折中之法一各可レ致二半分之 知行一加レ之先例有レ限年貢物等 守二本法一不レ可レ違二亂之一

建内記云永享十一年六月六日壬午後聞北畠中將持康朝臣爲二伊勢國司一北畠故中將子小生也在國小生之間叔父僧還俗相代在レ京當時中將顯雅朝臣也而進二發大和國一致二軍忠一在陣之時分也爲有二種々風說一令二恐怖一歟之由風聞 御退治進二發勢州一云々

鎌倉大草紙云 義嗣卿は天下の御望無レ之といへとも當公方と内々は御中不和と聞えし去によりて去年伊勢の國司動亂せしとき近習のともから義嗣公すゝめ申てひそかに御謀反を思召立ける

蜷川親元記云寛正六年三月十二日己未飛驒國司勝言雉惹卷十羚羊皮一枚被レ進レ之書狀在レ之

應仁記云彦五郎赤松 ハ備前國ノカクイ島ニテ自害シヌ彦次郎ハ伊勢國司北畠殿一性ノ親ヲ賴下ケレトモ不レ叶彼國ニテ腹ヲキリヌ

又云サテモ今出川殿ハ伊勢ニ御座アリ國司參有テ無二ソ崇敬シマイラセラレケル云々

應仁別記云伊勢國小倭庄之常光寺ニ御着アリ（中略）國司

御頼アリテ御下向之由有ケレハ御請九月三日常光寺ヘ參着ス同六日長谷寺ヲ御立有テ國司參上アリ

又云公方勢ハ尾張守政門合手ナレハ不レ及レ申廣川ト云所ニ陣ヲ取(中略)國司北畠殿勢モ被レ立ケリ

二水記云大永六年二月十三日未刻伊勢國司上洛乘輿也十九日伊勢國司中將具國今日禁裏御禮申也親父先帝御代申入云云入レ夜祇候於ニ儀定所一御對面有レ之於ニ男未レ令レ頂ニ戴御盃ニ云々宮御方於ニ小御所一有ニ御對面一親父於ニ御方御所一今上有ニ御對面一云々於ニ庭田亭一着ニ衣冠一訖僕之衆上下三四百許有レ之超過之體也

大館常興記云天文十一年閏三月十一日佐方より以レ使村井承候唐物伊勢國司北畠殿へ被レ遣候御内書まつ〳〵返上候へ色ちの物可レ被レ遣候間あそはしなをさるへきためにて候由被レ仰ニ出之一云々

又云天文十一年閏三月廿日伊勢國司北畠殿よりかう物拜領の御返事到來也面目之至忝候由被レ申候也仍此狀則佐方へ令ニ進入一なり取次富越なり

江濃記云京極生害條公家武家滅亡の根本中國の亂の由來ひとへに尼子か亂より起り尼子は又京極か下知による故也かやうの强敵近國に置へからすとて京極殿退治のよし被ニ仰付一て六角家并越前の朝倉勢州の關長野國司北畠殿美濃土岐殿攝州上下衆馳向ひて終に天文十三年九月下旬京極佐々木六郎殿をせめらるゝ

勢州軍記云國司北畠家之條其領知者先於ニ南伊勢一一志飯高飯野多氣渡會五郡其外大和國宇陀郡也凡侍九千人内馬上千五百騎小人六千人合一萬五千之大將也皇家衰微之後者公家之大名此國司一人也

又云國司北畠家之條南伊勢國司北畠多藝御所者村上天皇後胤公家中院之一家幕紋割菱梧桐也

信田雙紙云角て元服をさせ申し鹽路小太郎と申て上から下に至るまてかつかうせぬはなかりけりかゝりし時のをりふし國司國に下りたまひたかのこうに付せたまふさいちやう御家人はせあつまり日番當番をつとむる(中略)國司此よし御覽してなに〳〵かつらはらの親王よりも六代の後胤將門の御孫相馬の實子信田の小太郎何かしとうち文けひしよなる間五十四郡の其内には是にましたる俗性なしと國司の對座ゆるされ申なをり給ふそ目出度すてに御酒宴七日ときこえけりさいちやう御家人いとまを申て屋形々々に歸らる、其中に信田殿もいとまをこふてかへらる、國司御覽してあら痛しゝゝ奥州の國司を三と勢かに陣ヲ取(中略)國司北畠殿勢モ被レ立ケリ

二水記云大永六年二月十三日未刻伊勢國司上洛乘輿也十九日伊勢國司中將具國今日禁裏御禮申也親父先帝御代申入云云入レ夜祇候於ニ儀定所一御對面有レ之於ニ男未レ令レ頂ニ戴御盃ニ云々宮御方於ニ小御所一有ニ御對面一親父於ニ御方御所一今上有ニ御對面一云々於ニ庭田亭一着ニ衣冠一訖僕之衆上下三四百許有レ之超過之體也

大館常興記云天文十一年閏三月十一日佐方より以レ使村井承候唐物伊勢國司北畠殿へ被レ遣候御内書まつ〳〵返上候へ色ちの物可レ被レ遣候間あそはしなをさるへきためにて候由被レ仰ニ出之一云々

又云天文十一年閏三月廿日伊勢國司北畠殿よりかう物拜領の御返事到來也面目之至忝候由被レ申候也仍此狀則佐方へ令ニ進入一なり取次富越なり

江濃記云京極生害條公家武家滅亡の根本中國の亂の由來ひとへに尼子か亂より起り尼子は又京極か下知による故也かやうの强敵近國に置へからすとて京極殿退治のよし被ニ聞召一內々可レ有ニ御計一之由被レ定了且前々名國司御免之時諸太夫者不レ及ニ成功沙汰一侍者進ニ成功一之條御沙汰之趣不ニ一准一歟爲レ被レ全ニ公益一向後者不レ論ニ諸太夫侍一平均可レ被レ召ニ功要一之由同被レ定了

○太守

快元僧都記云天文二年四月十九日大守北條社參供奉數百人宮中悉有ニ巡見一

甲陽軍鑑云或時信玄公惟高策諺兩和尚へ尋給ふは我家そのかみ天台宗ときゝ二三代以前より禪宗曹洞宗なり我等は又存する子細候間濟家の參徒に罷成へきと被レ仰候へは兩和尚答て云(中略)入室說禪なと仕たる體たらくはけはしき事妙心寺關山派の樣子いさきよく候間太守の御用には妙心寺派御尤たるへきと惟高策諺兩和尚のをしへまゐらせられ候云々

中國治亂記云永祿三年十二月廿四日尼子修理大夫晴久行年四十七歳ニテ逝去アル天文廿一年義輝公ヨリ中國八州ノ太守ニ補任ノ御書ヲ被レ下

籾井日記云八上氷上御先祖條元就公ヲ初メハ十州大將ト申候十三ケ國ノ太守トモ二十ケ國ノ太守トモ世間ニトナヘ候

增補筒井家記云其後秀吉今度筒井順慶戰功尤莫大也然共

兩軍勝負ヲ見合シニヨリ無二ノ志トハ思ヒ給ハサリケレ共大亂ノ砌ナレハ感悅不レ斜トノ感狀並ニ太刀駿馬金銀ヲ與ヘ信長公ノコトク大和國ノ可レ爲二太守一ト云々

土岐累代記云賴康ノ子大膳大夫賴行其子大膳大夫康政入道シテ善昌ト云三代莘手ノ城ニ住シテ當國ノ太守ナリ

船田記云利綱利實亦自二墨俣一遂及二木田一江州太守佐々木政高進二師于彌高山一預俾二淺井氏三田村氏兩軍來省一陣二于鵜飼一

○地頭

吾妻鏡云文治二年七月廿八日癸卯帥中納言奉書到來新日吉領武藏國河肥庄地頭對二捍去々年乃貢一事幷同領長門國向津奥庄武士狼藉事取二庄家解狀一被レ下レ之早可下令二尋成敗一給上之由被レ載レ之去六月一日御敎書也

新式目追加云諸國庄公預所地頭相論之時糺二定兩方一之處於二地頭非法一者被レ處二罪科一至二預所定使一者雖レ有二非據一不レ及二別沙汰一之間依レ無レ所レ恐國々所務啾々之間異論連々不レ絶歟然者爲レ絶二向後濫訴一預所定使等有二非法一之時者可レ被レ改二易彼職一之旨可レ被二仰下一之由可レ被レ言二上二條中納言家一之狀依レ仰執達如レ件文曆二年七月廿三日駿河守殿掃部助殿武藏守殿相模守殿

康富記云寶德元年九月四日辛巳守源法印夙被レ歸二仁和寺一了去月廿八日入來也詣二局務文第一奉レ謁レ之令二語給一云大炊寮領內安藝國高屋保地頭職事奉公之仁平賀爲二勳功賞一建武以來代々御判頂戴地也

甲陽軍鑑末書云致レ狼二藉田畠一之事者於二年貢地一者可レ爲二地頭之計一至二恩地一者以下知一可レ定レ之但就二負物等之儀一者隨二分限一可レ有二其沙汰一

又云藏主就二于逐電一者以二日記一相調口口錢不足者其田地屋敷可二取上一但永代之借狀於二二傳一者不レ可レ懸レ之年期地之事者可レ有二其沙汰一年貢夫公事等者當地頭江速可レ勤事付負物人之借狀經二年期一者負物不レ可レ懸レ之

○國主

簡禮記云御供衆ノ事大方外樣大名ニ相續ヘシ御伴衆ニモ國知行ノ方數多有レ之ナリ總而國主守護ニヨリテ書札等ノ心得可レ有レ之儀也

今川了俊書札禮云片敬の書札之事前にあら〳〵申て候書おとして候程に又書加候同ほとの人の方の狀には謹上某殿とかきて國守にて候はゝたとへは近江守何かしと可レ書さならぬ官途の事も當官のほとは官をかき候前の官に成て候へは皆々前の位某と書候常の事にて候

甲陽軍鑑云國を持者の申事は一月間に五日十日路へきこゆるなれはむさと物はいはぬ國主の法也と仙海法印へ信玄公御物かたりなり

豐臣家譜云小寺官兵衞白二于秀吉一曰三木之爲レ地於二播磨一而偏僻也我所レ居之姬路者國之中央而有二船之便一領二播磨一者尤當レ居二此地一者也秀吉從レ之卽移二居于姬路一頃レ之秀吉赴二但馬一以二弟秀長一爲二國守一

又云是月五月豐後國主大友義統遣二使于秀吉一曰島津修理大夫義久既領二薩摩大隅日向三國一且壓出二兵於豐後一義統雖二相戰一而不二克勝一之當二斯時一若賜二援兵一則義統永爲二秀吉之臣一而已云々

武陰叢話云豐前國城井彌三郎鎭房大剛の兵其上代々城井城の要害に籠り居て國主の成敗に隨はす云々

又云宇佐美駿河守定行か父は宇佐美越中守孝忠といふ孝忠は越後國主上杉相模守房定入道常泰の家臣なり永正元年に房定の子息顯定と上杉朝良北條早雲等と武州川越にて一戰云々永正六年五月上杉房能を長尾六郎爲景生害し國中過半爲景に付しか共宇佐美駿河守一人は中々爲景に隨はす爲景と合戰する上下心を堅くし鉢形よりの加勢を待ける處に房能の兄上杉顯定鉢形より越後へ打入る其翌年長尾爲景と上杉顯定と一戰に及ひ永正七年六月廿日に越後國妻有の庄長森にて五十六歲にて討死す越後又爲景かたに成候此節上條の上杉定實を爲景聟に致し和談に成候へとも宇佐美駿河守は是に隨はす顯定の遺言に隨ひ古河公方高基の御子を申請顯定跡目となし上杉四郎顯實と號し鉢形へ入奉り宇佐美は越後松の山の城に籠り永正七年より大永元年まで十四年か間爲景と取合申候

當代記云天正十三年八月大和國替國主筒井順慶去六月死去彼遺跡被レ移二伊賀一則號二伊賀守一大和國ハ美濃守被二領納一

又云舊冬慶長十三年就二火災一正二月方々音信無二披露一（中略）

一御小袖十有馬玄蕃頭丹波福知山　一長持二枝蒔繪　蜂須賀阿波守阿波國主

一御小袖五小出大隅守諸衆大和弟也　已上去ル慶長五庚子年以二進物一毎年大概如レ此年々ノ義以レ之可レ知レ之

文祿清談云常德院殿依御秀歌炎天墨條先年細川兵部大輔藤孝或夜某ノ所ニテ語ラレケルハ常德院內大臣義尙公ハ天性ヲ優ニ受サセ給テ御武藝ノ餘暇ニハ和歌ニ心ヲ耽リマシ〳〵テ御才覺モ長ク美奉リケル高冠昵近ノ公家恒ニ御訪ヒ有ル時ハカリソメノ御雜談モナク歌ノ褒貶ノミ談シ玉ヒケルトナン其頃ノ和歌ノ達者大納言ナル人始メハ御心安ク御指南

申サレケルカ御年廿ニ過サセ給テハ彼卿却テ風情ヲ窺ハレケルトナンイミシキ國主タレトモ唯御齡壯年ニ滿タセ給ハヌハ口惜キ御事カナト申アヘリケルトナン

增補家忠日記云慶長四年十月八日下 日蓮宗門之僧去々年大佛供養ノ時出座セサルノ僧等相別レテ宗論ニ及ヒ大坂ノ城西ノ丸ニ登テ是ヲ說テ大神君大廣間ニ出御有テ此宗論ヲ聞セ給フ奉行ノ面々御前ニ出座有テ此宗論ヲ聽ル事數回于レ時命有テ曰大佛供養ニ出座セサルノ事ハ宗門ノ掟タルニ於テハ是非ニ及ハス國守秀吉ノ追善ニ不レ出ノ儀曲事タルノ由其罪ヲ決セラレ一方之僧ヲ遠流セラル

武家名目抄稿第四十八册

塙檢校保己一編

稱呼部九下

○城主城守

室町殿日記云管領上杉憑の條 東國筱輪の城主公方の御氣色をうかかひ奉る事あつて里見隼人佐と云士を使者に上せり此仁三好日向守と所緣なるにより宿所へたつぬる所に義興めつらかにおもひて二三日押留て互に年來鬱胷を述この間に歷々の人々うち寄て東國表于レ今不レ穩事の始終つまひらかに承はらはやと各申されければ云々

快元僧都記云天文六年下 小弓上樣義明 古河公方高基樣御連枝也先年御父政氏樣御勘當奥州御下向有レ之其後上總國住人武田眞里谷三河守入道ト同小弓城主原二郎及二鉾楯一毎度小弓打勝畢因レ茲武田自力不レ叶自二奥州一義明奉二招請一爲二大將一小弓城攻落原次郎幷家郎高城越前守父子滅亡同下野守逐電

織田信長譜云永祿十一年信長卽發二向攝州一攻二芥川城一十月朔日城主細川六郎三好日向守退去二日陷二小清水城一義昭居二小清水一信長入二芥川城一乃進攻二池田城一々主池田筑後守出レ質乞レ降於レ是畿內悉平信長以二其地一分二授諸士一

畠山記云其時分駿河高國寺ノ城主伊勢新九郎盛時ト云人アリ

愚耳舊聽記云大光寺初度合戰之條 しかるに城主瀧本諸軍勢に向て申けるは云々

大友興廢記云親清戰書條 城下にてこゝを合よせてのこゝに十倍してをめき谷にこたへておひたゝしく多勢のこゝあり小身の城主なれはかくあるへきにあらす云々

又云帆足市彌太條 薩州はいやましに興る上は行々は豐後も終に薩州にまたかふへし御はたもとの諸城主も氣を變へしさあるにおゐては我々は人よりさきに薩州の內通にまかせてうつふんを散さんとおもふはいかにと伸しかは市彌太つく〳〵とあんし申やうは代々御相傳の主君に御むほんのさたしかるへからす候

增補筒井家記云筒井陽舜房順慶和州添下郡筒井城主知行大和ニ於テ六萬石旗ハ白地ニ春日大明神ノ五大文字馬驗ハ金ノ分銅也家紋梅鉢天正五年松永久秀亡テ後ニ其領十萬石共ニ領合十六萬石餘柴田勝家亡後秀吉ヨリ於二河州一二萬石加增在

伊達日記云天正十四年二本松攻ノ松御弓矢落居條 新田ニ留置候刑部少一黨ノモノ共根塚ノ城主黑見紀伊守谷地守ノ城主森主膳米澤備前米泉權右衞門宮崎民部少高清水城主彈正百々城主左京亮中目兵庫飯川大隅黑澤治部少是ハ義隆勇ニテ候此者トモ右ハ逆心ヲ企政宗公賴入云々

籾井日記云八上秀治籠城條 八上御本城へ楯籠ラセ要害第一ノ城ニ候ヘハ內ヲ丈夫ニ調ヘ候テ敵ヲ引付ラルヘウ候御本城ツナキノ城主ハ面々ノ城ニ籠ラルヘシ城アサマニ候ハ八上ヘ取上ラルヘウ候云々

奥羽永慶軍記云眞壁安藝守攻落小田城條 佐竹ノ麾下ニ眞壁安藝守久幹入道々無武威盛ンナル兵ナリシカ同國小田ノ城主八田左衞門尉氏治入道天庵ト及二鬪諍一事數ケ年ナリ

羽尾記云能登守カ曰イカニ攝津守某ハ舊冬珍シキ刀ヲ求得タリ是御ランセヨトテ如レ氷ナル刀ヲヌキイタシ攝津守カシヤ頰サモニクソウニ指出ス攝津守此ノ分野ヲ見テ內處ヘ入ト見ヘシカ裏門ヨリ退出シ越後ヲサシテ落行ケリ此故ニ吾妻忽無主ノ地トナル爰ニオキテ能登守城主トナラント欲スレトモ國人敢不レ隨

阿州將裔記云義助かたに三江兵庫男左大夫と云大力長刀にてわたり合散々戰終に弟重口を討とり金山も痛手おひ

て引退その外も入亂たゝかひて兩方手負おほかりけり然處に富岡の城主新開道善幷近所之侍とも馳來て双方をし分扱けるゆゑ先互に引退

豐鑑云秀吉越中國に赴給ふ彼國は織田信長公佐々陸奥守主にあたへ給ふ越後の境小津といふ城に越後の國より兵を置て守らせけるを責したかへ陸奥守にあたふへきとて柴田修理前田筑前守をむけ給ふ彼城に至まはりをかこみ戰ける越中越後の境名にあるけはしき道なれは越後より輙後責も叶はさりけるにや城主和をこひて城を明わたし越後の國に歸ぬ

豐臣家譜云大澤次郎左衛門者 美濃守 留馬 城主也 秀吉以レ謀使レ屬二信長一云々

太閤秀吉出生記云太閤秀吉十六歳ノ時天文廿辛亥年春中々村ヲ御出(中略)其頃遠州濱松ノ城主飯尾豐前守ト云テ今川家幕下ノ者ナリ又近所久能ト云所ニ松下加兵衛ト云者小城ノ主也是モ今川ノ幕下也故ニ久能ヨリ濱松ヘ來道ニテ猿ヲ見付異形ナル者也人カト思ヘハ猿々カト見レハ人ナリ何國ヨリ來何者ソト人ヲ以問云々

豆相記云武州天神山城守藤田右衛門佐同忍城守成田長康上州鷹巣城守 小幡三河守等 東八州之勇將卒歸二氏康一云々

十河物語云十河事ハ三好三郎政泰ト申候三好實休末子ニテ讃州之十河ト云所之城主タルユヱ皆人十河殿ト申候ヘトモ本之名字假名ハ後ニ三好隼人佐政泰ト申候弓ノ射手箭細工ニスクレ節陰ヲ取事名人ニテ十河ノフシカケト今ニ申候

上杉輝虎注進狀云輝虎ハ西條山ヘ上海津之城見下是非乘取候訖ト沙汰を聞海津之城主高城彈正驚早打ヲ以甲州ヘ令二注進一候ニ付信玄入道二萬之着到ニ而八月十八日甲府罷立同廿四日筑麻川ヲ越土藏八代ヨリ筑麻雨宮邊無二錐立地一陣取雨宮ヲ限旗ヲ立申候

關八州古戰錄云上杉憲政武州河越城責條 楯籠ル處ノ城主福島左衛門大夫介副朝倉能登守師岡山城守ヲ始トシテ三千餘人義ヲ金石ニ比シ命ヲ鴻毛ヨリ輕シテ挑戰

甲陽軍鑑云亥歳四郎勝頼公をよひ出し信州伊奈をつかはされ則たかとうの城主と有時も義信公へ家老をもつて信玄公より訴訟のやうに仰入られ殊更武道の異見はあま五郎左衛門自餘の事は小原下總同丹後守秋山紀伊守是四人を書立是も義信公へ窺給ひ四郎殿へ付そへ給ふ

簑輪軍記云上野國群馬郡簑輪城主長野信濃守業政古今之勇士也殊に業平の末葉にて智仁勇の三德を兼備せり

末森記云青城主マテモ利家卿ノ御味方ニ參ケレハ成政家老ノ者マテニ心モトナク成ニケリ

清正記云勢州龜山の城主瀧川内佐治新助こもりしを秀吉公先勢にてとりまきせめくつし給ふとき虎之助先勢の動見て參るへしとてつかはさる

又云三月廿九日豐前國馬か嶽に參陣ましくてかんしやくの城責はすへき旨仰出され卯月一日落城これによつて小熊の城もあけわたす其威風におそれ筑後肥後の城々あけ渡し申につきてそれくに城主を入おき給ふひこの國宇土の城主伯耆左兵衛も城をわたし申につきて主計頭を入おき給ふ

清正公傳記云肥後國宇土ノ城主小西攝津ノ守行長ハ朝鮮ヨリ歸朝ノ後猶大坂ニ在テ變ヲ窺ヒ終ニ逆徒ノ張本トナル清正豐州ヒキチ村ヨリ引返シテ肥後ニ歸リ木山峠ヨリ旗ヲスヽメ宇土ノ城ヲ攻潰スヘシトテ夜中ニ押行キ宇土ノ城ヲ責圍ム城代小西隼人南條元宅地下人ヲ城中ニ取入レ防戰ス

武蔭叢話云其昔越後の國主は上杉房能と號し越の府内に在城也其庶流上杉定實是も越後上條の城主也上杉家臣多中に宇佐美駿河守定行年二十一なれとも度々の戰功其名高し琵琶島の城主にて有しか房能の吊合戰を存し立則上杉庶流上條の定實を大將に取立候

又云上杉謙信家老北條丹後守は大身にて上野國厩橋と越後北條と兩城の主たり大切の兵にて軍功重累す

又云上條の城主上杉彌五郎義春後民部又號二島山入庵一を愛宕山に置く此彌五郎大剛の大將にて度々の場數有或時彌五郎組下荻田與三兵衛後號二主馬一其外一兩人愛宕山より出館の城と坂戸の城との間蓮池といふ所に朝待に出る云々

又云缺口に勇士有といふ事を或人の曰上杉景勝の内川田監物いくちなり家康公に本多百助政廣いくち武田信玄に山縣三郎兵衛昌景又福島左衛門大夫家老長尾隼人佐一勝缺口なりいつれも大剛の士なり長尾隼人は本は山路久之丞と云伊勢神戸下 總守友盛の 旗下にて 高岡の 城主也云々

當代記云先年田原ト吉田ノ 城主牧野古伯是ハ牛久保城主牧野順孝弟也 間柄甚不レ快兩所共ニ駿州ヲ 頼殊ニ古伯ハ駿州氏親ト歌道ノ朋タリ古伯永正二年駿河ヘ下ノ時初時雨ノ發句ニテ連歌有二興行一シ箇樣ノ間柄成ケレ共田原大身古伯ハ小身成間大ニ付小ヲ捨ル故田原ノ爲ニ荷擔一翌年氏親三河ヘ令ニ

出張ニ吉田ヲ取詰緊ク被レ攻レ之間古伯終ニ腹ヲ被レ切

又云元龜元庚午年四月廿五日越前國手筒山ノ城被ニ攻崩一敵千三百七十被ニ打捕一廿六日金崎ノ城ヘ被レ爲レ寄城主朝倉中務令ニ悃望一退散城者則令ニ破却一給

又云天正十一年四月岐阜ヘ信雄秀吉押寄三七主ヲ被レ攻所々北國衆柴田前田又左衛門（後改ニ羽柴筑前一爲ニ北國ノ主一）丹羽五郎左衛門出ニ江北一自ニ秀吉一構ニ陣城一被レ置ニ人數一志津カ嶽ヲ相攻因レ茲秀吉自ニ岐阜一彼表ヘ被レ向此頃瀧川左近（尾州長島城主井伊吟ノ主也）與ニ柴田一一味ノ間岐阜三七主ト瀧川左近ノ爲レ押信雄主彼表ニ令ニ居陣一

又云舊冬就ニ火災一正二月方々音信無ニ被露一（中略）一綿五十把 一銀子廿枚 永井右近一銀子十枚 蒔田權佐一御小袖三ツ 永井右近一銀子十枚 宮木右京亮九州衆一御小袖三ツ 永井右近（中略）已上奏者番 西尾丹後守去ル慶長五庚子年以ニ進物一毎年大概如レ此年々ノ義以レ之可レ知レ之

慶長見聞記云府中ヲ攻落シ北庄ヘ御越有ヘシト申吉隆思案シ北庄之城落ハ小松ノ加賀モ力ヲ落シ丸岡ノ青木伊賀力ナク思フヘシ其上府中ノ城ヲ攻ハ味方若干討ルヘシ大義ノ前ニ加程ノ小事ニ目ヲ掛テ初日ニ多カラン手ノ者ヲ討セテ無益ナリ良將ハ戰スシテ勝ト云ハ是ナリ從レ此城人一人モ不レ失シテ攻落シタリトモ又城守トシテ二三百人モ不レ置ハ叶フマシ云々

東遷基業云神君駿府に在せし時義元神君に敎て西參河は卿の累世の所領なり近頃は將士多く信長に與するありこれを伐て其地を取かへし給へと申されければ神君大に悅せ給ひ二月駿府を發し岡崎に歸せ給ふ宗族勳舊の輩これを聞て不レ召して集る事多かりけり寺部の城主鈴木日向守叛して織田信長に屬しける故先これを討へしと議せられける

又云神君は其後又兵を發し給ひ東條の城を攻給ふ城主吉良義諦降を請けれとも其再ひ叛するを以て許し給はさりければ義諦力盡て城を出て江州に出奔して佐々木承禎に依り其後攝州花川に戰死けり

水野勝成記云岡田長門尾州本沼城主淺井田宮尾州一宮城主津川玄蕃伊勢松坂城主此三人於ニ長島一常信公御成敗被レ成候

○領主

吾妻鏡云養和元年九月七日庚辰從五位下藤原俊綱（字足利太郎）者武藏守秀郷朝臣後胤鎭守府將軍兼阿波守兼光六代孫散位家綱男也領ニ掌數千町一爲ニ郡內棟梁一也而去仁安年中依ニ或女姓之凶害一得ニ替下野國足利庄領主職一仍平家小松內府賜ニ此所於新田冠者義重一之間俊綱令ニ上洛一愁申之時被レ返事

又云壽永三年二月三十日己丑信濃國東條庄內狩田郷領主職避ニ賜式部太夫繁雅一訖此處被ニ沒收一之處爲ニ繁雅本領一之由愁申故云々

又云文治元年二月十九日其後熊野山領三河國竹谷蒲形兩庄事有ニ其沙汰一當庄根本者開發領主散位俊成奉レ寄ニ彼山一之間別當滿快令レ領ニ掌之一讓ニ附女子一云々

承久軍物語云七月廿七日にはいつもの國大はまのみなとしをかさきと申所につかせ給へは御とものふしともはみな〳〵御いとま給はり都へかへりのほりけるほとに法わう御なみたのひまよりしゆめいもん院へ御しよを〻くり奉らせ給ふ（中略）これより御ふねにめし雲の波けふりの浪をこきすきて八月五日と申にはおきのくにあまのこほりかり田のかうと申所につかせたまへはりやうしゆあやしき御所をつくりまうけてうつし奉る

太平記云（北野通夜物語條）西明寺ノ時頼禪門密ニ貌ヲ窶シテ六十餘州ヲ修行シ給ヒ或時攝津國難波ノ浦ニ行到ヌ鹽汲海士業共ヲ見給ニ身ヲ安シテハ一日モ叶マシキ理ヲ彌感シテ既ニ日昏ケレハ荒レタル家ノ垣間マハラニ軒傾テ時雨モ月モサコソ漏ラメト見エタルニ立寄テ宿ヲ借給ケルニ內ヨリ年老タル尼公一人出テ宿ヲ可レ奉レ借事ハ安ケレ共藻鹽草ナラテハ敷物モナク磯菜ヨリ外ハ可レ進物モ侍ラネハ中々宿ヲ借奉テモ甲斐ナシト佗ケルヲサリトテハ日モハヤ暮ハテヌ又可レ問里モ遠ケレハ枉テ一夜ヲ明シ侍ント兎角云佗テ留リヌ旅寢ノ床ニ秋深テ浦風寒ク成儘ニ折燒葦ノ通夜臥佗テコソ明シケレ朝ニ成ヌレハ主ノ尼公手ツカラ飯匙取音シテ椎ノ葉折敷タル上ニ餉盛テ持出來タリ甲斐々々敷ハ見エナカラ懸ル態ナントニ馴レタル人トモ見エネハ不審ク覺ユナトヤ御內ニ被ニ召仕一人ハ候ハヌヤラント問給ヘハ尼公泣々サ候ヘハコソ我ハ親ノ讓ヲ得テ此ノ所ノ一合ノ領主ニテ候シカ夫ニモ後レ子ニモ別テ便ナキ身ト成ハテ候シ後惣領某ト申者關東奉公ノ權威ヲ以テ重代相傳ノ所帶ヲ押取テ候ヘトモ京鎌倉ニ參テ可ニ訴訟申一代官モ候ハネハ此二十餘年貧窮孤獨ノ身ト成テ麻ノ衣ノ淺猿ク垣面ノ柴ノシハ〳〵モナカラフヘキ心地侍ラネハ袖ノミ濡ル露ノ身ノ消ヌ程トテ世ヲ渡ル朝食ノ烟ノ心細サ只推量リ給ヘト委ク是ヲ語テ涙ニノミソ咽ケル

花營三代記云應安五年七月十一日日吉神輿造替料足事被付諸國段錢（中略）次當參詣所領事仰所務代官可京濟之旨相觸之且領主之名字田數之分限可注申之焉

康富記云嘉吉三年四月廿日乙巳依招引參文亭大學忠行崔田等自丹州氷所今曉上洛云々彼木伐之張本九郎五郎八郎三郎等召捕之間令召上京可令禁獄之由本所被存之處九郎五郎者領家方之供御人也被繰綱可被召上京之條爲地下同隷爲瑕瑾之由地下一揆申請之間被囚兩人者被預置地下云々

蜷川親元記云寛正六年正月廿九日丁丑自細川典厩御使勝田攝州中島中新關事先度停廢之處重テ各立置畢爲御成敗者其趣可被仰付領主歟无其儀候條非御下智者候哉然者爲領主可停廢歟之由飯左太方へ申遣畢可預御心得之由云々

善光寺紀行云泉州を船にてわたりてこれよりして新關ともを世のみたれにことよせておもふさまにたておきつゝ旅行のさはりと成にけり仁木なといへる領主のかた〳〵をこしらへて事ゆるなくはとほり侍れと心くるしき事のみありけり

毛利家記云元行卿ハ最前安藝國多治比ノ郷幾三百貫ノ領主ニテオハシケルカ勇謀才智深シテ五常道ヲ專ラ心ニ懸給テ國々廿ケ國ニ及御手ニ入給フ

太閤記云抑北條左京大夫氏政か由來を委しく尋るに平相國之八男助盛の末裔伊勢新九郎と云し人是其元祖也於備中國本知三百貫之領主にて有しか立身の勵之盡思惟觀侍れとも事の行へき道もなし云々

大和記云皆々手寄ノ大身衆ノ旗下ニテ居申サレ候又夫ヨリ小身ノ侍モ數多候ヘトモ何レモ皆右ノ者トモ旗下或ハ家來分ニテ居申候左樣ノ者トモ、皆々在々ヲ請取掘リ廻シ藪ナトニ葭一構一構ニ有候ト見エ申候其故大和ノ在郷ハ大形堀ヲ掘リ廻シテ藪ヲ植申候領主ナキ所々モ盗人ナトノ用心ニヤ普ク左樣ノ樣ニテ候

甲陽軍鑑末書云恩地載借狀事無披露不可請取其上出予判不相定若彼所領主令逐電者隨事體可有其沙汰過年期者擧先例若依佗言就于書置者恩役等可相勤事

簽輪軍記云上杉公越後國へ御立退被成元來上杉の家臣成誠信御頼八ケ年御忍しとや其ころは領主知行高何萬石と極し事もなく大方に被領候事太平なる物かな

○郡主

奥羽永慶軍記云（由利十二藤條）康安元年ヨリ軍始リ貞治二年五月廿一日進藤渡邊二人共ニ滅ヌソレヨリ以來百餘年ノ間郡司不定（中略）應仁元年ニ到テ由理ノ民トモ鎌倉ニ上リ山内殿ノ臣太田持資ヲ頼ンテ郡主ナキ事ヲ訴ヘ奉レハ即十二人ノ地頭下國シ給フ其人々ニハ小笠原大和守重譽仁賀保ニ居城ス大江大膳大夫義久矢島ニ住ス其外赤尾津子吉芹田打越石澤岩屋潟保鮎川下村玉前等ナリ

又云（和賀薩摩守滅亡條）角テ又四郎緣ヲ求メ同國江刺ノ郡水澤ノ城主白石若狭守ヲ頼ミ正宗ノ方ヘ訴ヘケルハ其累世和賀ノ郡主タリトイヘトモ先年父ニテ候薩摩守カ代ニ太閤秀吉公ノ命ニ背キ所領沒收セラレ其ヲ南部信直ニ給リケレハ年久ク牢籠ノ身ト成テ爰彼ニ蟄居致シ候云々

○郷主

增補家忠日記云永享元年親氏故有テ上州世良田ヲ避テ西ノ方三州ニ往テ松平ノ郷ニ移ル時ニ松平之郷主松平太郎左衛門尉在原信重男子無キニ依テ親氏ヲ婿トシテ松平ノ郷ヲ相傳ル故ニ親氏松平太郎左衛門尉ト號ス

又云元龜二年七月廿五日遠州濱名ノ郷主大神君ヲ叛キ志ヲ信玄ニ通シテ濱名ノ郷ヲ去

○郡主

太閤記云（秀吉於敵國成要害之主條）或時信長卿老臣を呼聚評議し給ふやうは美濃國に打越度々雖盡狼藉敵痛むけしきもなく却て兵氣撓み軍勢疲れて成功なし然間川向ひに要害を構へ勢を入置謀計を盡し戰功を勵し一國平均に治め各數年の勞力を安んし忠勤を報せんと思ふは如何あらんと宣へは何も奉り一戰功成て敵國服し民心歸せしむる御計策也と申上けれは信長公御氣色よけにして誰をか其物主に定め要害を拵へ給んと重て問給ふに河を越て可居住と云人なかりけり

西國發向記云今度秀長延諸國之大軍定制法少無越度任存分之條無比類之大將也殿下爲御連枝條重職尤也依之爲和州江州兩國物主（中略）羽柴孫七郎秀次爲江州物主

清正記云此已後は縱北條首を刎候而持來候とも一人も御助有間敷と被思召候關東八州之物主共不殘相籠候間一城ニ而關東一篇ニ被討果事候

續撰清正記云志岐城爲成敗小西働ニ付人數相添遣自身又渡海之旨尤に候然而爲後詰天草出候處其方於手前追崩悉切捨候由手柄無比類候遠路首不及差上候重

○物主

而志岐天草物主共申付次第彼首共可二持上一候云々
武藩叢話云小田原陣の砌蒲生氏郷の攻るは井細田口にて
岩槻の城主太田十郎氏房持口なり氏房は廣澤兵庫頭重信
を呼夜打致へき旨下知せらる(中略)城方には今夜の物主
廣澤尾張守秀信兵庫頭重信此時は尾張守秀信と云一番鑓と頻に名乘候氏郷は
廣澤を能敵と見て是を討んと飛込々々戰ひけれとも廣澤
を討取事叶はす云々
又云關ヶ原陣の時肥後の宇土城を攻らる、時或夜清正密
に下知せらる、は今夜は夜討有へし油斷すへからすと有
夜討の時日下部與助一番にかけ出一番に鑓を合す云々城
の勢敗軍して引退く夜討の物主杉本次郎助嗤一人柵の木
戸口の外に殘今夜々うちの大將杉本次郎助歸りたりと名
乘所へ兵助田中走り着鑓を合る
當代記云永祿十一戊辰年武田信玄駿河へ發軍ノ時分人數
自二信州一遠州へ秋山伯耆守爲二物主一雖二打入一家康公於二
當國一輝二權威一之間秋山無二其詮一
又云元龜元庚午年九月木下藤吉丹羽五郎左衞門小谷佐和
山爲レ押有ケルカ參二旗本一剩於二路次一一揆數百討取殊光
坊四十九院ノ僧其外物主數多討取信長御感甚
天正記云諸國知行割條ひてなかはやまとのこうり山にしやう〳〵
はくをこしらへ近國ふさうのかためなり羽柴孫七郎秀次
江州のものぬしとして中村式部少輔堀尾茂助一柳市助山
内伊衞門てん下ここうの臣たりといへ共秀長家の年より
として是に組す江州府中八幡山に居城を定殊もつて名地
なり
伊達日記云天正十六年二月十二日片平阿子島高玉三ヶ所
ノ人數ヲ以大内備前苗代田へ未明ニ押懸古城ニ居候百姓
共百人計相果候本内主水ト申者物主ニ指置候ヲ切腹致サ
セ放火申サレ候間云々
又云清顯公御遠行以來田家主ナシニテ心々ノ樣ニ及レ承
候備前本居仕度存弓矢ノ物主ニモ罷成候ヘハ如何ニ存候
其上片平ノ地ハ高玉阿子島ヨリハ南ニテ御座候間片平助
右衞門於二御奉公一ハ右ノ兩地持兼會津へ引除可レ申候

武家名目抄稿第四十九册

塙檢校保己一編

稱呼部十上

○諸士之棟梁

愚耳舊聽記云南部大膳御誅罰條永祿の頃迄は津輕三郡共に南部の支
配にて有けれは南部大膳高信と云人を津輕郡中の惣奉行
と定南部よりつかはしける此人則石河村の辰巳に當て大
佛か崎といふ所に城郭をかまへ此所に居住して惣郡中を
つかさとり諸士の棟梁と成諸事の法令を取行ひてそ居た
りけるさるに依て大小の諸侍日夜出仕隙もなく人馬共に
みち〳〵て門前市のことく也

○侍之棟梁

北條五代記云伊豆早雲平氏茂由來條其頃兩上杉と云て上州相州に居城
有て關東諸侍の棟梁たり

○侍

平家物語云越中前司最後條越中前司實もとや思ひけむ本は平家の
一門たりしか身不肖なるに依て當時は侍になされたるを
越中前司盛俊といふ者なり和君は何者か名乘れ聞うとい
ひけれは云々
源平盛衰記云成規以下被召取條西光ハ天晴死生不知ノ不當仁ニテ入
道ヲハタト睨ミ返シテ西光全ク謀叛ノ企テ不二存知一此恥
ニアフ事運ノ窮ニアリ但シ耳ニ留ル事アリ侍程ノ者カ靱
負尉ニモ成リ受領檢非違使ニ至ラン事ナニカ過分ナルヘ
キ始メタル事ニ非ス
又云三井食條條六ハラノ討手ニハ伊豆守仲綱ヲ大將軍トシテ
侍ニハ渡邊黨滿馬允子息省播磨次郎其子授ノ薩摩兵衞列
ノ源太與ノ馬允競ノ滝口唱ノ町七清瀧寺等也
又云絹笠合戰之條大介ハ敵寄ルナラハ暇アルマシ先ツ靜ナル時
能々兵粮ヲツカフヘシトテ酒肴埡飯昇キ居テ是ヲ勸ムサ
テ下知シケル事ハ弓シタヽカニ射者ハ家子モ侍モ舍人草
刈ニ至ルマテ汰證弓ハ一人シテ二挺三張矢ハ四腰五腰モ
用意セヨ
吾妻鏡云元曆元年七月廿五日辛亥故井上太郎光盛侍保科
太郎小河原雲藤三等爲二降人一參上仍可レ爲二御家人一之由
被二仰下一藤内朝宗奉行云々
又云正治二年二月六日壬戌爰有二眞壁紀内云者一於二盛通一
成二阿黨之思一生二虜則宗事更非二盛通高名一重忠虜之由憤二
申之一仍於二石御壺一被レ召二決重忠與二眞壁一之處重忠申云

不レ知二其事一盛通一人所レ爲之由承及許也　其後重忠歸二來于侍一對二兵壁一云如レ此讒言尤無レ益事也携二弓箭一之習以レ無二横心一爲二本意一然而客爲レ懸二意於勳功之賞一成二阿黨於盛通一者直生二廚則宗一之由可レ被レ申レ之歟何差二申重忠一哉且盛通爲二譜代勇士一敢不レ可レ借二重忠之力一已申二賜譜第武名一之條不當至極也云々

又云承元三年十二月一日辛酉御臺所御方祗候諸大夫侍等可レ隨二將軍御出供奉一又募二彼新恩一可レ勤二平均公事一之由今日被レ定レ之

又云建保六年九月十三日辛巳鶴岡宮騷動尋二子細一之處宿直之輩候二廻廊一而兒童若僧等徘徊明月一彼宿直人見二無禮一之故起二鬪諍一爲二少生一被二打擲一云々十四日壬午件宿直人者右大將家御時敬神之餘以二格勤號小侍等一結二番之一每夜所レ被レ警二固宮中一也其儀于レ今不レ怠之處逢二恥辱一之間向後可レ停二止此事一之由被二定下一云々

又云寶治元年十二月十二日辛卯今日被レ定二訴論人參候所一其狀云一訴訟人座籍事侍客人坐（奉行人召外不レ可レ參二後座一）郎等廣庇（召外不レ可レ參二南廣庇一但陸奥沙汰之時者隨レ召可レ參都鄕沙汰者依二時儀一可レ參二小緣一）雜人大庭（不レ憚召外相模武藏雜人等不レ可レ參二入南坪一）

又云康元二年八月十二日庚午來十六日競馬役事仰二相州

已下諸方二被レ召二强力輩一此程令レ習二彼藝一亦御隨身格固等之中被レ撰二堪能者一爰左右事秦弘員種久行久等頻申二子細一而侍與二隨身一如二馬打之相論一雖レ有二子細一任二院御例一以レ侍可レ爲レ左之由被レ定云々

承久軍物語云ゑなのゝくにのちう人ににしなの四郎もりとをといふ侍あり十四十五の子をもちけるかいまたけんふくもせすさるしゆくくはんあるによりてくまのまうてのおりふし上くはうのみくまのまうてありしかは道にて參りあひ奉りけり上くはうかの子供を御らんするにいつれもきよけなりけれはゐん中にめしつかわれんとてやかて西めんの衆にそなされけるもりとを子供をめし上られしかたしけなさにみつからもけんさんしみやつかへ申けれは右京大夫義時これをきゝなんそうくはんとう御をんのさふらひ御ゆるされもなくしていん中の御ほうこう心えすとてかの御領二ヶ所をもつしゆせられけり

太平記云（六波羅攻條）源氏ノ陣ヨリ紺ノ唐綾威ノ鎧ニ鍬形打タル甲ノ緒ヲ縮メ五尺餘ノ太刀ヲ拔テ肩ニ懸敵ノ前半町計ニ馬ヲ驅寄テ高聲ニ名乘ケルハ八幡殿ヨリ以來源氏代々ノ侍トシテ流石ニ名ハ隱レナケレトモ時ニ取テ名ヲ被レ知ネハ爾ルヘキ敵ニ逢難シ是ハ足利殿ノ御内ニ大高二郎重成ト云者也云々

又云（先帝船上臨幸條）忠顯朝臣是ヲ聞給テ隱シテハ中々惡カリヌト思ハレケレハ此船頭ヲ近ク呼寄テ屋形ノ中ニ御座アルコソ日本國ノ十善ノ君ニテイラセ給ヘ出雲伯者ノ間ニ何クニテモサリヌヘカランスル泊ヘ急キ御船ヲ著テヲロシ進セヨ御運開ハ必ス汝ヲ侍ニ申成テ所領一所ノ主ニナスヘシト被レ仰ケレハ船頭實ニ嬉シケナル氣色ニテ取梶面梶合セテ片帆ニカケテソ馳タリケル

又云（畑六郎左衛門條）爰ニ寄手ノ中ニ上木九郎家光ト云ケルハ元ハ新田左中將ノ侍也ケルカ心ヲ飜シテ敵トナリ責口ニ候ケルカ云々

又云（笠置軍條）大佛陸奥守貞直同遠江守普恩寺相模守（中略）足利治部大輔高氏侍大將ニハ長崎四郎左衛門相從フ侍ニハ三浦介入道武田甲斐次郎左衛門尉椎名孫八入道岩崎彈正左衛門尉高久同孫三郎同彦三郎伊達入道田村刑部大輔入道入江蒲原ノ一族横山猪俣ノ兩黨云々

異本伯者卷云長高二男基長ヲ呼テ云ケルハ汝ハ急テ館ニ歸リ兵粮ヲ當山ニ入其後妻子共ヲ思ヒ思ヒ忍ハセ館ニハ火ヲカケ燒拂フヘシト下知シケレハ基長畏テ申シケルハカヤウノ小勢ニテハ侍ノ一人モ大切ナリ敵ハ定テ寄ヘキニ一天ノ君ノ御前ニテ可二討死一ト存スルナリ餘人ニ此使ヲハ被二仰付一ヘウモヤ候ハント申シケレハ云々

寶篋院殿將軍宣下記云延文三戊戌年十二月二十二日卯刻御車幷諸侍の先に乘騎馬の輩都合三十騎二行に乘其次に御車の少先に烏帽子直垂帶劍の兵侍二十五人五人つゝ並五通也

花營三代記云康曆二年五月二十八日大内新助（號左京權大夫）與二舍弟三郎一於二藝州内郡一合戰一族惣頭筑前守父子三人内美作守（石州守護代）父子二人（以下十三人姓名略之）其外侍名字二百餘人切捨不レ知二其數一云々

義貞記云凡兵之習命ヲ捨ト云ハ主君及二大事一時也私ニハ恥辱ニ及ハン折ナルヘシ木曾殿ノ侍越後中大力自害其詮ナキカ何ソ主ノ遲ク出レハトテ主ノ用ニモ不レ立徒ニ命ヲ可レ失哉聊其難アリ命ヲ輕スル事雖レ似二高名一是高名ノ不覺トモ云モノ也

齋藤親基記云寛正六年八月十五日酉刻神幸之間自二善法寺一御參向二衛府一侍小早川備後守熙平左京亮國景長次郎左衛門尉乃信遠山加藤左衛門尉元量伊勢備前守佐々木鹽治五郎左衛門尉季清

江濃記云屋形治郎頼充ハ其年廿四歲ニテタケクイサム大

將ナレハ勢ヲアツメ一合戰ト志サシ爰カシコニヒカエ〳〵勢ヲマチ給エトモ御運ノ末ニヤ美濃衆悉ク道三ニ隨ヒ譜代舊功ノ侍一人モナク落行ケレハ力ナク神戸ノ渡リ迄落給ヒ云々

室町殿日記云（衣服物條）御侍衆大紋（右十五通十五具）

宮參次第云侍一二人も上下を着し馬に付へし

相國寺供養記云路次行列先侍所（中略）次御馬次衛武長次衛武侍十人（各騎馬總鞦下紐帶劍）其下新左衛門尉源詮廣古山勘解由左衛門尉平滿藤（下略）

了俊大草紙云凡殿上人諸太夫侍の位は定たるなり武家天下を執給て後御一族は四位殿上人の位と同かるへしと云々官位は今も不同なり先代の世には城入道は同侍の位にてありしかとも大忠によりて御一族よりは下諸侍よりは上と定られき當御代には土岐伯耆入道は侍よりは上一族よりは下と定られしにや佐々木佐渡判官入道も如ㇾ斯蒙ㇾ仰しなり是は皆其人の一代に取ての事と云々

新田由良家傳記　光源院義輝公横瀨雅樂助江送狀云就ニ禁裏御修理の儀一對ニ關東諸侍中に一被ニ申遣一候間急度於ニ御馳走一尤可ㇾ爲ニ忠功一候

又云義氏由良刑部大輔江送狀云此度氏政關宿へ取詰候處輝虎義重相談雖下及ニ後詰一候上陣中侍堅固故失ㇾ利退散羽生地引明敗北云々

季瓊日錄云長享三年四月九日丁酉未明赴ニ北等持一（中略）京朝廊下左邊向ㇾ南立侍衆左右役者細川右馬頭道勝入道殿同右馬助殿同民部少輔殿彦九郎殿淡路次郎殿大館左衛門佐殿（下略）

大友興廢記云（肥後國甲斐宗運方へ內通條）義鎮公は重賞のこゝろさしふかかりけれは豐州の諸勢は死夫なるへし終に九國の內多分は義鎮に相したかはん我愚意を以て九州の人數大圖をつもるに先當國十四郡一かしらつゝの人數を合二萬四千ほとのつもりなり肥前の國十一郡龍造寺に雜兵ともに二萬餘あるへし豐後國八郡に頭分の侍野中ぬき長野また佐野宇佐部三十六人の侍かれこれ惣人數一萬六千云々

矢島十二頭記云永祿七年正月十五日之夜山田五郎殿養田之館へ押寄無勢にてすてに養田の館おつへき樣子に御座候所に在鄕侍烏井坂太夫佐々木口介長沼藤三郎佐藤若狹畠山專介小野筑後高橋孫介遠藤和泉高橋上野菊地下總同介左衛門小松丹後同新介長谷山但馬所々より走集り敵陣の後より責登敵陣之鵜沼專介と申貝吹を小野筑後か討取る彌以敵陣前後の敵に心おくれけるや早々陣を引取給ふ專介は貝は玉口へ取其後西馬音內より無事を入取合無し云々

奥羽永慶軍記云（武藤駿河守光安滅亡條）寄手ノ大將義光出馬シ給ヘハ相從ノ武士ニハ山邊六郎畑屋五郎最上豐後守同內膳進同備前守（中略）兩陣川ヲ隔テ閧ノ聲ヲ三度擧ル大將大梵字ノ陣ヨリ松野內匠ト名ノッテ白糸ノ鎧三階松ノ指物栗毛ノ馬ニ打乘大長刀ヲ持テ今日最後ノ軍ナリ味方ニ討死セント思フ者ハッ、ケヤトテ漲リ流大河ニ馬ヲ乘入一文字ニ渡ス松野カ手ノ者侍足輕中間悴者迄四五十人ッ、キケリ

武林往昔日記云阿波國守謨蜂須賀家政入道峰庵家中の下馬定は貴賤を不ㇾ撰下馬する事なかれとなり若是をそむく輩あるにおひては銀壹枚の過代をかけて是下馬とかめにて出入なきものなりと聞ゆる依て家中の侍はけみます〳〵馬を持人多しとなり

松原自休手錄云大高ニ依ㇾ無ニ兵粮一命ニ元康一令ㇾ入ㇾ之十八歲初陣昔代之侍千餘騎勵ニ軍忠一

又云古田兵部モ從ニ東國一歸テ入ニ松坂之城一雖ㇾ然敵未ニ寄來一依ㇾ之割ニ微勢一侍十餘輩交ニ輕卒一津ノ城南ノ口ヲ持ッ」

賀越闘諍記云若林長門守野島ヲ武者大將トシテ僅ニ八百餘騎打莅テ先手加島表エ支エタリ然ルニ若林諸卒ニ向テ云ケルハ此合戰ニ一足モ退タラン者タトヒ前々ノ忠有ト云共無ニ處シテ本領ヲ可ニ沒取一一太刀モ敵ニ打達テ陣ヲ破リ分取ヲシタラン者ハ凡下ナラハ侍ニ成武士ナラハ直ニ恩賞ヲ可ㇾ與云々

甲陽軍鑑云侍衆大小共に學問能して物しり給はむ事肝要なり但なに本にても一冊おほうして二冊三冊よみて其理に能々徹し給はゝ心おほくは學問無用になさるへし殊に詩聯句なとまてあそはし候は猶もつてひか事なり

又云惣別侍には色々なきやうにても四人有第一に剛强にて分別才覺ある男上第二には剛にして機のきいたる男中第三に武邊の手柄を望一道にすく男下第四に人並の男なり

增補家忠日記天正十年十二月十二日下云今度大神君ノ幕下ニ屬スル甲信兩國ノ諸士等自ㇾ今以後忠信ヲ盡スヘキノ旨遠州秋葉寺ニ於テ各連書ノ記請文ヲ書シメ玉フ（中略）青柳內匠助青沼鄕左衛門安部七郎兵衛矢崎長助横內民部右衛門坂本清三郎秋山九右衛門横內作之丞萩原作左衛門高輕藤四郎橘田藤十郎志村又右衛門渡邊藤三郎中込藤之丞飯田民部少輔以上青沼助兵衛同心ノ士

板坂ト齋慶長記云家康公伏見に御詰候時は下々へ扶持をたくさんに被下千石より下のつめ奉公人に馬もつへからす人おほくおくへからす物の入ものと被仰出千石とり候ても馬をもたぬ人もあり五百石にて馬を持人もあり扶持方の内にて内のまかなひ町屋をかりて居候ものは宿ちんまても小身なるものもあり伏見御城なれは馬に乘る間もなし二千石も千石も二百石も侍は一人役と被思召候御つもりか不入ふうたい少もつゐへは御嫌入へき所へ金の五百枚千枚銀子乃二三千貫の事いとわせられ候事はなし

武陰叢話云北條丹後守相果候と聞上杉彌五郎先手にて景勝館城へ寄らる天正七年三月十八日に鮫ヶ尾の城を攻落し三郎景虎切腹なり景虎内室及ひ子息道萬丸とて九歳に成けるを同道し此女は景勝姉なり此子は景勝甥也かく云は謙信養父なり命を助とよひ宣しかは上杉彌五郎是を景勝へ伺ひけれ共景勝承引なく霧澤といふ侍に申付憲政を打景虎内室道萬丸も生害し越後は景勝手に入ける

○布衣侍

吾妻鏡云建久元年十一月九日己未二品令参院内給云々布衣侍六人（各具三調度懸一）宇都宮左衛門尉朝綱八田右衛門尉知家工藤左衛門尉祐經畠山次郎重忠梶原平三景時三浦十郎義連廿九日己卯入夜右大將家御院參布衣侍十二人在御共各狩衣下着腹卷云々

さかゆく花云右大將五しやくにあまりたるひはりけの馬にのらる下らうのすいしむ一二の座御むまのくちをはるそへとねり二人くちにつくゐかひ御むまやのとねり一人はむちをくひにさす一人はくらおほひをかく下らうのすいしんむまそへ八人うしろにあり御すいしむ二人かたはらにありほういのさふらひ五人馬の左右にあよふなり

○平侍

太平記云（執事兄弟奢侈條）武藏守師直今度南方ノ軍ニ打勝テ後彌心奢リ擧動思フ樣ニ成テ仁儀ヲモ不レ顧世ノ嘲哢ヲモ知ヌ事トモ多カリケリ常ノ法ニハ四位以下ノ平侍武士ナントハ關板打ヌ舒葺ノ家ニタニ居ヌ事ニテコソアルニ此師直ハ一條今出川ニ故兵部卿親王ノ御母堂民部卿三位殿ノ住荒シ給ヒシ古御所ヲ點シテ棟門唐門四方ニアケ鉤殿渡殿泉殿棟梁高造リ雙テ奇麗ノ壯觀ヲ遏クセリ

寶篋院殿將軍宣下記云御沓佐々木新藏人秀詮渡ス今川兵部大夫頼近請取なをすや此外平侍入道集御所之御警固其都合勢九千四百五十餘騎

甲陽軍鑑末書云信長ハ甲州柏板ヲ越駿河ヲ一見有ヘキトアリ其節近衛殿ヲ同道マシマシ候ニ近衛殿ハ下ニマシマスヲ信長馬上ニ而近衛口ゴリヨナトハ木曾路ヲノホラレヨト申サルヽニ上ヨリ如斯ナレハヨキ事ト家老平侍ニ至ル迄ヲコル事限ナシ

籾井日記云（粟田口合戰條）敵之大將分ノ者トモノ討死ハ明智カ手ニハ諏訪平藏ヲ河島監物討取申候（中略）此外平侍之首ハ數ヲシラス候

○遠侍

奥羽永慶軍記云（最上義安父子達夜討條）最上出羽守義光ハ清和天皇八代源ノ義家ニハ十一代ノ後胤越前ノ國足利尾張守高經舍弟左京太夫家兼ノ二男修理大夫兼頼按察使トシテ羽州最上ヲ賜ハリケレハ延文元丙申八月十五日山方ニ入府シテ康歷元年六月八日ニ卒ス此兼頼ハ七代之孫修理大夫義守之子也（中略）此人十六歳ノ時父義守トヒトシク當國高湯ノ溫泉ニ入玉フモトヨリ旅宿尺々シカラネハソレヲ見ウカヽヒケルニヤ近里ノ山賊カシコニ押入寶ヲウハワントヒ擬シテ七十餘人夜半ニ高湯ニ押ヨセ假屋ニ火ヲカケ我ウチトラントソ進ケル時ニ義守兼テ武意ニ怠ラヌ人ナレハカクヤト云ヘトモ要心キヒシク遠侍ヲカレケレハナシカハ惡カルヘキ皆太刀ヲツトリツヽ夜討ニコソハ向ヒケル

○若侍

武陰叢話云加賀利常卿の内大音主馬介に若侍共申けるは主馬殿も心は猛く候共今は走る事叶ふましけれは鑓の手筈へはおくれ給はん誠に麒麟も老ぬれはと言ふ事思いたされ候と嘲る

又云眞田は大坂に着大野修理館へ其身斗行く其比は傳心月波とて薙髪成しか玄關にて案内乞に奏者番罷出山伏は何方よりそと問眞田わさと手を束大峰邊の山臥にて候か御祈禱の卷數さし上御目見を望候といふ奏者承り殿には御登城にて御留主なり此方へ通られ候へとて番所の脇へ呼入御歸宅の砌御目見めされ候へとて待せけるか、る所に若侍十人斗寄集りて刀脇差の目利せしか一人の若侍眞田に向て和僧の刀脇差見せられよと云

○葉侍

籾井日記云（桂川合戰條）大島民部世良田彦次郎里見平右衛門籠澤内匠ヲ始トシテ宗徒ノ衆ヲ先立瀧川ハ名アル大將ヲ討モラシ候ハヽ殘念ナリ葉侍トモニ目カケナ天竺マテモ追テ討取トテ下知シテ北ル勢ヲ追ツメ〳〵伏見ノ邊マテ行候云々

○小侍

室町殿日記云（高政の飛脚とうゆる條）三好筑前守家中に彌坂大學介と云人鴉川逍遙として小侍七八人具して大川へ出けるに汀のかたを大の男の髪黒かほうかくして頭巾かふりて飛脚と見へていそきて行ほとに大學介これを見てあやしく思ひうちやるへきものならす追かけてとらへよとて四五人つかはしけれは云々

○渡侍

關八州古戰錄云（尾藤左衛門尉杉山主水正條）秀吉公ハ八月十七日會津ヲ發馬シ玉ヒ歸路ニ赴シメラル（中略）豆州三島ノ驛ヱ著座アリシニ杉山主水正ト云渡リ侍旅館ノ邊ニ推參シテ直訴ノ旨アルニ依リ石尾與兵衛治一ヲ以テ其所以ヲ尋ラレ向後仕官ノ事勝手ニ任スヘキ旨免許セラル

○歩侍

武陰叢話云赤尾は京極代々の老臣也赤尾美濃守は信長公に亡され其子幼少なれは隱して多賀法印弟子にする十二歳のとき烏居の前へ出遊ひ居しに何方とも知す歩侍一人通りけるに彼子誤りて行當る歩侍怒て小僧めととらへ頭をはる彼子其者の脇差を拔て只一刀に刺殺し夫より走り在所赤尾に隱居云々

○國侍

嘉吉記云赤松播磨入道カ子三郎ハ內野合戰ニ討死セシ滿則カ孫也舊功思召ケルニヤ赦免アリサレトモ開國ナケレハ領地ハ未タ給ハサリシヲ播磨牢人トモ三郎ヲ進メ攝州ヘ下向シ播磨ノ國侍ヲ引起シカトモ遂ニ不レ叶シテ有馬郡ニテ自害セリ

織田信長譜云信長使下羽柴秀吉領二播州一且窺中毛利氏上秀吉卽發二向播州一求二國士人質一折沙二汰國政一

大和記云順慶一度ハ南都ノ出家ニテ被レ居候然トモ器量ノ人ニテ還俗被レ致武威ヲ振ヒ國中半分過討從ヘ添下郡筒井ト云處ニ平城ヲ築居城仕候自分之領知ハ只今ノ知行高六萬石程ノ事ニ候ヘ共甥或ハ妹聟姪聟多ク一門廣キ人故ニ自ラ手廣ク成被レ申大和大半手ニ入レ被レ申然處ニ松永殿筒井ヲ可レ擊覺悟ニテ人數ヲ揃法隆寺迄被二打出一候ヲ順慶モ筒井ヨリ二十町モ西栢樹ノ木村ト申處マテ被二出向一候順慶先手ハ島左近松倉右近兩人ニ國侍等隨ヒ候扨並松ト申所迄互ニ掛向ヒ軍初リ松永先手敗軍セシメ候テ順慶ノ先手ノ者トモ追討ニ仕候テ長追仕候然ル處ニ法隆寺ノ寺內ニ松永人數ヲ隱シ置候故此伏兵筒井ノ跡ヲ遮リ申ニ就テ敗軍ノ永松人數モリ返シ筒井方惣敗軍ニ及ヒ筒井ヱ取籠リ申事不レ成候テ直ニ宇多郡ヘ落被レ申候

勝軍地藏軍記云永祿三年五月駿河國今川治部大輔義元分國ヲ治メ尾張國ヲ追罰シテ上洛シ（中略）同月十九日尾州ヲケハサマト云處ニテ伏兵起テ義元ハ信長ノ爲ニ打レケル間三州尾州ニテ義元ノ下ノ國侍アマタ信長ニ隨ヒケル」

末森記云能登國七尾城ニハ壹國ノ人數過半置タマヒ本丸ニハ利家卿舍兄前田五郎兵衛尉子息孫左衛門尉高畠織部十河清六國侍ニ長九郎衛門尉其外名アル侍共都合其勢三千餘騎入置給フ

松平記云永祿三年義元桶はさまにて御打死の時敗軍いたし殊外おくれをとり氏眞公へ面目なく存みな〳〵身を引て罷在候故大原三浦父子小倉なんと出頭なり國侍とも各各我身のおくれをかへりみて身を引罷在氏眞は又かれらか武勇のつたなきをにくみ御言葉をもかけられす

松原自休手錄云石川主殿頭山陰及豐後ノ國士等越二神崎川一至二中島一武州有馬玄蕃頭等此手ノ軍勢向二天滿一云々

○地侍

室町殿日記云（諸方に被押なる條）偖泉州表の押には福島の城を普請し松永主水正を入をかる淀の大渡には松永主殿介狛稻妻の押へには松永彈正少弼守レ之此西岡山上山崎敵の出口にそれ〳〵に押をかれけりさて松ケ崎の三淵彈正忠をは近郷の地侍に仰付られて不日に誅罰すへきよし御下知をくたされける

赤羽記ニ云高遠ノ城ハ仁科ノ五郎ヲヲカル信玄弟也人質ノ心ニ地士之女房尤モ彈正公ノ御前モ城內ヱ取込ル云々」

增補筒井家記云伊賀守定次ヨリ吉村小助ヲ爲二使者一獅賴始終ヲ記シ大坂ヘ注進アレハ秀吉公ノ命ニ曰伊賀國ハ地侍多シテ數度國守ノ命ニ不レ從往シ信長公ノ時ニモ一揆强起セシヲ中將信雄馳向ヒ寄テ却テ打負柘植三郎左衛門等數十人討死セシ云々

淸正記公小西攝津守行長領分天草郡の地侍志岐林專天草伊豆守小西下知にしたかわす

關岡家始末云關岡ノ屋形ハ上野ト名張トノ境目ナリ伊賀ノ國ノ中ニテ多藝ニ近シ元祖大館左馬助源氏明ノ末孫ナレ共御一門衆トテ與力ナカラ賞翫ノ家也人數千五百人ノ大將トハ云トモ名張阿賀郡ノ諸士モ關岡ニ從フ近江甲賀郡ノ地侍與力スルモノ多ケレハ三千人ノ大將トモ云フヘキナリ

關八州古戰記云（萬城頼春上總國發城峠合戰條）長南長北ノ武田カ勢此時ヲ得テ打出スル事有ヌヘケレハ前途ヲ遮テ押ヘヨトテ鶴見

平四郎山中甲斐守ニ地侍郷民等ヲ馳集メテ都合六七百人押向ケ鐵道ハ侍百五十騎輕卒雜兵八百人引卒シテ保良坂ニ馳出陣ヲ取レリ

新田老談記云 天正二年三月九日 ニ由良殿モ御入部被レ遊山地ニ渡リ迄御覽被レ成西方寺ヘモ御入被レ成住持ト御對面アリ大藏院ヘハ御使者斗リ也其外地侍不レ殘被ニ召寄一津符子山越ニ好身アル侍 歩弓人ニ至迄 百餘人所ヲ追拂云々

續武家閑談云山岡昇慶法印は三井寺光淨院の住持也後遁俗仕ゆへ其弟を光淨院にすへ置て一窓法印と云其身は八郎左衛門と改め又道阿彌となり關原の役兼て石田等亂を起には妻子下人幷在郷侍共を住し伏見に籠城すへき旨弟光淨院甫庵に申置ゆへ上野中上景國と申合地侍拾人輕卒百人を引卒し道阿彌妻子共伏見に籠りける

松隣夜話云平井ニハ則政公出奔ノ後長尾佐次右衛門忠勤ニ依テ中々恙ナカリケルカ龍若君御乳持ノ一類馬方九里カ非道ノ仕配ニ依テ佐次右衛門腹ヲ居兼翌年正月在所ヘ引込其後ハ通路絶ケルニ依テ守護ノ地侍モ段々分散致シ僅ニ殘留者三十餘人上下四五百人ニ不レ過

又云春日山蓮華法院ニテ近所ノ侍數輩振廻申サレケル時一ノ座上ハ侍大將柴田内膳其次ハ長尾小四郎三番ヨリ感狀ヲ以テ座ヲモ定メル地侍ナレハ森出雲守トテ年齡六十餘ニテ感狀ヲ廿三マテ取テ持タル覺ノ侍ヲ大將ノ次ニ居ル

東遷基業云神君これに命せられ當所とても此騷動の節なれは油斷すへきにあらす宿陣の場を見たてよと有ける故向島の造興寺とて道場あり此地四方に河水を帶て究竟の陣城なりなれは嘉兵衛これを見たて潛に御止宿となしけり住侍の僧德元を召出され上方筋の說を問せ給へは朽木信濃守は朝倉六角に與して朽木谷を指口口さたるかし今津筋は多羅尾四郎太夫日詰淨泉なと云地士の一揆を起し道を取切たりと風說いたし候と申けれは汝脇道の郷導せよと仰られけれは德元先に立て根來谷に分入針畑を越て鞍馬山へ懸り京都へ着せ給ひ彼僧には引出物贈て歸されけり

○地下侍

關東兵亂記云 加島合戰之條 甲州晴信出勢シテ富士ノ大宮通リセコヒンナアツハラヲ通リテ富士河ノ端タ賀島ノ柳島ト云處ニ加藤下野ト云地下侍ノ屋布ヲ陣屋ニ用

甲陽軍鑑末書云晴信カツニノリ當方ヘ働早苗麥作植田毛作ノ頃アラハ後ハ地下侍共ニ困窮ニ及ヘシ所詮武田ノ領分ヲ燒拂模樣ニヨリ海尻海野口ヲ堅ムル小山田小宮山ヲ攻テ城ヲアケサスルカ腹ヲキラスヘシ云々

板坂卜齋慶長記云慶長五年七月上田ヘ安房守殿歸着以後三日四日五日に家中の侍共參着之由犬伏より昼夜急沼田へもよせられすして馬もつゝき申間敷と尋候へは沼田は普代の地なれは地下人ハ此時と馳走申候地下侍人馬を揃へ沼田より上田まて送りとゝけ申なり

○田舍侍

吾妻鏡云建暦二年六月七日辛巳於ニ御所侍所一宿直田舍侍起ニ鬪亂一即時死者二人及傷者二人也鎌倉中皷騷御家人等馳參佐々木五郎搦ニ進之一和田左衛門尉卒ニ數輩子孫僕從等一令ニ參入一搜ニ求與黨之輩一糺ニ斷其罪違一也

太平記云 北山殿謀叛條 故相模入道ノ舍弟四郎左近大夫入道ハ元弘ノ鎌倉合戰之時自害シタル眞似ヲシテ潛ニ鎌倉ヲ落テ暫ハ奥州ニ在ケルカ人ニ見知レシカ爲ニ遁俗シテ京都ニ上西園寺殿ヲ憑奉テ田舍侍ノ始メテ召仕ハルゝ體ニテソ居タリケル云々

○郷士

越後軍記云 信州小縣對陣條 先備ハ甘糟近江守安田上總介春日並ニ千本鎗ノ强卒ナリ千本鎗トハ越後ノ郷士ナリ

○侍名字者

花營三代記云康暦二年五月廿八日(上略)秋叛治郎左衛門尉其侍名字二百餘人切捨不レ知ニ其數一又去十日於ニ長門國栄山合戰一杉智淨入道其外侍名字廿七人討死之由 武田注進狀後日到來云々

官地論云城中政親宜ク註ニ今日之討死交名一頼丹後守同八郎次郎(中略)同明智阿彌陀佛越前桒滿江一之本兄弟此人々爲レ先侍名字者五百餘人其外雜兵不レ知レ數被レ討

籾井日記云 氷上宗貞合戰條 山名播磨守ヘ平手伊賀守ヲ始トシテ旗頭侍司ノ印十八大剛ノ男トモノ首四十二名字ノ侍二百餘ヲ所務ス

武家名目抄稿第五十册

塙檢校保己一編

稱呼部十中

○雜色

保元物語云こんとのかせんにきよもりははりまのかみになりたんなるか伯父へいまのすけた、まさをやこ五人申たすかりたるときこえよしともはさまのかみになりたんなれはいかならんくんこうけんしやうにも申かへてち、一人かいのちをはなとかたすけさるへきわれたにもたすかりなは殿はらをもたすくる道もあらんすれはいひ出んとおもふはいかにとの給ふ八郎これをき、ていろをうしないてをともせすそのほかのこともはかやうにつきそひたてまつるもわか身のうへはさてをきぬた、御事のこゝろくるしさをこそ存候へともかくも御事のたすからせ給はん事こそよく候はめた、御意にこそと申けれはさらんとてさうしき花さわをし、やとしてよしともにいはんするやうはわか身ちうひやうをうけてしゆけ入道すいそきむかひにこしをたひ候へそれへゆかんするなりとてつかはしけり

平家物語云（西光被レ斬條）入道されはこそ行綱はまことを申たれ此事告しらせすは淨海安穩にてやはあるへきとて筑後守貞能飛驒守景家をめして當家傾ふとする謀叛のともからともこそ京中にみち〳〵たんなれ一々に搦捕へきよし下知せらる仍二百餘騎三百餘騎あそこ爰に押寄々々からめ取入道相國先雜色をもつて中御門烏丸の新大納言の宿所へきつとたちより給へ申合すへき事の候と宣遣されたりけれは云々

源平盛衰記云（土佐房上洛條）伊與守ニハ二位家ヨリアマタノ人ヲ付タリケル内安達新三郎清經ト云雜色アリ下臈ナレトモ能者ナリ旗差ニセヨトテ被レ付タリケレトモ實ニハ九郎冠者謀叛ヲモ發シ頼朝ヲ背カハ急キ告ヨトノ撿見ノ使ナリケレハ土佐坊カ被レ討ヲミテ清經其曉ニ鎌倉ヘ逃下ル云々

敦盛草紙云あつもりはめい大將くまかへいしくも仕たりこのたひのけしやうには武藏の國なか井の庄をとらするそいそきまかりくたれとの御諚なり熊谷か郎等とも所知いりせんとよろこふところにくまかへその御返事にをよはす□□□のひまよりもかくはかり人となり□□□はやとそおもふさらすはつゐにすみそめの袖かやうにゑいし御まへをまかりたち何としてあつもりの御しかいをけんしさうひやうのこまのひつめのかよふ處にすてをき申へきそをくり申てあれはとてよもさいくわにはをこなはれしいや〳〵をくり申さはやとおもひしほやのはたにくたり小船一そうこしらへさつしき二人さふらひ一人あひそへ狀をかきした、め八島のいそへそをくられける

吾妻鏡云治承四年八月十七日定綱高綱者相具案内者（北條殿雜色宇源藤太）廻信遠宅後云々十月十六日今夜頼朝至于相模國府六所營於此所被奉寄當國早河庄於箱根權現其御下文相副御自筆御消息差雜色鶴太郎被遣別當行實之許

又云治承四年八月十七日丁酉戌尅藤九郎盛長僮僕於釜殿生擒兼隆雜色男但被仰也此男日來嫁殿内下女之間夜々參入而今夜勇士等群集殿中之儀不相似先々形勢定加推量歟之由依有御思慮如此云々

又云文治元年四月廿九日壬申雜色吉枝爲御使赴西海是所被遣御書於田代冠者信綱也

又云建久元年二月五日己丑被遣雜色眞近常清利定等於奥州是於三方依可遂合戰爲其撿見也云々

又云建久三年二月十三日丙辰鶴岳別當法眼被上洛爲園城寺三院入堂云々幕下被遣丁寧餞物剩爲長途兵士被相副雜色八人云々八月廿二日壬戌雜色成里者有多年之功仍御氣色快然頗與御家人無勝劣而去夏頃他界殊御歎息被尋其子孫云々

判官物語云（いつみの冠者討るゝ條）きうしうにはきくちはらたかすきおかたいそきまいるへきよしを仰下されてさつしきするかの二郎に給はりぬ夜を日について京にのほりつくしへ下らんとすいかなる人かいひける此よし六はら殿へ聞へてするかを召しとりてしほめ廿四人さしそへてくはんとうへ下されぬ

太平記云（主上上皇御沈落之條）敵中吉カ胸板ノ上ニ乘懸テ鬢ノ髮ヲ掴テ頸ヲ掻ントシケル處ニ中吉刀加ヘニ敵ノ小腕ヲ丁ト掬スクメテ暫聞玉ヘ可申事アリ御邊今ハ我ヲナ恐玉ヒソ刀アラハコソ刎返シテ勝負ヲモセメ又續ク御方ナケレハ落重テ我ヲ助ル人モアラシサレハ御邊ノ手ニ懸テ頸ヲ取テ被出タリトモ曾實檢ニモ及マシ高名ニモ成マシ我ハ六波羅殿ノ御雜色ニ六郎太郎ト云者ニテ候ヘハ見知リヌ人モ候マシ無用ノ下部ノ首取テ罪ヲ作リ玉ハンヨリ我命ヲ助テタヒ候ヘ云々

曾我物語云（かまくら殿はこれ御さんけいの條）をよそちうけんさつしきにいたるまてけしきにいろをつくすこちんけいこのふしはちうをよろひゆみやをたいするすいひやうはしやうけにつかひさうのたちはき二きやうにならひをんてうとかけの人ゆんてめてにあひならふ御むかひのれいしんはきかくをとゝのへられうのたもとをひるかへす

又云（あさまの御かりの條）すけつねかやかたへそしのひ入ふうんのきはめにやおりふしにつたの三郎きやくしんにてわかたうあまたたちへたてむまみてにいにたちたりしかやとのうちあやしゝとみいれたちのけはあしくしてこれは御せんへまいり候さつしきなりかへりてまいらんといふさまにてあしはやにこそいてにけれ

長享元年江州御動座在陣衆着到記云御旗差の進士美濃守參る其次に雜色之男其十人斗なしうちゑほしに黑き布直垂云々

鹿苑院殿御元服記云石清水八幡宮御社參（中略）御力者十三人牛飼五人雜色九人

伊勢守貞親以來傳書云雜色と申は中間よりはさかり候又厩者よりはあかり候馬上時こそつほの役に候亦公家方には中間を雜色と被ㇾ仰候哉武家は此分にて候也

澤瀉阿彌覺書云正月朔日御出仕御うら打なり御小袖御拜領織物也御力者長刀不ㇾ持御雜色御弓うつほ等不ㇾ着也

豐記抄云小者餘多申候へ心得同前事候但四五人迄不ㇾ苦候六人過ては有間敷候當時大勢不ㇾ可ㇾ然候雜色弓うつほ付候中間よりは下厩者よりは上り候公家方には中間は雜色と被ㇾ仰候式裝の時は役者餘多候間相替事候主人うつほ御付候へは雜色所に弓袋等有ㇾ之中間餘多も意得同前」

加越國諍記云（於樂庄大酒濱大追物條）又良暫アリテ紅往紫來歩途セハク花鬘雲鬢ソラ香シク匂羅綾ノ袂ヲ重ネ綯ノ袖風ニ飄テ寶ニ美敷シテ奇大吠花ニ聲紅排ノ浦響ク風情屋形ノ出御ト見ヘテ弓取太刀帶金銀ヲ鏤メ諸ノ紋ヲ盡シテ着タル雜色小者二百餘人馬ノ前後ニ隨テ二行ニ歩ミ侍小性外樣ノ人々綺羅地ヲ照シ光色天ニ輝ク

蜷川親俊記云天文七年六月廿四日丙寅若州へ御雜色久兵衛名田庄栗屋右京亮かたへ被ㇾ遣

大館常興記云天文九年二月六日爲ニ御使一祐阿來入けるたう人近衛殿へ入間御雜色なと被ㇾ遣候處入江殿へにけ入仕あまし、所開閤被官よく仕候て仕とめ其身もきすをかうふり候間御ほうひあるへき事かへりていかゝたるへく候哉云々

又云天文十年十月廿五日宮內卿殿へ以ニ書狀一宮川御公用之事內々尋申也當年分一日二千疋爲ㇾ參候外いまたにて候間當月中御待候てもしいまたにて候はゝ來月御雜色を可ㇾ有ニ御下一候由御返事也

板坂卜齋慶長記云安國寺は毛利宰相殿騎馬とひとつに十六日にすりはりをかさをかふりくろき羽織にて通し候由沙汰あり其後十日斗も行かたしれさり京なる雜色とも御奉公の手たてに都ちかき古所方々なにとなく尋廻り候に鞍馬寺の月性院に忍ひていられけるか尋廻り候を聞てのり物にのり京をさしていてられ候よし

增補家忠日記云慶長八年二月廿五日大神君將軍宣下ノ拜賀行列四番雜色

東遷基業云板倉伊賀守勝重去頃より京中に觸て他所より來る者食儀し訴人する者は金銀を與ふへしと定めける故國村彦左衞門と云者訴へしかあやしき他所の者來るよしを申により早速雜色を遣して逐一に搦捕て拷問しけれは皆白狀して大御所去十八日に御出馬あるへしと聞えしかは其御跡にて洛中を燒拂の支度なりしに御出馬御延引故かく露見しぬと也

松隣夜話云上杉古參之侍上村主水子息三五郎ト云者アリ去年瀨田荳ノ戰場ニテ後レヲ取リ其難ヲ遁ン爲味方ニアル雜色童ノ首ヲ斬リ實檢ニ備タリナト樣々ノ惡說ヲ蒙リ則政公御前ヲ損シ於ニ殿中一討捨ニ遇リ父主水大ニ憤リコハ如何ニ愚息三五郎去年兩度ノ出陣ニ鎧武者ノ印三ッ迄自ラ討テ得ㇾ之上杉武士ノ事柄ニハ拔群ノ働キ重賞ニ可ㇾ預ナト郎從トモハ常々申ナル夫ヲコソナカラメ結句未練ヲシタリトテ打捨ニセラル、條不ㇾ及ニ言語一

○若黨

長門本平家物語云（日吉神輿入洛條）つゝく源太校省きをうとなふとて一人たう千のはやりおのわかとう三百餘人あひくして北のちんのからもんをそかためける

又云小松の內大臣しけもり公にはかの事なりけれは直衣に矢おひてこかねつくりのたちはきてれんせんあしけのむまのふとくたくましきに黃ふくりんのくらをきて乘て伊賀伊勢兩國のわかとうとも三千よきあひくして東おもてのさゝもんのちんをかためたり

曾我物語云（いとうしぬる條）扨もいとうむしやはこれをは夢にもしらて時ならぬおくの、かりしてあそはんとていてをそろへせこをもよほしわかたうあまたあひくしていつの輿へそ入にける

太平記云（細貝回忠條）土岐十郎久ク戰テハ中々生捕ラレントヤ思ケン本ノ寢所ヘ走歸テ腹十文字ニカキ切テ北枕ニコソ臥タリケル中ノ間ニ寢タリケル若黨トモ、思々ニ討死シテ近ル、者一人モ無リケリ

又云（新田義貞賜綸旨條）船田已カ若黨ヲ三十餘人野伏ノ質ニ出立セテ夜中ニ葛城峯ヱ上セ我身ハ落行勢ノ眞似ヲシテ朝マタキノ霧隱ニ追ッ返ッ半時計同士軍ヲソシタリケル

又云（赤橋相模守自害條）本間山城左衛門若黨中間百餘人是ヲ最後ト出立テ極樂寺坂ヘ〻向ヒケル

又云（細貝回忠條）討手ノ大將ハ誰ト申ス人ノ向ハレテ候ヤラン近付テ箭一請ヲ御覽候ヘト云儘ニ十二束三伏忘ル、計引シホリテ切テ放ッ眞前ニ進レタル狩野下野前司カ若黨ニ衣摺助房カ冑ノマツコウ鉢付ノ板マテ矢先白ク射通シテ馬ヨリ倒ニ射落ス

又云（任遺勅被成綸旨條）此兩三年越前ノ城三十箇所相交テ合戰止ム日ナシ中ニモ湊ノ城トテ北陸道七ケ國ノ勢共カ終ニ攻落サ、リシ城ハ義助ノ若黨畑六郎左衛門時能カ纔十三人ニテ籠タリシ平城也

又云（箱根竹下合戰條）式部大輔兼治ハ父ノ義助ノ勢ノ中ヘット懸入リ樣ニ若黨ニキット目クハセセラレケレハ義治ノ郎黨ヨセ合テッ、イテ返シッル二騎ノ兵ヲ切落シ首ヲ取テソ指舉タル

又云（主上上皇御沈落條）中吉彌八是ヲ聞テ惡イ奴原カ振舞哉イテホシカル物具トラセント云儘ニ若黨六騎馬ノ鼻ヲ雙ヘテ懸タリケルニ欲心熾盛ノ野伏共六騎ノ兵ニ被ニ懸立ニテ蛛ノ子ヲ散スカ如ク四方八方ヘソ逃散ケル

又云（大森彦七條）彦七元來シタ、カナル者ナレハムット引組テ深田ノ中ヘ轉落テ盛長化物組留タリヨシヤ者トモト呼ハリケル聲ニ付テ跡ニサカリタル者共太刀長刀ノ鞘ヲ放シ走寄テ是ヲ見レハ化物ハ書消樣ニ失ニケリ彦七ハ若黨中間トモニ引起サレタレトモ忙然トシテ人心地モナケレハ是直事ニアラストテ其夜ノ猿樂ハ止ニケリ

太平記天正本云（住吉合戰條）山名伊豆守持氏モ自相當ル事手繁カリケレハ痛手數多所負ハレケルヲ高山小林猪野七郎ヲ始トシテ義ニ依テ命ヲ輕スル譜代舊恩ノ若黨共大將ノ前ニ立隱レテ血ヲ拭ヒ猶預ス

又云（追罰直義宣旨御使條）此時道譽モ遁レントヤ思ヒケン社ノ前ニテ已ニ腹ヲ切ラントシ給ヒケルヲ一家ノ氏族佐々木加治豐前二郎左衛門尉譜代ノ若黨渡邊黨ニ志田二郎左衛門尉榮重只二騎馬ノ鼻ヲ雙ヘテ我等打死仕テ後自害候ヘト云モハテス續ク敵ニ馳合テ二人一所ニテ討死シケル

又云（京軍條）足利修理太夫高經ト畠山尾張守義深ト相戰此陣ノ軍强クシテ將軍方ノ兵共一同ニ颯ト引退高經ノ若黨ニ朝倉遠江守高景嫡子孫三郎氏景百餘騎ニテ逃ル敵ヲ追懸テ餘サシト攻タリケル

伯耆之卷云同廿八日午尅計に奈和の庄の館へ着案内を云に不ノ及内へ走入遙なる道を走けれは息もつきあへさりけり是をみてあはや子細有とて侍所に候ける若黨等走寄て左右の手を引はつて何者そと問けれは成田か申けるは人傳には申間敷事にて候也と申けるを折節長高此由を物越に見て何とかおもひ給けむ走出皆人を退て門の脇に經所の有ける處に入て事の樣を尋給けれは成田申けるは隱岐の帝是に御着候か御方に可ノ有ニ御頼一との御使に參して候云々

又云なと今迄御輿は進せぬとそ宣けれは基長被ノ申けるは定て此湊と存知候はて濱の津へ參ぬと覺候時刻の移候に龍の御馬をや可ノ進候覽と被ノ申けれは實にもとて長高か乘たりける黑栗毛なる馬を進せけり濱津と申は奈和庄の湊也長高は乘替に乘打少將殿をは若黨共の馬に乘進せて急けや〳〵とて船上山へそ御幸なし進せける

又云長高宣けるは不ノ廻ニ時尅一急御迎に參れとて物具ひしひしとして馬に打乘て馳參す長高をはしめとして二男孫三郎基長三男乙童丸長年舍弟鬼五郎助高甥に六郎太郎義氏從弟小太郎信貞同次郎三郎實行聟に彦次郎忠秀島屋彦七宗家内河彦三郎義眞備中守義直此外若黨等都合二十餘騎一族不ノ及ニ相催一折節在合輩大坂の湊へ鞭を揭て馳參一異制庭訓往來云乍ノ畏若黨冠者原馬物具之闕如進退無ノ極候云々

後愚昧記云應安四年四月一日知惠光院邊騷動相尋之處土佐國佐川（假名貳名不ノ知ノ之居）ニ住件寺中一而執事爲ニ四國管領一之間仰下可ノ發ニ向南方一之由上之處因ニ舞之間一爲ニ誅伐一差遣執事被官軍勢并侍所軍勢一之所不ノ能ノ討ニ取之一佐川逃脫了不ノ知ニ行方一然而令ノ啓ニ土藏以下一扶求之間被ノ騷無極者也打ニ入寺中一之處佐川若黨中間等相并四人（此内一人佐川規頼只今自ニ土州一上洛云々）切腹了此内一人一兩日存生然而終以死去勇敢之至可ノ感ノ之後聞件佐川子息男爲ニ宮方一在ニ敵方一仍執事元來以ニ便宜一可ニ追討一之所存也云々

花營三代記云康暦二年七月廿日橋本以下賊首和泉國守護山名奥州執ニ進之一去十七日合戰討取之内爲ノ宗之首十一京着之頸注文橋本民部大輔捕手高山尾張守若黨上田次郎

左衞門尉云々

明德記云小林片股切落サレ弓手ノ手ヲ押ヘテハ暫ク太刀ニテ合セケルカ次第ニヨハル體ニ見エ太刀ヲ持ナカラ伏ケレハ大内カ若黨走寄テ差殺サントセシ處ヲ太刀ヲハカラリト投捨テ草摺取テ引寄テ差違テハ二人ナカラ同枕ニ死タリケリ

應永記云大内カ若黨紀伊國住人富田ト云フ者此二三日程ニ管領ノ御手ニ降參シタリケルカ申ケルハ爰ニ眞先ニ進ンテ見ヘ候コソ大將ニテ候ヘ云々

嘉吉物語云時刻うつしてはとて彦二郎殿左馬助殿みな御きせなかをぬきおき給ひておもての廣椽にしき皮しかせ大門ひらきうつてむかひなは腹きらんと仰られて御一門一々ならひに若黨百三十六人ひとつ座しきになをりて御曹司助とのをはしめとして我先に腹を切らんと思ひ切たるいきほひ云々

建内記云十四日庚戌法明寺祐明庵入來續吉川上庄代官職也赤松伊豆入道内若黨可二預候一由口狀之來納可レ存二沙汰一云々

東寺執行日記云文安二年四月四日赤松播州父子若黨百二十四人頸高辻河原縣之打手ハ赤松有馬也近日稻荷祭之間高辻懸之也

新撰長祿寛正記云討死ノ人々ハ大將河内守國助弟左京亮譽田三河守弟肥前守(中略)仙波二郎長尾孫太郎若黨ニハ中村與五郎高柳野崎與五郎遊佐カ家來ニハ岡部野太郎鰐左衞門次郎廣瀨高屋原父子中村孫七郎布施藤次郎惣テ四十二人

季瓊日錄云長享三年三月廿五日自二玄蕃頭殿一以二若黨一見レ申昨日之謝對面返答云々

多聞院日記云永正三年八月廿四日於二豐井一討死衆侍衆斗荒々注レ之豐井殿鶴同辰巳同一川同中觀(中略)同若黨庄屋戊亥小林井戸若黨三人豐田(下略)

快元僧都記云天文元年十月十七日卯刻自二玉繩一氏綱社參侍十四五人若黨廿人計被二召連一

東亂記云箱根早川尻合戰條只今ヲ限ト戰ケレトモ目ニ餘ル程ノ大勢ナレハ憲直ノ賴キツタル肥田勘解由左衞門蒲田彌次郎足立萩窪ヲ始トシ一族若黨悉討死憲直海老名終ニ討負テ散散ニ成テ落行ケリ

豫章記云大空城ヘ正岡太郎左衞門尉忍ヲ入テ打落ス同十三日夜完草入道父子若黨六人自害ス

元親百ケ條云又若黨又小者之事付直之者内外共相交候事堅停止之事

鴉鷺物語云越後守うちしにをこゝろかけしかは精進して晝夜經をよむ若黨等に云くわれうちしにせは首を敵にとらるゝとも身の毛をはとりあつめていかならん御僧の蒲團にもたてまつれ無上の妙道に因て出離に進なんといひをきしこそあはれなれ

氏鄕記云小田原軍條河井拾介カ若黨小勘ト云フ者敵一人生捕テキテ參ル是ハ岩槻十郎カ郎等三島ノ文右衞門ト云也

一柳譜云因幡國鳥取ノ城ヘ筑前樣御取掛被レ成候テ城主畑作太夫ヲ御討可レ被レ成候トテ仕寄竹タハ被レ爲レ付候(中略)市助樣備ヨリ四郎右衞門樣同若黨小四郎四郎右衞門樣ハ鑓ヲ御持被レ成候小四郎ハ長太刀ニテ十八九人出申候

續撰清正記云本書に有木村又藏は元步行の者にて有けるに清正熊本にて城廻り有ける時の供に直の者の中へ又内の供の者とも猥に入ましへさるためのおさへに又藏をみつけをかれけるに小身者の草履取中間なと自然に交りたるをは見ぬ體にして或時新美權右衞門と云出頭人の若黨直の者の中へ入たるをとかめけるに此者主の出頭を笠にきて常に萬事に奢ける故口答しけるをあやまたす討て捨則清正前へ行直に件の樣子申たり清正聞給ひて宜ふは何樣此者は丈夫なる者也

秀賴記云上田宗虎か手先へも敵はら〳〵に懸ける宗虎一人を鑓付て若黨首を取けり然處に敵一人宗虎に向て切てかゝる宗虎むつと組たりけれは二人倒れて宗虎下に成けるを若黨上なる敵を引よせて首かき切て宗虎難なく立あかる

安土日記云天正七年十二月十三日三百廿四人是ハ暦々ノ女房衆ヘ付置若黨也

奥羽永慶軍記云青木取質條人苅田松之城主青木修理ト云者米澤ニ降シ候ハント内通スサレトモ大内備前守武略ニ長シタル兵ニテ米澤ヲ背キシ以來田村境四本松領ノ城主ヨリ人質ヲ取テ置シ事ナレハ青木修理モ舍弟新八郎嫡子掃部人質トシテ備前守ニ捕ハレヌレハ如何ハセント案煩ヒケルカ才覺ヲ以テ人質ノ代ハリヲ取ント思案ヲ運シケルハ備前守カ家臣ノ子中澤九郎四郎大内新八郎大河内次郎吉トテ三人ノ若者ノ有ケルヲ人質ニ取テ米澤ノ味方トナランニ殺害ス事ナルヘカラスト思ヒケレハ先カノ三人カ方ヘ使ヲ以テ云送リケルヤウハ今程苅田松近邊小鷹狩最中ナラハ速ニ此地ニ來リ狩シテ慰シ給ヘカシト云遣ケリ(中

略）修理三人之若者ニ向テ云ケルハ迚長キ秋ノ夜ニムナシク寢ンモ興ナケレハイサ酒宴シテ遊ハント銚子瓦器取出シ終夜酒ヲソスヽメケル元來三人ノ者未二十ニモ足ラヌ若者トモナレハ謀トハ夢ニモ知ラス高歌一曲シテ夜ノ更ル迄ソ飲タリケル醉テ後其儘其座ニ倒臥前後モ不レ辨痛寢入シ處ニ修理時分ハヨシト究竟ノ武士十五人ニ仰テ三人ノ若者ヲ搦取ソノ外三人ノ若者ニ副付來ル若黨中間ニ至ル迄皆悉クカラメケル

小畠景憲家譜云景憲敵討之者四度ハ慶長五年正月和泉ノ堺にて二階之上ニ居ル者ヲ仕ル是ハ大久保石見内五味彌兵衛若黨也

續武家閑談云田中筑後守吉政ハ初久兵衛と云江州の民間にありしか或時畑の畔に休み居たりし所を或時若黨五六人召れ鑓を持せて通りけるか熟々と見て侍ならんものは人論にてなしと頓悟して百姓を止て侍と成若黨分にて宮部善祥坊に仕ふ

○用次

上臈名事云下臈には最末のわかとう其夜におゐて用次成たくひのむすめ成へし

○僮僕

吾妻鏡云治承四年八月十七日丁酉戌尅藤九郎盛長僮僕於二釜殿一生二虜兼隆雜色男一但被レ仰也此男日頃嫁二殿内下女一之間夜々參入而今夜勇士等群二集殿中一之儀不レ相二似先々形勢一定加二推量一歟之由依レ有二御思慮一如レ此云々

又云文治五年九月九日丙寅今日二品猶逗二留蜂社一而其近邊有レ寺曰二高水寺一（中略）御野宿之間御家人等僮僕多以亂入當時放二取金堂壁板十三枚一畢云々

又云元久元年十一月二十日戊寅故遠江左馬助等僕僮自二京都一歸參去六日葬二東山邊一云々又同四日於二武藏前司朝政六角東洞院第一酒宴之間亭主與二畠山六郎一有二諍論之儀一然而會合之輩依レ宥レ之無爲退散說話之由今日風聞云

○僕從

吾妻鏡云治承四年九月十三日壬戌北風頻扇之間成亂廻二僕從等於館後一令二放火一家屋燒亡目代爲レ遁二火難一已忘二防戰一此間亂頼獲二其首一

又云文治五年九月九日丙寅今日二品猶逗二留蜂社一而其近邊有レ寺曰二高水寺一（中略）御野宿之間御家人等僮僕多以亂入當寺放二取金堂壁板十三枚一畢冥慮尤難レ測早可二糺明一者二品殊驚歎給則可二相尋一之旨召二仰景時一景時尋糺之處宇佐美平治僕從所レ爲也仍召二進之一云々

又云承元二年七月十九日丙辰鎌倉中騷動是葛西十郎爲二僕從一依レ被二殺害一一族等馳集之故也云々

○中間

源平盛衰記云（丹波少將上洛條）宰相ハ又少將モ今ハ登リ玉フランニイマヽテヲソキハ何ニトヲハスルヤラン心モトナシトテ中間雜色アマタ江口神崎室兵庫邊迄下遣シタリ

吾妻鏡云弘長三年八月九日丙辰將軍家御上洛事有二其沙汰一來十月三日御進發必然之間路次供奉人已下事被レ定レ之云々御路次之間方々奉行人事一御出奉行和泉前司行方武藤少卿景賴（中略）一搭勤侍小野寺左近大夫入道光連一御中間信濃判官時清一御力者佐渡大夫判官基隆云々

太平記云（芳賀兵衛入道軍條）芳賀伊賀守御方ノ勢ヲ見巡シテ八郎カミヘヌハ討レタルヤラント親ノ身ナレハ心元ナケニ申ケルヲ馬ノ前ナル中間放レ馬ノ數百疋走散タル中ニ毛色鞍具足ヲ委ク見テ候ヘハ黑鴉毛ナル馬ニ逆翡ノ鞦懸タルハ慥ニ八郎殿召サレタリツル御馬ニテ候早討レサセ給ヒヌトコソ覺ヘ候ヘト申云々

又云（吉野殿與相公羽林御和睦條）讃岐守乍レ寢ラ二人ノ敵ノ諸膝薙テ切居ヘ起揚ラントスル處ヲ和田カ中間走懸テ鑓ノ柄ヲ取延テ喉吭ヲ突テ突倒ス

又云（八幡合戰條）相模守カ郎從ニ關左近將監ト云ケル兵士岐カ脇ヨリツト走拔テ和田五郎ニ打テ蒐ル和田カ中間是ヲ見テ小松ノ蔭ヨリ走出テ近々ト攻寄テ十二束三伏晉堅テ放ツ矢關將監ガカラドウヲクサメドホシニ射拔レテ小膝ヲツイテソ臥タルケル惡五郎走寄テ引起サントシケル處ヲ又和田カ中間二ノ矢ヲ番フテ惡五郎カ脇立ノツホノ板クツ卷セメテソ射コウダル

又云（鹽田父子自害條）重光ハ年來ト云重恩ト云當時遺言旁難レ遁レハ軈テ腹モ切ランスラント思タレハサハナクテ主ニ人ノ鎧太刀刀剝家中ノ財寶ノ中間下部ニ取持セテ圓覺寺ノ藏主寮ニソ隱レ居タリケル

又云（鹽治判官謀死條）高貞一日モ身ヲ隱ス可キ所無レハ佐々布山ニ取上テ一軍セント馬ヲ早メテ行ケル處ニ丹波路ヨリ落ケル若黨ノ中間壹人走付テ是ハ誰カ爲ニ御命ヲハ惜マレテ城ニ楯籠ラントハ被二思食一候也御臺御供申ツル人々ハ播磨ノ陰山ト申所ニテ敵ニ追ツカレテ候ツル間御臺ヲモ公達ヲモ皆差殺シ進ンテ一人モ不レ殘腹ヲ切テ死テ候也云云

又云（賴貞回忠條）元德元年九月十九日ノ卯ノ刻ニ軍勢雲霞ノ如

ニ六波羅へ走參ル小串三郎左衛門尉範行山本九郎時綱御紋ノ旗ヲ給ハリ討手ノ大將ヲ承テ六條河原へ討出三千餘騎ヲ二手ニ分テ多治見カ宿所錦小路高倉土岐十郎カ宿所三條堀河へ寄ケルカ時綱カクテハ如何樣大事ノ敵ヲ打漏サヌト思ヒケルニヤ大勢ヲハ態ト三條河原ニ留テ時綱只一騎中間貳人長刀持セテ忍ヤカニ土岐カ宿所へ馳セ行キ云々

又云（頓宮心聲條）敦賀ニ朝倉某カ先手ニテ陣ヲ取タルヲ打散セトテ中間ヲ八人差遣サル八人ノ中間共敦賀ノ津へ紛レ入濱面ノ在家十餘箇所ニ火ヲ懸テ関ヲソ擧タリケル

又云（四源院本阿新條）獨召仕フ譜代ノ中間ヲ近ツケ汝ヲ偏ニ憑ムソ佐渡ヘ下テ父之御存命ノ問ニ御顏色ヲモ見進ラセ又見ヘ奉ラント宣ケレハ早御下向候ヘトテ主從忍ヤカニ出立タリ

曾我物語云（かまくら殿はこれ御さんげいの條）をよそちうけんさつしきにいたるまてけしきにいろをつくすこちんけいこのふしはちうをよろひゆみやをたいするすいひやうはしやうけにつかひさうのたちはき二きやうにならひをんてうとかけの人ゆんてめてにあひならふ御むかひのれいしんはきかくをとゝのへられうのたもとをひるかへす

室町殿物語云有時幽齋中間をめされて庭前の雪はくへきよし仰られけれは畏候てはゝきを持てや、さむさうにてゐゐんのはなへさしよるを御覽すれは古き布子のさも見苦しけなるを一つきてはきけるを見給ひありあひにつれなく見えし古布子あかつくはかり憂ものはなし

室町殿日記云（從公方松永彈正に柏稻妻の討手を被仰付條）松永旗下に浮島要右衛門といふ者思ひの名人なりしか搦手の角なる一際ふかき堀をこへ築地をとひこえ中間の長屋へさし入て見ければ四方の防にいて、人一人もなかりけり云々

又云（後洛中訴訟被行德政條）一中間衆の木綿三十五疋買取御役船にて彦三に上せ申可レ有二御受取一候

家中竹馬記云中間を馬の先にやることは我うつほを付させたる下人斗なり

布衣記云馬の時僮僕者事衛府時ハ童一人郎從二人調度懸一人舍人二人中間六人其儀は隨時かいそへの若黨中間跡に上下着召具

古今著聞集云馬助入道關東へ下向の時もかゝる事侍りき中太冠者といふ年頃の中間男に行騰のあまりたりけるを一かけとらせたりけるを此定にはきて今かた片をはわかはくへきものとも思はすあれをはさてたかはき候はんそ

と人にとひたりける云々

鴉煙物語云眞玄はむこにはなり損し川千鳥にははなされす戀しさ心地あしさとにもかくにも牛に皷をおふせたるやうに朦々たん〳〵として侍りされとも世になきならひにてもなし山城守も一旦こそ腹立せめと又みかきて中間の烏にもたせて山城殿かもとにゆきて千鳥とたつねてひそかにわたすへしといひふくめてそつかはしける

賀越闘諍記云（於瑞龍寺大窪濱犬追物條）又メントリ前ヨリ雜人笠ノ端ヲナラヘテ推合動搖スル聲ヲヒタヽ敷聞ヘシカハ何樣是ハ屋形ノ御出カト思所ニ小林新助也先ニ幕目ヲ荷ハセ其次ニ弓取太刀帶四五十人中間小者ハ黑梅ノ肩衣ニ太筋金箔ニテ磨タルヲ着前後左右ノ侍アタリヲ輝カシ云々

伊達日記云太郎左衛門三歳ノ女子ヲ乳人モライ候テ抱出候ヲ則御中間衆亂妨者ノ樣ニウハイ切殺候彼乳人切ラレ候カ闇敷候哉少切候ヲ乳人コロヒ彼娘ヲ下ニ敷臥云々

里見九代記云先方衆一人にて敵一騎二騎五騎三騎不レ討者はなかりけり大膳五十騎斗討給ふ中に廿一騎はくひを取て中間ともにもたせてしつ〳〵と引れけり

續撰清正記云金銀一貫銀錢一貫宛紅の糸指に貫中間か頸にかけ一人宛左右の馬の先へあゆませ道中にて何者成共指當りたる奉公いたしける者に五文十文つゝ當座の褒美に下行し給

武家名目抄稿第五十一冊

塙檢校保己一編

稱呼部十下

○舍人

源平盛衰記云（絹笠合戰條）大介ハ敵寄ナラハ暇アルマシ先靜ナル時能々兵粮ヲツカウヘシトテ酒肴埦飯昇居テ是ヲ勸ムサテ下知シケルコトハ弓シタヽカニ射者ハ家子モ侍モ舍人草苅ニ至ル迄汰置弓ハ一人シテ二挺三張矢ハ四腰五腰モ用意セヨ云々

又云（高綱宇治川渡條）御曹司ハ矢倉ノ上ニテサマサマノ事下知シ給ヒ（中略）大音アケテ下知シ給ヒケルハ二萬五千餘騎ノ勢ノ中ニ海ノ邊リ河ノ耳ニ栖シテ水練ノ輩多カル覽郎等家子舍人雜色マテモカヽル時コソ群ニ拔タル高名ヲモスレ云々

吾妻鏡云建久元年十一月卅日庚辰右大將家毛車幷廂車御裝束（東帶直衣）劔緒隨身舍人以下裝束皆悉自院被調下檢非違使則清爲勅使舍人居飼裝束等右府御沙汰云々

建武式目追加云出仕僕事不可過中間五人舍人二人將又召具力者事一向可停止之

康富記云永享十年八月十五日丁卯公方於善法寺有御出立已刻有御社參是日石清水八幡宮放生會也（中略）路次行列拜見之先榻持次幣持次神馬次召使四人次官掌二人出立同召使各於鳥居北下馬次居飼次舍人（但不分明）御前御外記史云々

○小舍人

吾妻鏡云弘長三年八月九日丙辰將軍家御上洛事有其沙汰御路次間方々奉行人事一朝夕雜色小侍一小舍人侍所一國雜色加賀前司行賴

鎌倉年中行事云正月五日之夜御行始管領御出恒例也公方樣御直垂御紋桐御輿棟立力者昇申也御劔之役御一家御沓役人體不被定其外ノ供奉ハ雖不被觸直垂之出仕アル方ニハ一人モ不殘被參力者雜色朝夕小舍人ハ人數不定御劔モ力者以下人數定事無之御沓之役以下ハ中間五人力者二人厩者兩人何モ烏帽子ヲ可着傘持ハ烏帽子不可着

○小者小人

太平記云（六波羅攻條）先日度々ノ合戰ニ高名シタリト聞ユル陶山備中守河野對馬守ハオハセヌカ出合給ヘ打物シテ人ニ見物セサセント云儘ニ手繩カイクリ馬ニ白沫カマセテ控ヘタリ陶山ハ東寺ノ軍强シトテ俄ニ八條ヘ向ヒタリケレハ此陣ニハナシ河野對馬守計一陣ニ進ンテ有ケルカ大高ニ詞ヲ被懸テ元來タマラヌ懸武者ナレハナシカハ少シモタメロウヘキ通治是ニ有ト云儘ニ大高ニ組ント相近クヲ見テ河野對馬守カ猶子ニ七郎通遠トテ今年十六歲ニ成ケル若武者父ヲ討セシトヤ思ヒケン眞前ニ馳塞テ大高ニ押雙ンテムスト組大高河野七郎カ總角ヲ攝ンテ中ニ提ケ己レ程ノ小者ト組テ勝負ハスマシソトテ差ノケテ鎧ノ笠符ヲ見ルニ其文傍折敷ニ三文字ヲ書テ著タリケリ

應仁記云（舟岡山合戰條）爰浦土カ小者一若ト云フ足輕加茂ヨリ紫野ノ正傳寺ノ脇ヨリ總五六十人ニテ舟岡山ノ後ヘマハリケリ

應仁私記云爰ニ人ノ中間小者相語而誇ル凱號ニ足輕徒黨云々

室町殿物語云（好喧嘩徒黨之條）去ほとに高橋はわか打太刀に山内新六小者二人己と三人召つれ道具には十文字筋かねわたしたる八尺棒なとをもたせけり

御供古實云公方樣御こしより御おりの時は時宜によりてこなた衆も御草履をも參候也又御小者參候事も候こなた衆參候時は御小者の持候をとりて參候なり御小者參候ても又こなた衆參候ても不苦候時によるへし然とも御小者參候事可然候こなた衆は只無益の事に候ケ樣の事は時儀によるへし

馬具寸法記附錄云公方樣の御小者は六人に相定候六人より外は有間敷候間御供にては候はねとも小者六人より外は不可然候只二人三人の間可然候

又云就御參內松永彈正少弼久秀より伊勢守貞孝へ被尋申條々事（中略）中間は十五人か廿人斗候事（小者中間共に廿人可然候）」

長祿記云（義就軍兵討死條）中ニモ物ノ哀レナルハ河內守小者一人近付テ汝ハ急キ忍落テ都ニ上只今ノ在樣北之方ニ可語都ヲ出シ時如申定今更嘆キ給不可

勢州軍記云（國司北畠家之條）其領知者先於南伊勢一志飯高飯野多氣渡會五郡其外大和國宇陀郡也凡侍九千人內馬上千五百騎小人六千人合一萬五千之大將也皇家衰微之後者公家之大名此國司一人也

新田由良家傳記云新田衆討死三百五十人手負百四十餘人御歸陣以後相果申候三十八人足輕小者四百餘人死し申候」

文祿清談云（森元春之助醫舌利舌條）大御所尊氏御逝去之時猿澤ノ池水色變シ皆泡ニナルト申候又寶簾院大樹御死去ノ時モ虛空ニ

哀慟之聲一二夜相ツヽキ候是ヲ以テミレハ唯人ニアラサル事便宜ナル哉惣テ人界ノ品ヲ工夫仕ルニ譬ヘハ五重ノ塔ニタトヘテ申サハ國主ハ九輪ノ上ノ寶形ナリ其下ノ重ハ皆御一族又其下ノ重ハ大名高家夫ヨリ一重々々ト皆役人知行相應ニ位モ劣リ威モ輕シ扨下ノ士代三重ハ御中間小人御恩澤ニ預リ渡世スル者共也

土佐國高知北村民家藏文書云（控之條）一又若黨又小者の事付直之者内外共相交候事堅停止之事文祿五年十一月十五日、盛親元親御判

信長記云（義昭公御叛洛條）菅屋九右衛門尉ヲ召テ諸軍勢於二洛中洛外一非義ノ族ナキ樣ニ能々申フレ候ヘ若邪道ナル族聞出見出シ候ハヽ後々マテモ其罪ノカルヘカラサル通申渡シ候ヘト有シカハ奉テ其旨嚴重ニソ申觸ケル斯ル處ニ御小人聊ノ利ヲ小人ト諍論シケルヲ菅屋御使ノ事有テ出京ノ次テ是ヲ見テ何者ソ仔細問テ參レトアリシニ岩越藤藏ト申者ツト參テ雙方引見シテ參ケル何ノ仔細ソト問ハレケルニ然々ノ事候ト商人申御小人其答ニ不レ及ケレハ其儘搦捕テ爾々ノ事候シト申上ケレハイシクモ仕タル物哉トテ彼者ヲ庭前ノ木ニクヽリツケ被レ置ルニ京衆御見舞申シ是ハ何々ノ御事ニ候ヤオソロシウ奉レ存旨アリアリシク澁屋萬左衛門等狂言綺語ニ取繕ヒケレハ昨中於二洛中一法ヲ犯シタル者ヨト仰ラレ藤左衛門尉實ニ昨日左樣ノ事有ツルヨウニ取沙汰候ツレトモ極小ノ事ニテソ有樣ニ申ツルニ御赦免ナサレ候カシトワナ〳〵フルツテ申上ケレハ君子之道ハ譬如二行レ遠必自レ邇譬如二登レ高必自レ卑ト云リサレハ先我中間ノ者トモヨリ堅ク制シテコソ多ノ者モ制セラレメ疾々ト仰ラレケレハ首ハ札木ヲ負テソ居タリケル私意コソナカラメ溫淳ニコソアラメトテ京童ノサヽメキアヘルコト限ナシ

甲陽軍鑑云原美濃か小者ほつせん小幡山城か小者藤右衛門多田淡路小者新六是等は度々の手柄を仕れは結句悴者小者に手柄物あらん

○草苅

源平盛衰記云（絹笠合戰條）大介ハ敵寄ルナラハ暇アルマシ先ツ靜ナル時能々兵粮ヲツカウヘシトテ酒肴垸飯昇キ居テ之ヲ勸ム扨下知シケルコトハ弓シタタカニ射者ハ家子モ侍モ舍人草苅ニ至ル迄汰置弓ハ一人ニシテ二挺三張矢ハ四腰五腰モ用意セヨ弓ヱ射サラム者ハ七八人モ十人モ又四五人モ徒黨シテ好ミ々々ノ杖共ヲ支度セヨ

○足輕

保元物語云（正清向爲朝陣條）あしかるとも四五十人を馬のくちせんのていをうかゝひ候へしとて三十きはかりをあひくしてさうにとりつかせてまさきにまつまかりむかひ候て事門ちかくおしよせて云々

長門本平家物語云（大打合戰條）ある時城のうちより平家のかたへかふら矢一ゐかけたりあやしとおもひてとりて見れは中にむすひたるふみありこれをとりてみれは城のうちへよすへきやうをそ書たりける河は山かはをせきあけて候へは河尻へあしかるをまはしてしからみを切おとし候へは水は程なくおち候へし

源平盛衰記云（平三景時歌の條）眞鍋の五郎は矢倉ヨリ下リ河原兄弟二人カ首ヲ手鉾ニ貫キ木戸ノ上ニ昇リ高ク捧テ源氏ノ殿原是ヲミヨ進ム敵ヲハカクコソ取レツヽケ〳〵トマネキタリ梶原是ヲキヽテ口惜キ人共ヤツヽクモノカナケレハコソ兄弟二人ハ討レタレトテ五百餘騎ニテ押寄ツヽ足輕四五十人ニ腹巻キセ手楯ツカセテ云々

太平記云（吉野城軍條）東條之大將金澤右馬助殿ハ既ニ赤阪ノ城ヲ攻落シテ金剛山ヘ被レ向タリト聞ユ當山ノ事我等案内者タルニ依テ一方ヲ承テ向ヒタル甲斐モナク責落サテ數日ヲ費スコソ遺恨ナレ倩事ノ樣ヲ案スルニ此城ヲ大手ヨリ攻ハ人ノミ被レ討テ落ヌ事有難シ推量スルニ城ノ後ノ山金峰山ニハ峻ヲ憑テ敵サマテ勢ヲ置タル事アラシト覺ユルソ物馴タランスル足輕ノ兵百五十人スクツテ步立ニナシ夜ニ紛レテ金峰山ヨリ忍ヒ入愛染寶塔ノ上ニテ夜ノホノ〳〵ト明ハテン時々ノ聲ヲ上ヨ城ノ兵閧ノ聲ニ驚テ度ヲ失フ時大手搦手三方ヨリ攻上テ城ヲ追落シ宮ヲ生捕リ奉ルヘシトソ下知シケル

又云（京都兩度軍條）二條師基卿千葉介宇都宮仁科高梨眞如堂ヲ西ヘ打過テ河原ヲ下リ押寄ル其手ノ足輕共走散京中ノ在家數百ケ所ニ火ヲ懸タリケレハ猛火天ニ滿チ翻テ黑煙四方ニ吹覆ソ云々

又云（瓜生擧旗條）瓜生ハ兼テ案ノ圖ニ敵ヲ谷底ヘ帶キ入テ今ハカウト思ケレハ其夜ノ夜半計ニ野伏三千人ヲ後ノ山ヘアケ足輕ノ兵七百餘人左右ヘ差回シテ閧ヲ揚ク云々

曾我物語云かちはら源太さへもん十四五きにてかのしゆくにおりゐたりしか五郎かとほるをみてまうすへきしさい候しはしとゝまりたまへとてあしかるをはしらしむ

應仁記云（舟岡山合戰條）宏浦上カ小者一若ト云足輕縄五六十人ニテ舟岡山ノ後ヘ廻リケリ

應仁別記云安富香河ハ芝ノ藥師安居院口ヘ取向ヒ舟岡山ヘハ山名ノ是豐藥師寺與一浦上美作守成直院ナトノ此山ヲハ一色左京大夫山名相模守被レ持ケル乾北艮三方ヨリ責上ケレトモ此口ヲ小鴨安藝守相控タリ爰浦上カ小者一若ト云足輕賀茂ヨリ紫野正傳寺ノ脇ヨリ讒五六十人ニテ舟岡山ノ後ニ廻リケリ

室町殿物語云城中大に驚きて三好修理大夫十河久馬介岩成權大夫いさ切ていて、敵をおつちらし上俵を退きせむと云この儀然るへしとて都合五百三十餘の足輕をおつたてからめての木戸を開て一同におめいてかゝる

室町殿日記云今里の城夜打の條城中にも引とる事あやうくおもひて何とかはして引のくらんとうしろを見ければ道のほとをへたて、白旗雲路にひるかへりけりあなふしきや誰成らん敵か味方かみて參れとて足輕をはしらせけれは新村の百姓共紙旗に竹の鑓なと相ましへて三百はかり陣取たり

又云細川殿典の要害へ敵よする條四月廿六日戌の刻はかりに和州の四手井有富兵庫頭兩族にて弐千四五百の備をもつて今里上手の原に出張し物見の足輕を度々出しけり城中にも足輕を出し是をあしらひける

東寺執行日記云文明十三年七月此月自三十一日一至二廿三日二三ケ日於二大和一弓矢口同井ハシ口成自院々等一方ハ畠山右衛門介殿かたの足輕負申

又云元龜四年三月十三日池田衆に當寺衆喧嘩を仕雙方ニ口フテニテヤマセテレ事外ニ大敗ヲ仕出乍去先彼方足輕衆當所ニ親類衆共依レ在レ之各致二申分一當座先無事ニ成其已後存分口申間家ヲ一間口口出シ燒申也其外一間戸ヲトチメテ相果申ナリ如レ此果テ已後又陣取ヲ可レ仕候由申間色々詫言致申候無二合點一候歳阿彌ヲ自二寺家一賴被レ申兄朽木彌十郎殿ヲ被レ懸池田久左衛門被レ申處無二別參一候ナリ殊彌十郎殿返狀ヲ被レ出畢

宮參次第云次に家老分の人跡に一人乘也其跡に足輕十人も廿人も押へに立へし

多聞院日記云口の夜今小路家一燒南木戸モヤク寺内ニテ一人切殺了郡山足輕衆ヨリ奈良中南北ヘ百貫文ッヽ屋錢懸了云々

又云永正三年八月十六日古市丹後殿口口口在奈良筒井足輕沙汰而古市山村藤原横井長井以下悉以燒拂了則奈良ヘ入了

中國次亂記云天文九年九月四日吉田ノ郡山ヘ晴久七萬餘人ニテ發向ス郡山ハ大山ナレハ道七口アリ吉田上村ヘ打チ出テ一宇モ不レ殘放火ス同六日太郎丸ノ町ヲ燒拂ヒ足輕軍ニ日ヲ暮ス同十二日後小路ヲ放火スル間モ利方足輕ノ魁渡部太郎左衛門ト尼子方ノ足輕之將本城セリ合本城ウタレ畢ヌ毛利方ノ足輕井原樋爪渡部源十郎討死

荒山合戰記云玄蕃允是ヲ見テ加樣ノ敵ヲハ射手ヲ揃ヘテ射正打物ノ衆ヲ進セヨト下知シケレハ足輕ノ射手共大勢立雙テ般若院ヲ雨ノ降カ如ニ射タリケリ

北條五代記云北條の侍に大石兵次兵衛と云者一首を詠す

樊噲をあさむく武者をあつめても下知につかすは餓鬼におとれりとよみけるを氏政聞及ひ給ひかれは一方の大將とすへき者也と御感有てあしかるを百人あつけ給ひけれは彌此法度を諸侍信しき

新撰信長記云永祿元年五月二十八日ニ二千餘騎ヲ率シ浮野表ニ出張有始メテ對陣ノ事ナレハ先足輕ヲ懸ケ敵ノ樣子ヲ是ハカライ勝負ヲ可レ決

永祿六年諸役人附云足輕衆秋本兵衛尉曾我右衛門尉野垣太郎左衛門尉云々

織田信長譜云天正二年四月信長歸京大坂門跡出二足輕一遮レ路信長擊二破之一使下佐久間信盛陣二於天王寺一以備中大坂上

鴉鳶物語云山城守は云此勢を雜兵眞武者三ッにわけて雜兵をは小畠今藪里にかくしおき野伏ともをは毗沙門堂の大路大原辻にまつへし(中略)雜兵いかにも大勢の粧にて夫防士までもうしろより時をとつとつくりかけは大勢とはいふとも思ひきりたる物はうちあひてもしぬへし馬列牛列は野ともつともいふへからす南へなたれんする所を大原辻より足輕野伏ともによこ矢に射殺させ或は川にひひきて鴉の餌鷹のえうつやうにみし打にせんといへは面面みなさん候とて同しける

聚樂物語云角て山崎の峰を打越給ひて駒をかけすゑ見まはし此所はいかにと仰けれは御足輕の中に此所案内よく存たる者すゝみ出て是は馬つかと申候又あれなるしけみのあなたに敵の馬しるしの見え候所はぬかつかにて候と申上けれは秀吉きこしめしぬかは馬のはみものなりめてたしめてたし

清正記云ある時長濱の町人所へ人をあやまりとりこもる者有中々町中さはかし虎之助右の樣子聞つけ常々傳受の兵法は此時なりとおもひかの町人所へ走行は四方に人みちみちたり大勢のなかをくゝり入狼藉人を打たほし綱をかけ手疵一ケ所もかうふらすからめて出られけりとりこ

もるものは秀吉公足輕に市足久兵衛といふものなり

又云星野武右衛門主計頭に申けるはいさや無理の鐵炮放させんと横合につるへ放しに三百挺の鐵炮をつめかへつめかへ放させけれは侍五人足輕十三人打たほしけれとも敵南山につゐて道をかへ取入るによつて合戰におよはす

樵談治要云昔より天下の亂るゝことはあれとあしるかといふ事は舊記なとにもしるさゝる題目也平家のかふろといふ事をこそめつらしきためしに申付れこのたひはしめて出來れる足輕は超過したる惡黨なりそのゆゑは洛中洛外の諸社諸寺五山十刹公家門跡の滅亡はかれらか所行也かたきのたてこもりたらん所に物狂ては力なしさもなき所々を打やふりあるひは火をかけて財寶をみさくる事はひとへにひる强盜といふへしこれはしかしなから武藝のすたるゝ所にかゝる事は出來れり名あるさふらひのたゝかふへき所をかれらにぬきゝせたるゆゑなるへし口口口人の足輕に一矢に命をおとして口口の耻辱のみならす末代までの瑕瑾をのこせるもありとそ聞えしいつれも主のなき物はあるへからす向後もかゝる事あらはおの〳〵主にかけられて糺明あるへし又士民商人たらは在地に住つけられて罪科あるへき制禁おほかれは千に一もやむ事あるへき

甲陽軍鑑云七つさかりに伊奈衆ことことく陣をはらつてまかりのく氣色を見て板垣信形これをのかさしとおしつめのく敵をくひとめらるゝのく敵は返して馬足輕なとして云々

又云かくて此合戰既に晴信公負給ふとあひ見ゆる所に三州牢人山本勘介かちあしかる廿五人預申御旗本に罷有か各足輕大將衆にわか同心をたのみ勘介は晴信公御前へ參り申上る云々

末森記云付入々ト思召ヨハヨハト足輕ヲ出シ給ヘト城ニモ久瀨但馬守ヲ大將トシテ軍士多籠タレハ少モ足輕不レ出諸卒ノ機ヲ勵トカク城ヲ持堅メ候事肝要トアイシラヒケレハ利家卿先近所悉燒拂ハセ人數ヲ打入玉フ

東遷基業云武田典厩信豐土屋惣藏昌恒は黑瀨に有り又陣を作手に移し各險要に據て神君の歸路を遮り東西より夾擊んとはかりけり神君下知し給ひ敵嶮難をとりて堅陣す卒爾にかゝるへからす足輕をかけて誘はせらるれとも馬場思慮して不レ出故松葉を多く小屋に積置せ火を放し引退く體をなしけれとも馬場不レ出して退けり

又云神君は信長公と軍議ありて諸備の前に柵を付て下知せらるゝは此柵の外へ出て戰へからす敵進みかゝらは鐵炮を以て打とるへし但足輕鐵炮にては敵を間近く引付て打事おほつかなしとて武功の士の中を撰て鐵炮を打せらる

又云城主玄蕃頭家臣成田勝左衛門同喜太郎織田孫左衛門速水五兵衛山口源左衛門等は館に火を掛主從ともに切腹す此外兩日の防戰に死を致す輩には飯田又六郎(中略)森平右衛門等凡八十餘人なり足輕小人又者等の討る、者すへて八百餘人に及へり

松原自休手錄云家康ノ威强ク成テ被レ働ニ東三河一長澤ノ鳥屋カ根ノ城ヘ押寄ス城兵モ出ニ足輕一此時榊原彌平兵衛喰ニ留足輕一退セシト乘廻シ駈レ先家康被レ聞レ之榊原某立ハ威ニ拔群一向後被レ改ニ早介一云々

又云家康三千餘騎ニテ爲ニ後詰一八幡ト佐脇ノ間ヘ押出本能カ原ヘ出攻ニ一ノ宮一勢ニハ不レ構氏眞ノ本陣ノ前ヲ押通リ馬足輕ヲ懸テ氏眞男子ナラハ出テ合戰セヨト匂ケレトモ隱シテ出ル者ナシ

又云翌廿三日ノ朝從ニ濱松一三方原ヘ足輕少々出ル其日ハ穴山押番也有住大學保坂常陸弟掃部雖レ懸ニ馬足輕一敵逃散ス四五討レ首

松隣夜話云謙信公忍カ頭ヲ二ツマテシタ、カニ打玉フ其遺恨ニ依テ一門家族ヲ催シ武州ノ千葉諸黨ヲ語ラヒ幸小勢ノ折節ヲ窺ヒ足輕ヲ掛ケ夜軍ニシ討テ恨ヲ報セント企タル處ナリ謙信公是ハ成田メカ野伏ヲ掛タルニテソ有ン去ニテモ暗夜ト云切所ト云ヒ追詰打果スコト難レ叶

增補家忠日記云慶長五年九月廿四日最上出羽守義光東國ニ於テ景勝カ兵ト戰ヒ利ヲ得ルノ由大坂ニ至テ註進ス其書ニ曰(中略)一同廿二相馬上百五十騎足輕千餘人差越候事云々

○步立射手

太平記云四月三日合戰條厚東加賀守加治源太左衛門尉隅田高橋糟谷土屋小笠原ニ七千餘騎ヲ相副テ西七條口ヘ被レ向自餘ノ兵千餘騎ヲハ惡手(アク)ノ爲ニ殘シテ未六波羅ニ並居タリ其日ノ巳刻ヨリ三方ナカラ同時ニ軍始テ入替入替責戰フ寄手ハ騎馬ノ兵少シテ步立射手多リケレハ小路小路ヲ塞キ鏃ヲ調テ散々ニ射ル六波羅勢ハ步立ハ少シテ騎馬ノ兵多ケレハ懸違懸違敵ヲ中ヘ取籠ントス

又云四條縄手合戰條大將武藏守師直ハ二十餘町引殿ヲ將軍ノ御旗下ニ輪違ノ旗打立テ前後左右ニ騎馬ノ兵二萬餘騎馬回ニ

徒立ノ射手五百人四方十餘町ヲ相支テ如三稻麻一打圍フタリ

○鐵炮足輕

武蔭叢話云秀吉公御意に先年長久手合戰の時中書本多僅五百餘にて少も疲す士卒に下知しけるは爰にて秀吉を喰止討死して上方勢を遲滯させんと有事にて五百の小軍にて秀吉旗本數萬の陣へひら〳〵と挑かけ鐵炮足輕を掛たり云々

192
55

192
55

[illegible]